

# 南陽市遺跡分布調査報告書 (7)

## 市内遺跡分布調査

### 第一次長岡南森遺跡確認調査 (概報)

2019年3月

南陽市教育委員会







# 南陽市遺跡分布調査報告書 (7)

南陽市埋蔵文化財調査報告書第19集

市内遺跡分布調査

第一次長岡南森遺跡確認調査 (概報)

平成31年3月

南陽市教育委員会





経塚山南古墳群（3号墳、北から）



長岡南森遺跡全景（西から）





# 序

この度、「南陽市遺跡分布調査報告書（7）」を発行する運びとなりました。本書は、南陽市教育委員会が平成30年度に国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として各種の開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るために実施した踏査、試掘調査、立会調査等の分布調査の成果及び長岡南森遺跡の第1次確認調査の成果の概要をまとめたものです。

本市には、旧石器時代から中世に至るまで数多くの遺跡が存在します。人々が生活した住居跡・古墳・役所跡・城館等の「遺跡」と、石器や土器等の「遺物」は、大地に埋まっている貴重な文化財であるため「埋蔵文化財」と呼ばれます。埋蔵文化財は、その土地や地域の歴史を明らかにする地域の宝です。歴史と文化を世代を越えて伝え、人々の地域を愛する心やそこに生きる人々の誇りを育む心の糧となるものであり、大切に守っていかなければなりません。

近年は大規模な開発事業こそ減少しておりますが、集合住宅建設や市街地での個人住宅の建て替え等、市民に身近な地域での再開発は継続しております。埋蔵文化財の保護と調整は日常業務となり、その日々の地道な調査の積み重ねが地域の新たな歴史を判明することにつながります。

これまでは開発に対応した調査が主でありましたが、遺跡の年代や性格等、詳細が不明な遺跡について、今後その遺跡内容を積極的に明らかにしていく必要があります。特に市内に数多く存在する古墳の実態解明は今後の大きな課題であり、その中でも今年度から調査を開始した長岡南森遺跡は、本市の古墳時代の様相を知る上で重要な遺跡であり、今後、数年にわたる調査となります。その実態の解明に大いに期待するものであり、市民の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

私たちは、様々な営みの中で土地を利活用し、開発を行うこととなりますが、埋蔵文化財を大切にし、ふるさとの歴史を守ることを常に忘れてはなりません。私たちはどのような文化財があり、それがどのような価値を持つかを明らかにしながら、地域の文化財を保護し、大切に後世へと引き継いでいく責任があります。

最後になりましたが、調査にご指導、ご協力をいただいた関係各位に、厚くお礼を申し上げます。

平成31年3月

南陽市教育委員会

教育長 長濱 洋美



# 凡例

- 1 本報告書は、文化庁の補助を受けて平成 30 年度に南陽市教育委員会が実施した開発事業との調整、遺跡台帳（遺跡地図）整備、長岡南森遺跡確認調査に関する市内遺跡分布調査報告書である。
- 2 調査は南陽市教育委員会が実施した。
- 3 調査期間は、平成 30 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日までである。
- 4 調査体制は次のとおりである。  
調査主任 角田朋行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）  
主 幹 課 社会教育課  
主幹課長 社会教育課長 佐藤賢一  
埋蔵文化財係技能士 佐藤祥一（調査補助員）
- 5 本報告書の作成、執筆は、角田朋行が担当し、遺物実測は、吉田江美子、山田渚が担当した。
- 6 挿図の縮尺はスケールで示した。
- 7 写真図版は任意の縮尺で採録した。
- 8 挿図における踏査範囲は黒線で示し、これによらない場合は各図に個別に示した。なお、薄い灰色の塗りつぶしは遺跡範囲を示す。
- 9 小字名は、近年における字名の統廃合等で変化している場合、地名記録の観点から明治期の地籍図による小字名を記載し、現小字名を括弧書きで記載した。
- 10 本調査にあたっては、次の方々によるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）  
青山博樹、菊池芳朗、菊池強一、佐藤鎮雄、佐藤庄一、門叶冬樹、長井謙治、柳沼賢治、吉野一郎

# 目 次

## I 調査の概要

1 調査の目的と概要	1
2 調査方法	1
3 調査位置図	2
4 調査実施一覧	4

## II 遺跡台帳・遺跡地図整備に係る分布調査（踏査）

1 二色根館跡及び根小屋跡	5
2 金山字五貫場（糠塚）	8
3 元中山字諏訪原、字北の沢（北の沢館跡）	9
4 元中山字竹原	10
5 元中山字大貝、字花窪	11
6 天ヶ澤館跡	12
7 日影街道（川樋北沢遺跡、岩部山館跡）	13
8 松沢字赤石山	14
9 木之実小屋遺跡	15
10 梨郷字平野	16
11 向畑 C 遺跡	17
12 金山字萱ノ入他	18
13 吉野川河道内	19
14 池黒字八幡田	20
15 経塚山南古墳群	21
16 天王山古墳群・狩野山古墳	23

## III 試掘調査

1 宮内字一本杉	25
2 諏訪原 C 遺跡	26
3 長岡山遺跡・稻荷森古墳	27
4 漆山字西屋敷一	30
5 大橋城跡	31
6 関根館跡	33
7 三間通字東六角	35
8 矢ノ目館跡 (1)	36
9 漆山字東高堰一 (1)	37
10 上河原遺跡	38
11 上大作裏遺跡 (1)	40
12 観音堂遺跡	41
13 漆山字東高堰一 (2)	42
14 沢田遺跡 (1)	44
15 清水上遺跡	45

16	矢ノ目館跡 (2)	47
17	沢田遺跡 (2)	49
18	櫛塚字辻ノ前	51
19	馬場遺跡	52
20	矢ノ目館跡 (3)	53
21	上大作裏遺跡 (2)	55
IV 立会調査		
1	漆山字東寺町三 (1)	57
2	宮内字黒木一	58
3	宮内字塔ノ越一	59
4	宮内字内原四	60
5	若狭郷屋字三百刈	61
6	竹原字石仏	62
7	漆山字東寺町三 (2)	63
8	和田字東前田	64
9	宮内字鐘小屋二	65
10	長岡山遺跡・長岡山東遺跡	66
11	漆山字備後塚	67
12	若狭郷屋字浦城	68
V 梨郷地区の古墳群等測量調査		
1	調査概要と目的	69
2	調査方法	69
3	測量方法と経過	69
4	成果	
	(1) 古墳群について	70
	(2) 中世城館址について	74
VI 第一次長岡南森遺跡確認調査 (概報)		
	凡例	78
	第1章 調査の経緯と目的	79
	第2章 遺跡の位置と環境	83
	第3章 調査の概要	86
	第4章 理化学分析	97
	第5章 調査結果	104
	第6章 まとめと課題	107

# 挿図目次

第 1 図	調査位置図	2	第 47 図	大橋城跡開発予定位置図	31
第 2 図	二色根館跡踏査範囲図	6	第 48 図	大橋城跡トレンチ配置図	31
第 3 図	二色根館跡略図・根小屋概要図	7	第 49 図	大橋城跡 TT1 断面図・平面図	32
第 4 図	金山字五貫場踏査範囲図	8	第 50 図	関根館跡開発予定位置図	33
第 5 図	元中山字諏訪原、字北の沢踏査範囲図	9	第 51 図	関根館跡トレンチ配置図	33
第 6 図	北の沢館跡略図	9	第 52 図	関根館跡柱状図	33
第 7 図	元中山字竹原踏査範囲図	10	第 53 図	関根館跡 TT1 平面図・断面図	34
第 8 図	字竹原略図	10	第 54 図	関根館跡と今次開発予定地	34
第 9 図	元中山字大貝、字花窪踏査範囲図	11	第 55 図	三間通字東六角開発予定位置図	35
第 10 図	天ヶ澤館跡範囲図	12	第 56 図	三間通字東六角試掘穴配置図	35
第 11 図	天ヶ澤館跡略図	12	第 57 図	三間通字東六角柱状図	35
第 12 図	日影街道踏査範囲図	13	第 58 図	矢ノ目館跡 (1) 開発予定位置図	36
第 13 図	日影街道切通し周辺略図	13	第 59 図	矢ノ目館跡 (1) 試掘穴配置図	36
第 14 図	川樋北沢遺跡出土遺物	13	第 60 図	矢ノ目館跡 (1) 柱状図	36
第 15 図	赤石山踏査範囲図	14	第 61 図	矢ノ目館跡 (1) 出土遺物	36
第 16 図	木之実小屋遺跡踏査範囲図	15	第 62 図	漆山字東高堰一 (1) 開発予定位置図	37
第 17 図	明治 7 年字弁天字限図	15	第 63 図	漆山字東高堰一 (1) 試掘穴配置図	37
第 18 図	木之実小屋遺跡出土遺物	15	第 64 図	漆山字東高堰一 (1) 柱状図	37
第 19 図	梨郷字平野踏査範囲図	16	第 65 図	漆山字東高堰一 (1) 平面図	37
第 20 図	向畑 C 遺跡踏査範囲図	17	第 66 図	上河原遺跡開発予定位置図	38
第 21 図	向畑 C 遺跡マウンド位置図	17	第 67 図	上河原遺跡トレンチ配置図	38
第 22 図	金山字萱ノ入他踏査範囲図	18	第 68 図	上河原遺跡柱状図	38
第 23 図	吉野川河道踏査範囲図	19	第 69 図	上河原遺跡 TT1 ～ 3 平面図	39
第 24 図	池黒字八幡田踏査範囲図	20	第 70 図	上大作裏遺跡 (1) 開発予定位置図	40
第 25 図	池黒字八幡田字限図	20	第 71 図	上大作裏遺跡 (1) トレンチ配置図	40
第 26 図	経塚山南古墳群踏査範囲図	22	第 72 図	上大作裏遺跡 (1) 柱状図	40
第 27 図	経塚山南古墳群赤色立体地図	22	第 73 図	上大作裏遺跡 (1) 平面図	40
第 28 図	天王山 21 号墳踏査範囲図	24	第 74 図	観音堂遺跡開発予定位置図	41
第 29 図	天王山 21 号墳赤色立体地図	24	第 75 図	観音堂遺跡試掘穴配置図	41
第 30 図	狩野山古墳踏査範囲図	24	第 76 図	観音堂遺跡柱状図	41
第 31 図	狩野山古墳赤色立体地図	24	第 77 図	漆山字東高堰一 (2) 開発予定位置図	42
第 32 図	宮内字一本杉開発予定位置図	25	第 78 図	漆山字東高堰一 (2) トレンチ配置図	42
第 33 図	宮内字一本杉トレンチ配置図	25	第 79 図	漆山字東高堰一 (2) 柱状図	43
第 34 図	宮内字一本杉柱状図	25	第 80 図	沢田遺跡 (1) 開発予定位置図	44
第 35 図	諏訪原 C 遺跡開発予定位置図	26	第 81 図	沢田遺跡 (1) トレンチ配置図	44
第 36 図	諏訪原 C 遺跡トレンチ配置図	26	第 82 図	沢田遺跡 (1) 柱状図	44
第 37 図	諏訪原 C 遺跡柱状図	26	第 83 図	清水上遺跡開発予定位置図	45
第 38 図	長岡山遺跡・稲荷森古墳開発予定位置図	27	第 84 図	清水上遺跡トレンチ配置図	45
第 39 図	長岡山遺跡・稲荷森古墳トレンチ配置図	28	第 85 図	清水上遺跡 TT1 平面図・断面図	46
第 40 図	旧丘陵地形推定図	28	第 86 図	矢ノ目館跡 (2) 開発予定位置図	47
第 41 図	長岡山遺跡・稲荷森古墳柱状図	28	第 87 図	矢ノ目館跡 (2) トレンチ配置図	47
第 42 図	長岡山遺跡出土遺物	28	第 88 図	矢ノ目館跡 (2) 平面図・断面図	48
第 43 図	長岡山遺跡・稲荷森古墳 TT1 ～ 3 断面図	29	第 89 図	矢ノ目館跡 (2) 柱状図	48
第 44 図	漆山字西屋敷一開発予定位置図	30	第 90 図	沢田遺跡 (2) 開発予定位置図	49
第 45 図	漆山字西屋敷一トレンチ配置図	30	第 91 図	沢田遺跡 (2) トレンチ配置図	49
第 46 図	漆山字西屋敷一柱状図	30	第 92 図	沢田遺跡 (2) 柱状図	49

第 93 図	沢田遺跡 (2)TT1 平面図・断面図	50	第 138 図	長岡南森遺跡の位置	84
第 94 図	柵塚字辻ノ前開発予定位置図	51	第 139 図	長岡南森遺跡周辺遺跡図	85
第 95 図	柵塚字辻ノ前トレンチ配置図	51	第 140 図	第 1 トレンチ北壁断面図・出土遺物高	88
第 96 図	柵塚字辻ノ前柱状図	51	第 141 図	第 1 トレンチ平面図・遺物出土状況	89
第 97 図	馬場遺跡開発予定位置図	52	第 142 図	第 1 トレンチ土壌第 36 層の遺物出土状況	90
第 98 図	馬場遺跡トレンチ配置図	52	第 143 図	第 1 トレンチ土壌の遺物出土状況	90
第 99 図	馬場遺跡 TT1 平面図・断面図	52	第 144 図	第 1 トレンチ焼土遺構位置図	91
第 100 図	矢ノ目館跡 (3) 開発予定位置図	53	第 145 図	第 1 トレンチ焼土遺構平面図・断面図	91
第 101 図	矢ノ目館跡 (3) トレンチ配置図	53	第 146 図	第 2 トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況	92
第 102 図	矢ノ目館跡 (3) 柱状図	53	第 147 図	長岡南森遺跡出土遺物 (縄文土器)	93
第 103 図	矢ノ目館跡縄張図と開発予定地	53	第 148 図	長岡南森遺跡第 1 トレンチ (低地) 出土遺物	94
第 104 図	矢ノ目館跡 (3) 平面図	54	第 149 図	長岡南森遺跡第 1 トレンチ (土壌) 出土遺物	95
第 105 図	矢ノ目館跡 (3)TT1 断面図 (西壁)	54	第 150 図	長岡南森遺跡第 2 トレンチ出土遺物	96
第 106 図	上大作裏遺跡 (2) 開発予定位置図	55	第 151 図	検出された造成地形	105
第 107 図	上大作裏遺跡 (2) 試掘穴配置図	55			
第 108 図	上大作裏遺跡 (2) 柱状図	55			
第 109 図	漆山字東寺町三 (1) 開発予定位置図	57			
第 110 図	宮内字黒木一開発予定位置図	58			
第 111 図	宮内字黒木一柱状図	58			
第 112 図	宮内字塔ノ越一開発予定位置図	59			
第 113 図	宮内字塔ノ越一柱状図	59			
第 114 図	宮内字内原四開発予定位置図	60			
第 115 図	若狭郷屋字三百刈開発予定位置図	61			
第 116 図	若狭郷屋字三百刈柱状図	61			
第 117 図	竹原字石仏開発予定位置図	62			
第 118 図	漆山字東寺町三 (2) 開発予定位置図	63			
第 119 図	漆山字東寺町三 (2) 柱状図	63			
第 120 図	和田字東前田開発予定位置図	64			
第 121 図	和田字東前田柱状図	64			
第 122 図	宮内字鐘小屋二開発予定位置図	65			
第 123 図	長岡山遺跡・長岡山東遺跡開発予定位置図	66			
第 124 図	長岡山遺跡・長岡山東遺跡柱状図	66			
第 125 図	漆山字備後塚開発予定位置図	67			
第 126 図	漆山字備後塚柱状図	67			
第 127 図	若狭郷屋字浦城開発予定位置図	68			
第 128 図	若狭郷屋字浦城柱状図	68			
第 129 図	測量調査範囲図	69			
第 130 図	天王山古墳群位置図	70			
第 131 図	竜樹山古墳群位置図	71			
第 132 図	稲荷山古墳群位置図	72			
第 133 図	経塚山古墳群位置図	73			
第 134 図	梨郷上館略図	74			
第 135 図	竜樹山館略図	75			
第 136 図	竈山館略図	76			
第 137 図	長岡南森遺跡グリット配置図及び トレンチ位置図	81			

# 図版目次

図版 1	二色根館跡、根小屋	1
図版 2	金山字五貫場、元中山字諏訪原、北の沢館跡、元中山字竹原	2
図版 3	元中山字大貝、北沢遺跡、日影街道、天ヶ澤館跡	3
図版 4	松沢字赤石山、木之実小屋遺跡	4
図版 5	梨郷字平野、向畑 C 遺跡、金山字萱ノ入	5
図版 6	金山字萱ノ入、吉野川内、池黒字八幡田	6
図版 7	池黒字八幡田、経塚山南古墳群	7
図版 8	経塚山南古墳群、天王山古墳群、狩野山古墳、宮内字一本杉	8
図版 9	宮内字一本杉	9
図版 10	宮内字一本杉、諏訪原 C 遺跡、長岡山遺跡・稲荷森古墳	10
図版 11	長岡山遺跡・稲荷森古墳、漆山字西屋敷一、大橋城跡、関根館跡	11
図版 12	三間通字東六角、矢ノ目館跡 (1)	12
図版 13	漆山字東高堰一 (1)、上河原遺跡、上大作裏遺跡	13
図版 14	上大作裏遺跡	14
図版 15	観音堂遺跡、漆山字東高堰一 (2)	15
図版 16	漆山字東高堰一 (2)	16
図版 17	漆山字東高堰一 (2)、沢田遺跡 (1)	17
図版 18	清水上遺跡、矢ノ目館跡 (2)	18
図版 19	沢田遺跡 (2)、柵塚字辻ノ前、馬場遺跡	19
図版 20	矢ノ目館跡 (3)、上大作裏遺跡、漆山字東寺町三 (1)、宮内字黒木一、宮内字塔ノ越	20
図版 21	宮内字内原四、若狭郷屋字三百刈、竹原字石仏、漆山字東寺町三 (2)、和田字東前田、宮内字鐘小屋二、 長岡山遺跡・長岡山東遺跡	21
図版 22	漆山字備後塚、若狭郷屋字浦城、長岡南森遺跡	22
図版 23	長岡南森遺跡	23
図版 24	長岡南森遺跡	24



# 南陽市遺跡分布調查報告書（7）



# I 調査の概要

## 1 調査の目的と概要

近年は、住宅地造成と集合住宅建設が増加傾向にあり、各種開発との調整を図り遺跡の保護を図るための試掘調査及び立会調査を実施した。

本市では平成 30 年度現在で 306 ケ所の遺跡を把握している。平成 26 年時点に比べ 49 ケ所もの遺跡が新たに確認され、着実に分布調査の成果が上がってきているが、未調査地域もまだまだ残されている。市域の 7 割を占める山間地や古くからの住宅地は殆ど手つかずである。また、周知の遺跡でも発見が古く容易に立ち入ることのできない山間部の遺跡や古墳群等、情報が少なく内容が不明な遺跡も存在するため、遺跡台帳整備のための調査を継続して実施している。周知の遺跡でも、古墳の可能性を検討すべきとなった長岡南森遺跡や縄文草創期の低湿地遺跡であることが判明した北町遺跡など、保存目的や学術目的による調査も始まった。長岡南森遺跡については今年度から確認調査が開始され、北町遺跡については東北芸術工科大学により初めての学術調査が実施された。

平成 30 年 4 月から 12 月までの開発行為に伴う遺跡所在の有無に関する照会は計 75 件であった。踏査は 32 件、試掘調査は 19 件、工事立会は 19 件である。試掘調査は、埋蔵文化財包蔵地及びその隣接地・分布調査未実施地において実施に努めた。工事立会は、工期に余裕がない場合や工事面積が狭い場合、埋蔵文化財を破壊する恐れが少ないと判断された場合及び分布調査未実施地において実施した。

## 2 調査方法

### (1) 踏査及び分布調査

踏査は、開発事業計画地の範囲内及びその周辺の踏査を行い、遺跡の範囲と開発予定区域の平面的な関係を確認する調査である。分布調査は、主に遺跡台帳整備のための踏査である。いずれも事前・事後に周知の資料により、地形状況や従来報告等の内容を確認している。GPS 付のカメラやスマートフォンを活用し、簡易な位置情報を記録しながら踏査した。遺跡台帳の整備を図るため重要遺跡の測量調査を行った。

### (2) 試掘調査

試掘調査は、埋蔵文化財の有無を確認するための部分的な発掘調査である。本市では遺構や遺物の平面的な分布範囲や遺構確認面までの深さ等を把握し、遺跡内容の把握を行う確認調査の側面も有する。開発予定地内にグリットを設定のうえ試掘溝あるいは試掘穴を配し、表土を人力や重機で除去後、堆積土を人力で除去し、遺構の有無を確認した。

### (3) 立会調査

立会調査は、基本的に開発事業による遺跡への影響が軽微な場合に、工事施工に立ち会って実施し、遺構や遺物が発見された場合には記録保存を行う調査である。工事の進捗にあわせ、土工事を行う際に立ち会いを行い、遺構・遺物の確認及び土層の確認を行った。掘削深度は工事の掘底面である。遺跡未確認地の場合もできるだけ工事立ち合いを行い遺跡の把握に努めた。

### (4) 確認調査

埋蔵文化財包蔵地の範囲・性格内容等の概要を把握する部分的な発掘調査である。古墳時代の重要遺跡である長岡南森遺跡について実施した。

### 3 調査位置図



#### <踏査>

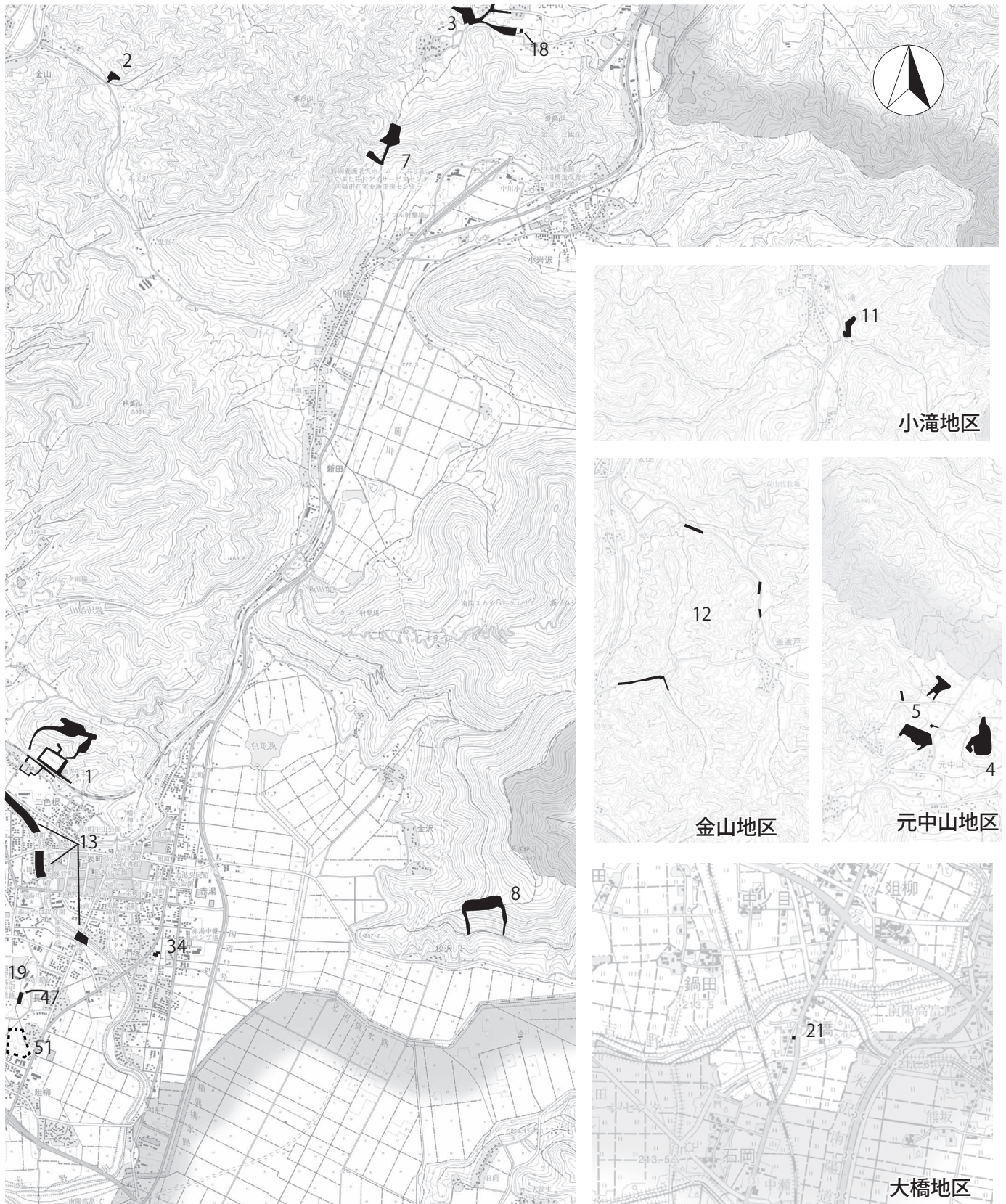
- 1 二色根館跡及び根小屋跡
- 2 金山字五貫場（糠塚）
- 3 元中山字諏訪原、字北の沢
- 4 元中山字竹原
- 5 元中山字大貝、字花窪
- 6 天ヶ澤館跡
- 7 日影街道（川樋北沢遺跡、岩部山館跡）
- 8 松沢字赤石山

- 9 木之実小屋遺跡
- 10 梨郷字平野
- 11 向畑 C 遺跡
- 12 金山字萱ノ入
- 13 吉野川河道内
- 14 池黒字八幡田
- 15 経塚山南古墳群
- 16 天王山古墳群、狩野山古墳

#### <試掘調査>

- 17 宮内字一本杉
- 18 諏訪原 C 遺跡
- 19 長岡山遺跡・稻荷森古墳
- 20 漆山字西屋敷一
- 21 大橋城跡
- 22 関根館跡
- 23 三間通字東六角
- 24 矢ノ目館跡（1）

- 25 漆山字東高堰（1）
- 26 上河原遺跡
- 27 上大作裏遺跡（1）
- 28 観音堂遺跡
- 29 漆山字東高堰（2）
- 30 沢田遺跡（1）
- 31 清水上遺跡
- 32 矢ノ目館跡（2）
- 33 沢田遺跡（2）



- 34 柵塚字辻ノ前
- 35 馬場遺跡
- 36 矢ノ目館跡 (3)
- 37 上大作裏遺跡 (2)
- <立会調査>
- 38 漆山字東寺町三 (1)
- 39 宮内字黒木一
- 40 宮内字塔ノ越一
- 41 宮内字内原四
- 42 若狭郷屋字三百刈
- 43 竹原字石仏
- 44 漆山字東寺町三 (2)
- 45 和田字東前田
- 46 宮内字鐘小屋二
- 47 長岡山遺跡・長岡山東遺跡
- 48 漆山字備後塚
- 49 若狭郷屋字浦城

- <測量調査>
- 50 梨郷地区の古墳群
- <長岡南森遺跡確認調査>
- 51 長岡南森遺跡

■ : 調査範囲 0 1 km

第1図 調査位置図 S=1/40000  
国土地理院発行 2万5千分の1地形図使用

#### 4 平成30年埋蔵文化財分布・試掘・立会調査実施一覧（地区別）

地区	事業区分	現場調査期間	遺跡名等	場所	区分	試掘結果等
赤湯	分布調査	3月28日、4月10日	二色根館跡	二色根字壁の内、根小屋浦、南京	踏査	町割確認、略図修正
	分布調査	4月13日	松沢古墳群	松沢字赤石山	踏査	鉢山跡（坑道）
	公共施設整備	4月24～26日	長岡山遺跡、稲荷森古墳	長岡字西田中西	試掘	旧地形確認、石器等
	民間開発	6月8日	大橋城跡	大橋字町屋敷	試掘	大橋城本丸西堀
	民間開発	6月13日	東六角遺跡	三間通字東六角	試掘	なし
	民間開発	6月25日	蒲生田山古墳群	上野字山居沢山	踏査	なし
	分布調査	6月29日	長岡山東遺跡	長岡字西田中	踏査	なし
	分布調査	8月13日	未確認	二色根地内（吉野川河道内）	踏査	なし
	分布調査	8月16日	長岡山遺跡	長岡字西田中西	踏査	土師器等
	下水道整備	8月23日	長岡山遺跡・長岡山東遺跡	長岡字西田中、西田中西	立会	古赤色土層
	分布調査	8月28日	未確認	二色根地内（吉野川河道内）	踏査	なし
	分布調査	9月14日	未確認	柵塚（吉野川花台橋付近）	踏査	なし
	分布調査	10月24日	未確認	赤湯字石田（吉野川）	踏査	なし
	公共施設整備	10月25日	長岡山遺跡	長岡字西田中西	立会	なし
	民間開発	10月26日	未確認	柵塚字辻ノ前	試掘	須恵器片
	民間開発	11月6日	未確認	赤湯字森一	立会	なし
	民間開発	12月7日	未確認	二色根字上氷堂	立会	なし
中川	民間開発	3月27、29日	諏訪原C遺跡	元中山字諏訪原	試掘	なし
	分布調査	3月29日、4月4日	北の沢館跡	元中山字北の沢	踏査	新規館跡、略図作成
	分布調査	4月5日	未確認	元中山字竹原	踏査	城館址関連か
	分布調査	4月10日、11月29日	未確認	元中山字大貝、字花窪	踏査	なし
	分布調査	4月12日	岩部山館跡	川樋字日影	踏査	日影街道切通し付近の曲輪
	市道整備	7月10日	未確認	川樋字岩屋堂	立会	なし
	沖郷	民間開発	6月8日	関根館跡	関根字屋敷	試掘
民間開発		6月13日	矢ノ目館跡	郡山字北的	試掘	土壌、土師器、須恵器環
公共施設整備		6月22日	上河原遺跡	高梨字上河原 他	試掘	ピット等、土師器、須恵器
民間開発		7月9日	未確認	若狭郷屋字三百刈	立会	なし
民間開発		7月11日	関根館跡	関根字屋敷	立会	なし
市道整備		7月18日	観音堂遺跡	蒲生田字高畑・字関口前等	試掘	なし
民間開発		8月3日	未確認	萩生田字八景	踏査	土師器、中世陶器
民間開発		8月10日	矢ノ目館跡	郡山字北的	立会	なし
公共施設整備		8月30日	沢田遺跡	若狭郷屋字樋ノ越	試掘	土壌、土師器、須恵器
民間開発		10月2日	清水上遺跡	蒲生田字町屋敷	試掘	掘立柱建物跡
民間開発		10月10日	矢ノ目館跡	郡山字並柳	試掘	溝跡、須恵器、器台
民間開発		10月18日	沢田遺跡	島貫字上西原	試掘	掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡
公共施設整備		10月25日	沖田館跡	沖田字館ノ内	立会	なし
民間開発		11月21日	矢ノ目館跡	郡山字砂原	試掘	堀跡
民間開発		12月11日	未確認	郡山字長面五	立会	なし
民間開発		平成31年2月13日	沢田遺跡	島貫字六角	立会	なし
梨郷		分布調査	4月13日	梨郷上館跡	梨郷字上館	踏査
	分布調査	4月16日	稲荷山古墳群	梨郷字稲荷山	踏査	形状確認
	民間開発	6月14日	平野山田遺跡	梨郷字平野	踏査	なし
	民間開発	6月26日	上大作裏遺跡	和田字甲大作	試掘	ピット
	民間開発	7月11日	竹原字石仏	竹原字石仏	立会	縄文土器、須恵器
	民間開発	8月3日	片岸館跡	和田字東前田	踏査	須恵器
	民間開発	8月10日	未確認	和田字東前田	立会	なし
	民間開発	11月21日	上大作遺跡	砂塚字中大作二	試掘	なし
	分布調査	11月21、22日	天王山古墳群等	梨郷、竹原、和田地区	踏査	古墳
	宮内	公共施設整備	3月27、28日	宮内字一本杉	宮内字一本杉	試掘
分布調査		4月5日	丸山館跡	宮内字向山三	踏査	形状確認
民間開発		5月29日	未確認	宮内字黒木	立会	なし
分布調査		6月11日	宮沢城跡	宮内字瘡瘡神堂	踏査	家型板碑
民間開発		6月28日	未確認	宮内字塔ノ越一	立会	なし
民間開発		7月6日	未確認	宮内字内原四	立会	なし
市道整備		8月13日	未確認	宮内字鐘小屋二	立会	なし
民間開発		11月14日	馬場遺跡	宮内字馬場一	試掘	ピット、溝
金山	分布調査	3月28日	未確認	金山字南沢一	立会	釜渡戸石産出地
	分布調査	3月28日	未確認（糠塚）	金山字五貫場	踏査	「糠塚」の位置を確認
	分布調査	4月11日	石切山城、天ヶ沢館跡	金山字寺裏等、字天ヶ沢	踏査	略図修正
	分布調査	7月5日	未確認	金山字萱ノ入山	踏査	近代採石場跡
	分布調査	8月28日	未確認	金山字黒在家	踏査	なし
	分布調査	9月19日	未確認	金山字萱入山	踏査	なし
吉野	分布調査	6月29日	向畑C遺跡	小滝字向畑	踏査	マウンド、炭窯跡
漆山	民間開発	4月17日	未確認	漆山字東寺町三	立会	なし
	民間開発	4月20日	木之実小屋遺跡	池黒字木之実小屋	踏査	土師器
	民間開発	4月27日	西屋敷一遺跡	漆山字西屋敷一	試掘	縄文土器
	民間開発	6月15日	漆山字東高堰	漆山字東高堰	試掘	ピット、土師器
	市道整備	7月25日	未確認	漆山字東寺町三	立会	なし
	民間開発	7月30、31日	未確認	漆山字東高堰一	試掘	弥生土器、土師器、須恵器
	分布調査	10月23日	未確認	池黒字八幡田～字庚塚・字鈴振田	踏査	なし
	公共施設整備	10月23日	未確認	漆山字備後塚、若狭郷屋字浦城	立会	なし

## II 遺跡台帳・遺跡地図整備に係る分布調査（踏査）

### 1 二色根館跡及び根小屋跡

(1) 調査日 平成30年3月20日、28日、4月10日

(2) 調査場所 南陽市二色根字鍛冶屋敷、字根小屋、字根小屋前、字壁の内、字根小屋浦、字南京、字南京観音林

#### (3) 調査目的

対象地は、周知の二色根館跡及びその麓に位置する。平成29年度に作成した赤色立体地図により二色根館跡一帯の地形が明らかになったことから、赤色立体地図と字限図を元に改めて館跡の略図を見直し、さらに根小屋集落の町割りを検討するため確認を行う。

#### (4) 調査方法及び内容

地図及び字限図から地割りを想定し、現況地形を観察、遺構の有無確認及び写真記録等を行う。赤色立体地図から略図用原図を作成のうえ現地踏査を行い略図を作成する。

#### (5) 調査結果（根小屋地域）

調査地は、二色根山の南山麓に位置し吉野川旧河道左岸にあたる。字限図では根小屋に相当する地域は南辺を堀跡で区画され、その内側の町割りは方形区画群からなる。この方形区画群はほぼ同面積で突出した大きさの区画がないことから、居館がこの範囲にあったとすれば領主の優位性が際立っていない横並びの状況を反映しているとも推測される。

##### ①根小屋相当地域（JR線路より南側）

根小屋地域の南方に吉野川の旧河道による低湿地が西から東へ続いていることが確認できる。旧河道は2つの流路があると思われる。字根小屋の南方には水路で区画される低平なテラスが数段見られる。字根小屋の南端は切岸となっており、字限図から本来堀に面していたと思われる。現状は堀が水田等になっているとみられ、堀を確認することはできない。字壁の内の範囲では字限図において、小段か土塁とみられる地割が見られる範囲に沿って現在は線路になっており、南北に土地が分断されている。線路沿いに南側を踏査した。宅地裏の畑地で中世とみられる土器片を表採した。字根小屋浦の南西端は尾根から続く丘になっており、丘の南側斜面に竪堀状の掘り込みが確認される。さらにこの堀の北端から山裾にかけては盛土が残っており根小屋の西端を区画する土塁跡の可能性もある。

##### ②根小屋相当地域（JR線路より北側）

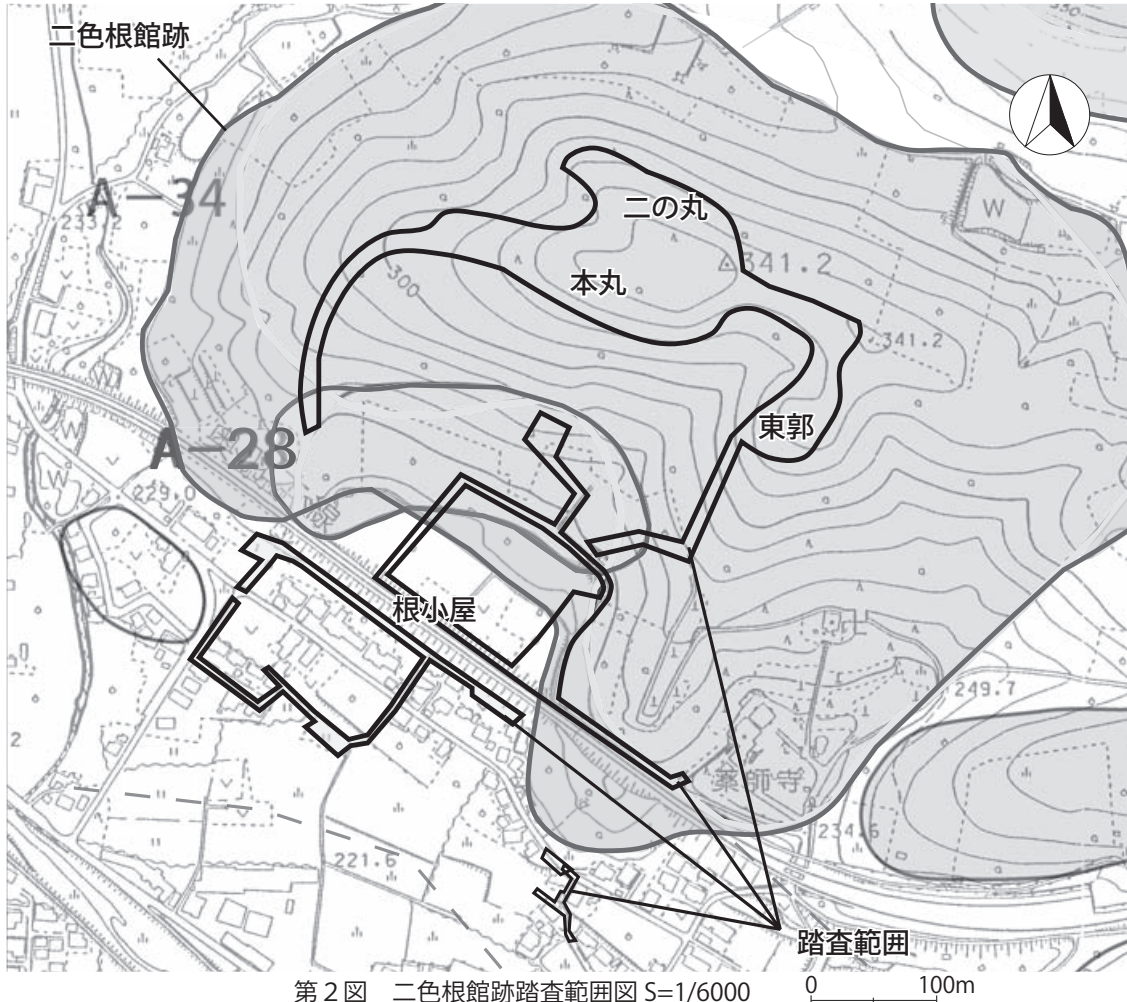
調査地は、二色根山の南山麓に位置する。字限図では方形区画からなる地割りが読み取られる。方形区画は面積的にはほぼ同面積であるが、現地踏査では、実際は高低差があることが確認された。中央付近の区画が一番高く東西の区画は1段低い、中央付近の区画が方形区画群の中でも特別な区画である可能性が考えられる。

字壁の内では、山裾にかつて墓地であった壇状の地形があり、その下方では北東から南西に流れる溝に沿って地膨れが見られ、その範囲にのみ白色粘土の散乱がみられる。字名の「壁」の由来となった築地や土塁の跡である可能性がある。字壁の内付近では須恵器が表採される。二色根古墳群の範囲が広がる可能性もあるが、地形的には窯跡の可能性も考えておく必要がある。かつて墓地があったことや和当内観音の別当であった観音寺が薬師寺の西にあったという記録があること、さらに字壁の内の北側の字名が「南京観音林」であることなどからすれば、この付近に観音寺があった可能性が考えられる。

## (6) 調査結果（二色根館跡、二色根山）

これまでの縄張図と赤色立体地図をベースに元図を作成のうえ、それらに解釈の違いが生じている地点に留意しつつ現地踏査を行った。その結果、赤色立体地図は信頼性が高いことを確認できたが、今回の精度では、高さ 30cm 以下の地形変化の把握は難しい所も見受けられた。特に堀跡には松枯れ対策で伐採された丸太が集積されている地点があり、それがノイズとなっている所もある。しかしながら、赤色立体地図によって二色根山の東に位置する秋葉山付近に従来知られていなかった堀切等が存在する可能性が高くなり、根小屋式山城である二色根館の実態解明が一步進んだと言える。

踏査は、二色根山南西の西口から登坂し、西側の堀切等を確認、南斜面側に周り、大手口方向の道と虎口・曲輪等を確認しつつ、本丸南側の堀を東へ進み、本丸東南角の土橋状遺構から本丸内に入った。その後、本丸北側の階段状曲輪群、二の丸の北西の部分踏査し、その北端に塚と石祠があることを確認した。その後、石垣の有無について本丸外周を廻りながら確認した。石垣状のものは、特に本丸北側の堀斜面上部で見られる。その他の石材の分布状況は本丸でも東半、やや高まっている範囲の肩部にみられた。これらが石垣だとすれば破城により破壊されている状況も考えられるが、地山にも岩塊が混じる土地柄であるため、石垣かどうかは慎重に判断しなければならない。しかしながら本丸北側斜面では石が横に並び、人工的に積んである印象を受ける。本丸から二の丸の南～東側に移動し、曲輪の形状や土塁を確認した。二の丸の櫓台とされるマウンドを確認後に、二の丸南東角から東郭に移動した。東郭内の曲輪群は、戦時中に松根油採取のために掘り返された場所であると伝わっており、広範囲に改変を受けているとみられる。







第3図 二色根館跡略図・根小屋概要図 S=1/8000 0 200m ( ) は字名



二色根館跡 (赤色立体地図鳥瞰、南から)

## 2 金山字五貫場（糠塚）

(1) 調査日 平成30年3月28日

(2) 調査場所 南陽市金山字五貫場

### (3) 調査目的

地元で糠塚と呼ぶ小マウンドがあることが知られていたが、これまで現地確認ができなかったことから、マウンドの位置を確認するため、位置の把握と写真撮影を行う。

### (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

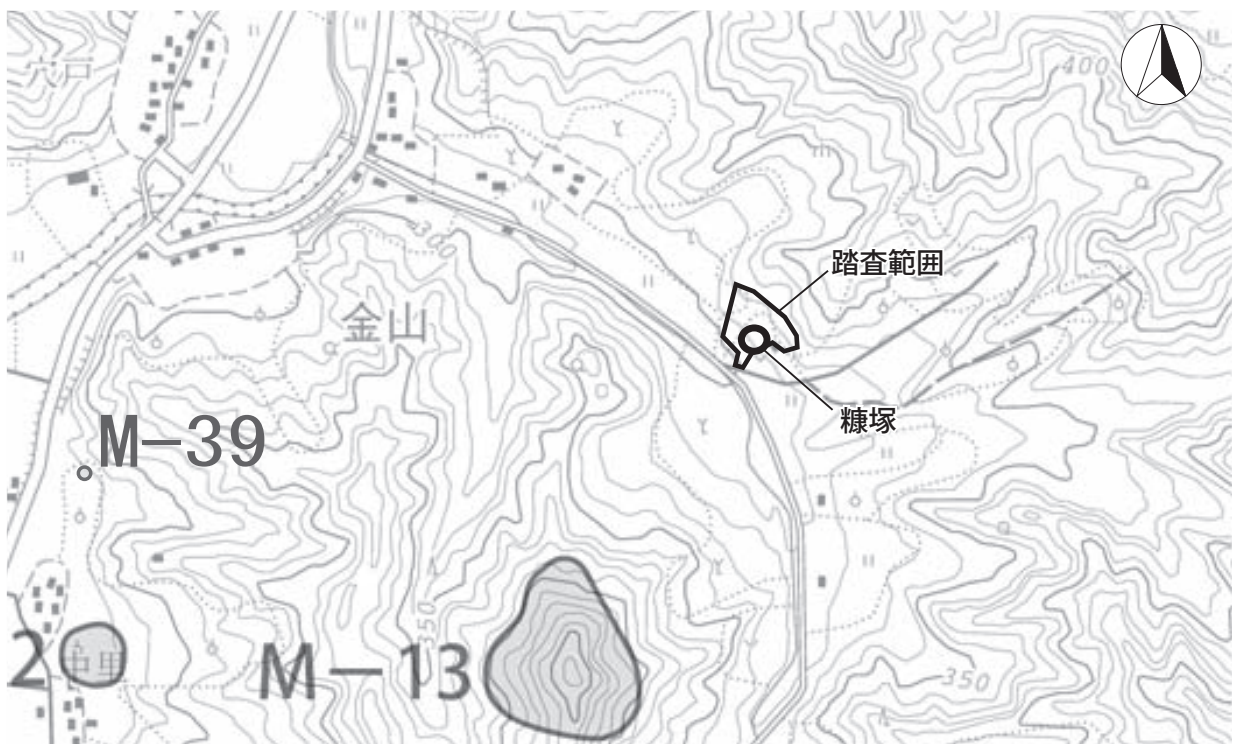
### (5) 調査結果

対象地は金山地区の東に位置する山地で、山の南斜面にあたる。平成27年6月にも現地踏査を実施したが、草が繁茂し、塚の存在を確認できなかった。既に失われたという可能性も考えられていたが、今回ようやく塚を確認することができた。

塚は、枝尾根の先端部、尾根が緩斜面に変わる地点で、両側から小さな谷川が流れ込む位置に所在し、尾根側は溝状の落込みによって断ち切られている。塚の平面形は南北にやや長い楕円状である。積雪があり塚の頂上は見えないが、概ね土饅頭型に見える。塚の傾斜角度はやや緩い。マウンド頂が平坦でないことや傾斜角度等からすれば塚と思われる。小谷川によって生じた自然地形の可能性もあるが、山岳信仰等に関わる中世・近世の塚という可能性も残る。

昭和60年代に市史編さん事業による分布調査で塚上をボーリングステッキで探査したが、内部には石材等は確認されなかったとされる。また、金山歴史研究会資料によれば、糠塚は、縦12m、横9m、高さ3mと記されている。

さらに類似の塚がないか糠塚の周辺斜面を踏査したが、とくに塚や遺構らしきものは確認できなかった。



第4図 金山字五貫場踏査範囲図 S=1/10000

0 200m

### 3 元中山字諏訪原、字北の沢（北の沢館跡）

- (1) 調査日 平成30年3月29日、4月4日
- (2) 調査場所 南陽市元中山字諏訪原、字北の沢
- (3) 調査目的

調査地は、遺跡分布調査未実施地である。遺跡台帳整備のため遺跡の有無を確認する。岩部山館跡の北西山裾の地形の把握と城館関連遺構の確認を行う。

#### (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。主に歩測により計測し、略図を作成する。

#### (5) 調査結果

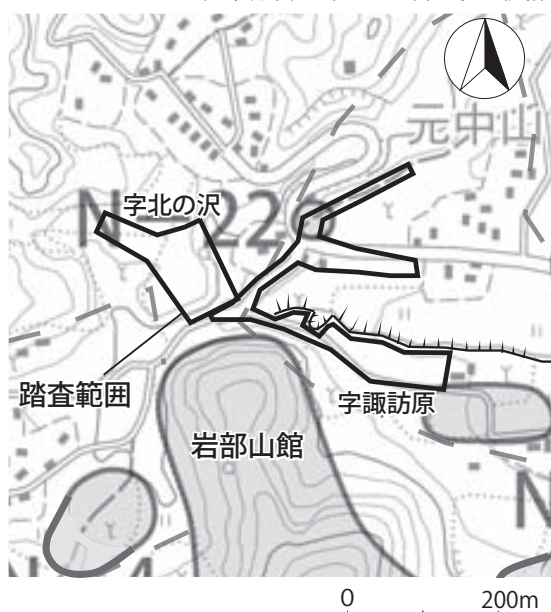
##### ①字諏訪原

諏訪原C遺跡西側の畑地を段丘の縁沿いに踏査した。小河川である”こが川”（俗称、正式名不明で現在公用文でもこの名称を使用する）による段丘は高く、急峻で岩部山館北側における自然障壁となっている。特に日影街道に近づくにつれて崖の高さが高くなる。市道諏訪原日影線と日影街道の合流地点のT字路から東に70m程の位置には崖が山側にえぐれ込んだ大きな縦堀状の地形がある。遺物の散布は確認できなかった。

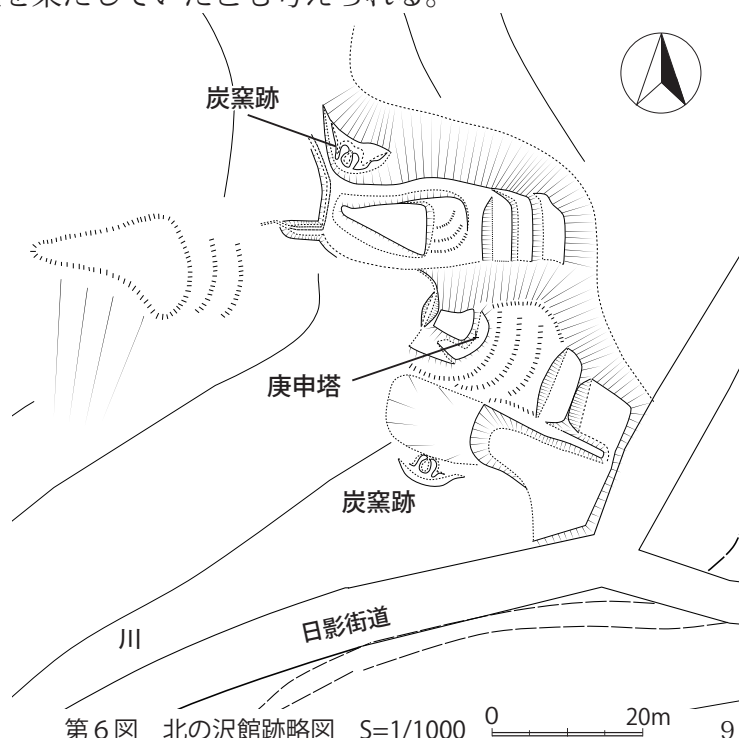
##### ②字北の沢（北の沢館跡）

市道諏訪原日影線と日影街道の合流地点西側にあたる字北の沢の尾根頂に享保二年青面金剛の文字を刻んだ庚申塔がある。高さ2mほどもある立派な庚申塔で緩やかな傾斜のあるテラスに立地する。石碑西側の尾根は小規模な堀切で断ち切られており、日影街道側には大きな切岸を伴うテラスがあり、北隣の尾根頂も切岸により階段状になっている。中世城館跡の可能性はある。岩部山館の一部とも考えられるが、位置的に日影街道と”こが川”を境として岩部山館範囲の対岸にあたることから、北の沢館跡として扱っておく。

石碑西側の山頂まで踏査し、自然地形であることを確認した。山頂は緩やかに西に傾斜する平坦なやや広い尾根である。また、2地点で炭焼き窯跡を確認した。館跡であれば小規模である。街道を見下ろす位置にあり、街道を挟んで岩部山館北端の曲輪と向かい合うことから、岩部山館と一体的な機能を果たしていたとも考えられる。



第5図 元中山字諏訪原、字北の沢踏査範囲図  
S=1/10000



第6図 北の沢館跡略図 S=1/1000 9

#### 4 元中山字竹原

(1) 調査日 平成 30 年 4 月 9 日

(2) 調査場所 南陽市元中山字竹原

(3) 調査目的

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。遺跡台帳整備のために遺跡の有無を確認する。

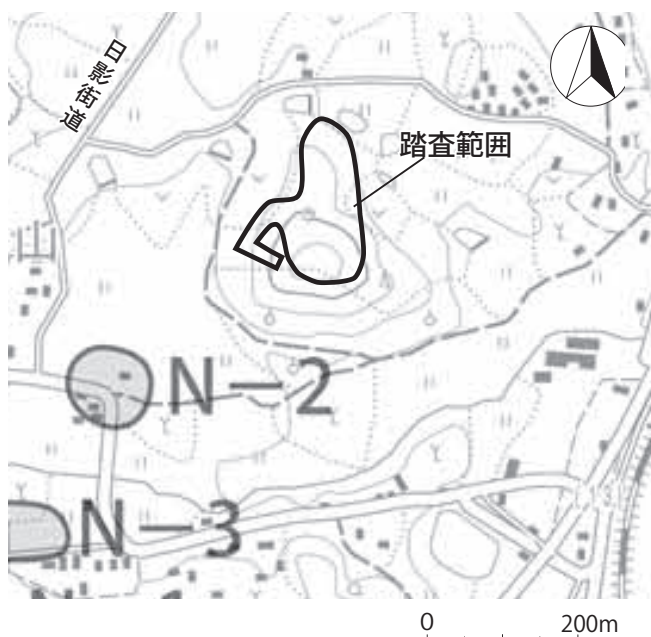
(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。館跡等の遺構確認に重点を置く。

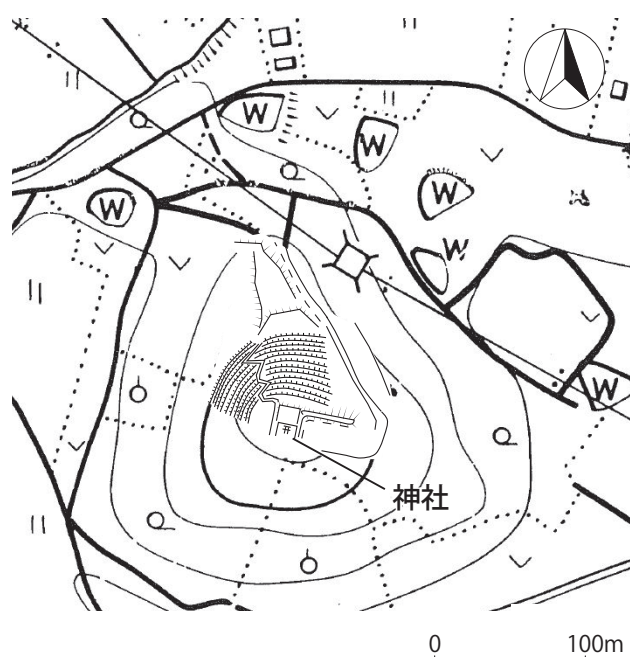
(5) 調査結果

調査地は、岩部山館跡の北方約 500m に位置する独立丘陵である。中山城と岩部山館の間に位置し、丘陵の北西を日影街道が通る。字名の竹原は、館原が転化した事例が多く、城館跡関連地名とされることから、城館関連遺構に留意しつつ踏査した。

西側の道から入り鉄塔方向へ進んでから山頂方向に登る。途中、帯曲輪状のテラス帯が 1 段あり、その上に道路が切られている。山の東斜面には 3 つ以上の鉤山の試掘とみられる窪地が見られる。山頂は、北側に低い土塁状の掘り残しを有する平坦地となっており、山頂西端に神社がある。神社の北斜面から西斜面にかけて高さ 1 m 強・幅 1 m 程度の帯状のテラスが 12 段程見られ、その中をつづら折りの道が北方向に下る。下った先には尾根を断ち切ったような地形がある。そのさらに北には直径 2 m 程度の陥没穴が複数あるテラスがあり、1 段下ってさらに平坦面が北に延びる。山の南斜面には特にテラス等は見当たらない。12 段の帯状テラスは畑地とは考えにくく、何らかの農産物栽培跡としても北斜面で条件が悪い。城館跡としては、宮内地区の丸山館とやや類似するが規模が異なり、城館跡関連の遺跡とは断定できない。しかしながら、テラス帯等が予想される最上氏の侵攻方向の斜面に集中しており、山頂は街道を見下ろす位置にあること等から、物見的功能を有していた可能性は残る。



第 7 図 元中山字竹原踏査範囲図 S=1/10000



第 8 図 字竹原略図 S=1/5000

## 5 元中山字大貝、字花窪

(1) 調査日 平成30年4月10日、11月29日

(2) 調査場所 南陽市元中山字大貝、字花窪

(3) 調査目的

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。遺跡台帳整備のために遺跡の有無を確認する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。館跡等の遺構確認に重点を置く。

(5) 調査結果

調査地は、上山市との市境付近で、岩部山館跡の北西に位置する。第1踏査地点は踏査済みである字大貝の山裾に立地する神社の西側にあたる山である。尾根に至る途中の斜面には段々のテラスがあるが近代の植林によるものと思われる。斜面中腹に炭窯跡を1基確認した。東に開口し、屋根の無いタイプで下場での直径は5mである。そこからさらに山の尾根に上る。途中円形の小窪地が散見されるが、これらも炭窯跡と思われる。尾根づたいに山頂まで登ったが特に遺構は確認できなかった。山の南斜面についても少し下って確認した後、山頂から東に張り出した枝尾根に下る。枝尾根の東端には方形のテラスがいくつか確認される。堀切や土塁は無く、テラスの段差も1m内外であることから館跡ではないと思われる。テラスの中央に向かって土橋的な通路がある様子からすれば、近世の寺社跡等の可能性があろう。さらに東に向かって下ると山裾に墓が2基存在し、その下は踏査を開始した神社前を通る古道（日影街道）である。

第2踏査地点は第1踏査地点の北である。分かれ道に地蔵等の石造物があり、その西方の山裾にあたる。山の斜面に段々に造られた墓地で、万年塔型墓石があることから、江戸初期頃からの墓地と思われるが、中世までは遡らないと思われる。

第3踏査地点は、市道花窪中山線北側の丘である。丘の北斜面に段々畑の跡があるが、特に遺構・遺物は確認されなかった。第4踏査地点は、字花窪の北東端の尾根西側である。目視確認で尾根端は谷で切り離された自然地形と思われる。



第9図 元中山字大貝、字花窪踏査範囲図 S=1/10000

0 200m

## 6 天ヶ澤館跡

(1) 調査日 平成30年4月11日

(2) 調査場所 南陽市金山字天ヶ澤

(3) 調査目的

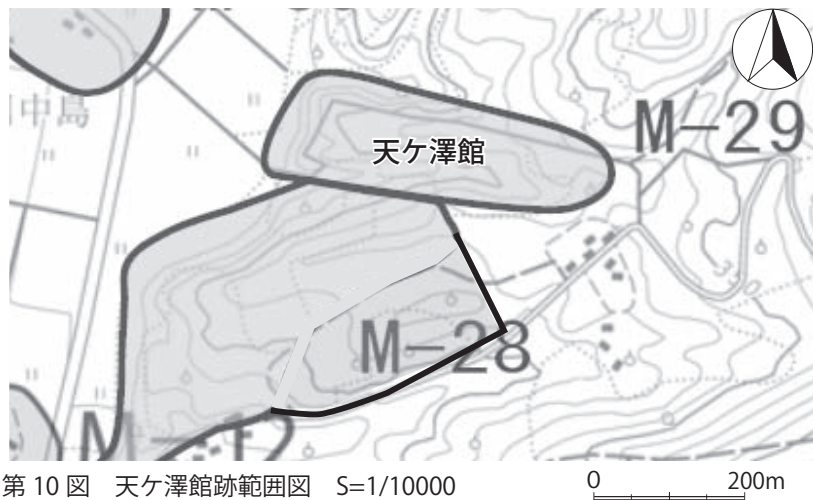
対象地は天ヶ澤館跡である。館の主郭南側斜面が未踏査につき、踏査を行う。

(4) 調査方法及び内容

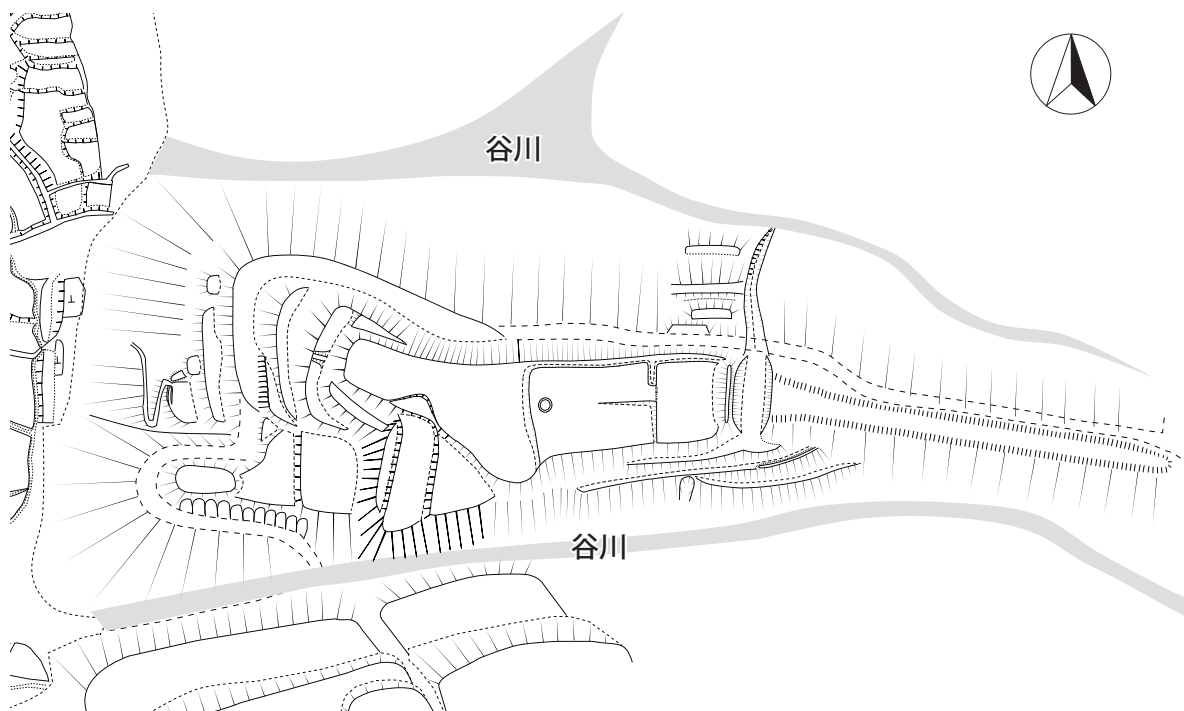
写真撮影を行いながら踏査し、略図の補足を行う。

(5) 調査結果

対象地は、天ヶ澤館跡の主郭南側の斜面である。主郭東辺を区切る堀切から南斜面に下り、南斜面の谷沿いに帯曲輪を確認した。歩測により計測し、略図を訂正した。



第10図 天ヶ澤館跡範囲図 S=1/10000



第11図 天ヶ澤館跡略図 S=1/2000

## 7 日影街道（川樋北沢遺跡、岩部山館跡）

(1) 調査日 平成30年4月12日

(2) 調査場所 南陽市川樋字北山、字元北沢山～元中山字日影

(3) 調査目的

対象地は、岩部山館の西東及び西端にあたる。日影街道の切通し付近の未踏査地を中心に遺跡台帳整備のために遺跡の有無を確認する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

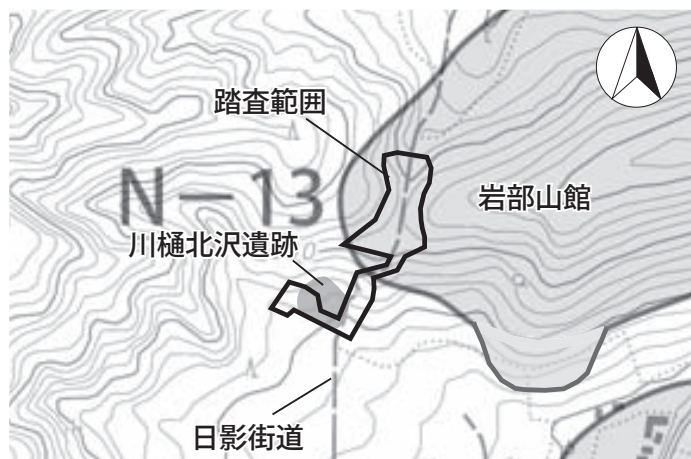
(5) 調査結果

### ①字北沢

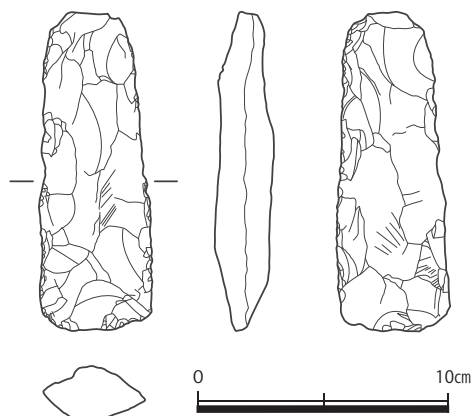
字北沢では県防災事業による砂防提整備工事が行われている。砂防提付近は未踏査地であるため、工事で切られた道路脇の法面を観察しながら踏査した。地形は、東向きの日当たりの良い緩斜面で南側に沢がある。道路北側の法面下で竈状石器1点と土器片1点を表採した。緩斜面に縄文時代の遺跡があると思われる。新規発見遺跡（川樋北沢遺跡）になる。

### ②日影街道切通し

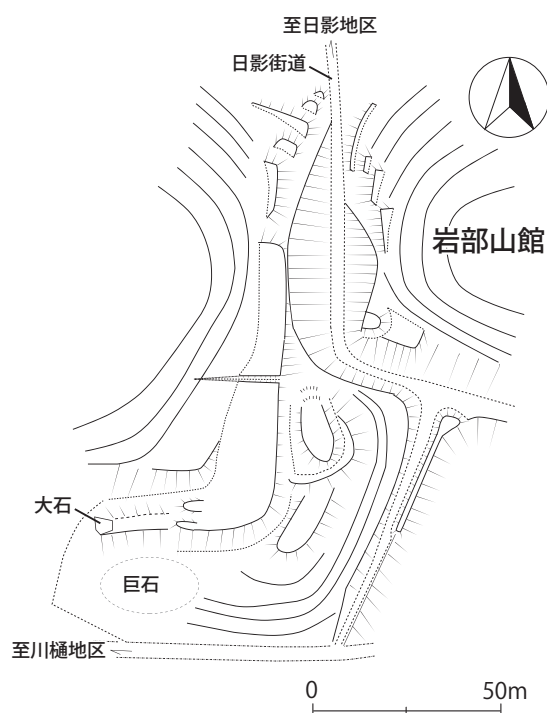
日影街道を北に登り、岩部山の西端に位置する切通しに至る。切通しは岩部山館の西端を区画する堀切の機能も担っている。これまでの調査で切通し南側に曲輪状のテラス群があることが確認されているが、今次踏査でも新たに切通しの両側で曲輪状のテラス群を確認した。本来の用途は不明だが岩部山館の存在から曲輪としておく。各曲輪の長さと同幅等を歩測で計測し、簡易記録を行った。切り通しの長さは約56mで下場幅は3.6mである。



第12図 日影街道踏査範囲図 S=1/10000 0 200m



第14図 川樋北沢遺跡出土遺物 S=1/3



第13図 日影街道切通し周辺略図 S=1/2000

## 8 松沢字赤石山

(1) 調査日 平成30年4月13日

(2) 調査場所 南陽市松沢字赤石山

### (3) 調査目的

松沢古墳群の所在する赤石山において未確認の古墳及び横穴の有無を確認する。また、市民から赤石山に石でできた穴があるとの情報提供があったため現地を確認する。

### (4) 調査方法及び内容

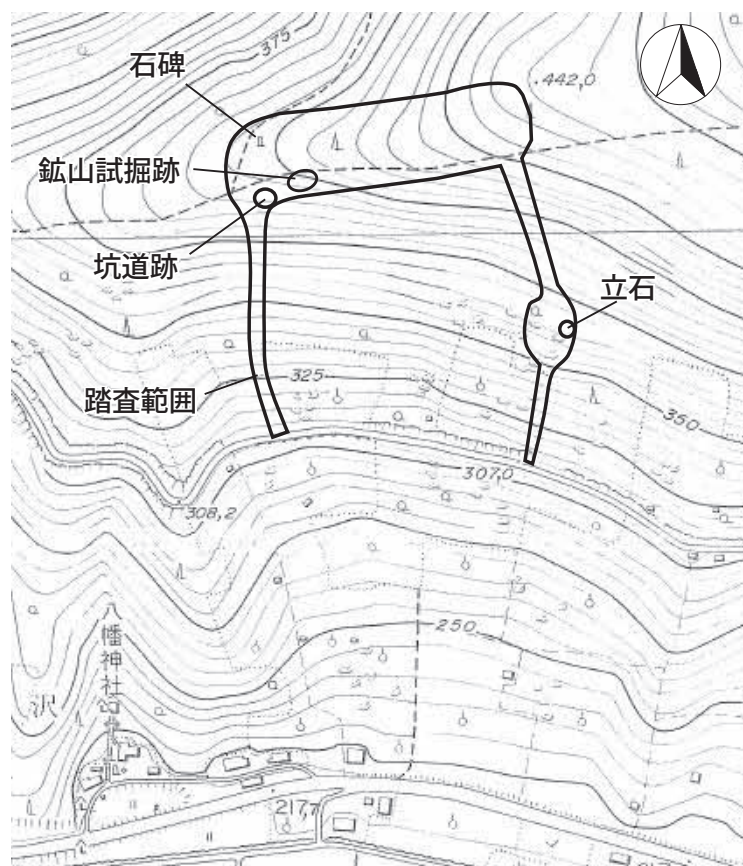
写真撮影を行いながら踏査する。

### (5) 調査結果

赤石山には既知の横穴として松沢横穴が確認されている。横穴は坑道とも異なる形状をしており、先に横穴墓の可能性もあると報告したが、現状で壁面に残る掘削工具の形状から、古墳時代より新しい横穴の可能性があることがわかってきた。松沢地区から宮原地区では、横穴が幾つかあったという話が伝わっており、今後これらの横穴の時代や性格を解明することが課題となる。

市民から情報提供されたのは数枚の写真で、その写真から撮影地点は松沢古墳群の東に位置する巨大な立石付近と推測された。踏査により、立石の東南数mの地点で撮影地点と思われる場所を確認した。大きな岩が折り重なって隙間が生じ立坑状になっている。その下方の斜面に側面からの開口部があり石が重なりあっているが、自然地形と判断される。

次に未踏査である尾根方向へ向かう。途中にはゴーロ地形があり、尾根の肩に近い部分は、表面が崩落している岩が横一列に切り立っている。尾根は広くなだらかである。尾根を西方向に下りながら肩部と尾根頂の二手に分かれて踏査した。西に下ると大きな平次林記念碑（大正13年）が建っている。記念碑の東南側では鉾山の試掘跡とみられる縦長の窪地が南斜面の肩部に2ヶ所確認された。記念碑南側の尾根の肩部を降りてすぐの地点で、坑道跡の入口及びズリ山を確認した。坑道の奥行きは10m程度と思われる。この坑道の掘られた時代は不明である。



第15図 赤石山踏査範囲図 S=1/5000 0 100m



## 9 木之実小屋遺跡

- (1) 調査日 平成 30 年 4 月 20 日
- (2) 調査場所 南陽市池黒字木之実小屋～字弁天
- (3) 調査目的

対象地は、木之実小屋遺跡の範囲内である。個人住宅建設の計画があることから、事前に対象地及びその周辺の現況と遺跡の状況を確認する。

### (4) 調査方法及び内容

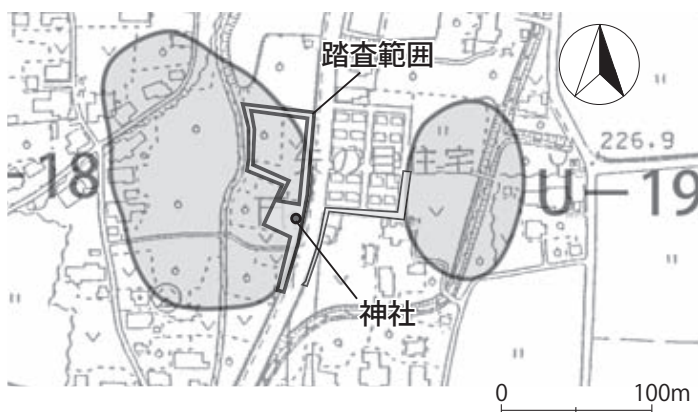
写真撮影を行いながら踏査する。

### (5) 調査結果

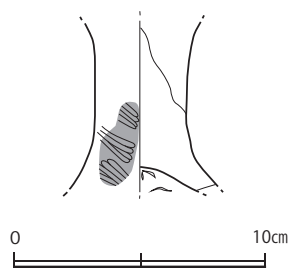
調査地は、上無川左岸の微高地にあたり、周知の木之実小屋遺跡の範囲内である。木之実小屋遺跡は、縄文時代、奈良・平安時代の遺跡として登録されている。木之実小屋の字名は、江戸時代の「木の実御蔵」に由来すると考えられる。

今次踏査では、道路周辺と上無川付近で土師器等の散布が確認された。工事予定地では無いが、道路脇にある神社周辺に土師器が多く、4 世紀末から 5 世紀はじめの高坏脚部が 1 点表採された。遺跡の時代区分に古墳時代を追加する必要がある。

神社北側に古い切株のある小マウンドがある。マウンドは直径 2 m 程度で近年の土盛りと見なされる規模であるが、切株の大きさ及び主幹の傾斜に対する角度を考えると、かなり昔からのマウンドであることが推測される。神社周辺もわずかながら周辺より高いように感じられ、高坏が出土したことと併せて考えると元々付近に古墳があった可能性を視野に入れる必要があると判断された。その後、字限図調査図面を確認したところ、明治期の神社用地の西北に接して方形地割（草地）が見られた。当時の神社用地は現在道路になっているため現神社はこの方形地割内に位置する。市内の類例からこのような方形地割は古墳である可能性が高いと考えられ、遺跡の性格の把握が今後の課題である。



第 16 図 木之実小屋遺跡踏査範囲図 S=1/5000



第 18 図 木之実小屋遺跡出土遺物 S=1/3



第 17 図 明治 7 年字弁天字限図

## 10 梨郷字平野

- (1) 調査日 平成30年6月14日
- (2) 調査場所 南陽市梨郷字平野（平野山田遺跡隣地）
- (3) 調査目的

対象地は、周知の平野山田遺跡の隣地である。工場建設の計画があることから、事前に対象地及びその周辺の現況確認と遺跡の有無を確認する。

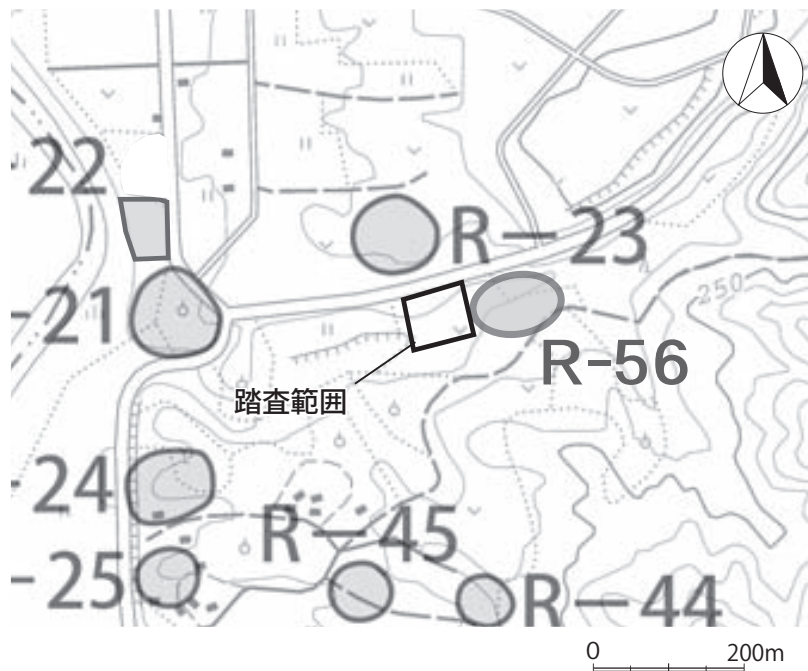
### (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

### (5) 調査結果

調査地は、小河川右岸の河岸段丘にあたる。現況は畑地である。開発予定地は平野山田遺跡の範囲の西端に隣接する。従前の踏査では開発予定地一帯での遺物の散布は確認されていない。今回も遺物の散布は確認できなかった。

ボーリングステッキ調査では、地表下20～30cmで硬い岩盤に達し、表土層（耕作土）はごく薄いと思われる。堆積層が薄く遺物が認められないことから、対象地まで平野山田遺跡は広がっておらず、遺跡は無いと考えられる。



第19図 梨郷字平野踏査範囲図 S=1/10000

## 11 向畑C遺跡

(1) 調査日 平成30年6月29日

(2) 調査場所 南陽市小滝字向畑

(3) 調査目的

対象地は、周知の向畑C遺跡である。昭和60年4月の踏査で方形マウンド4基が確認されているが、県教育委員会が実施した平成元年の発掘調査以降、現地確認をした記録がないことから、現況把握のため踏査を行う。

(4) 調査方法及び内容

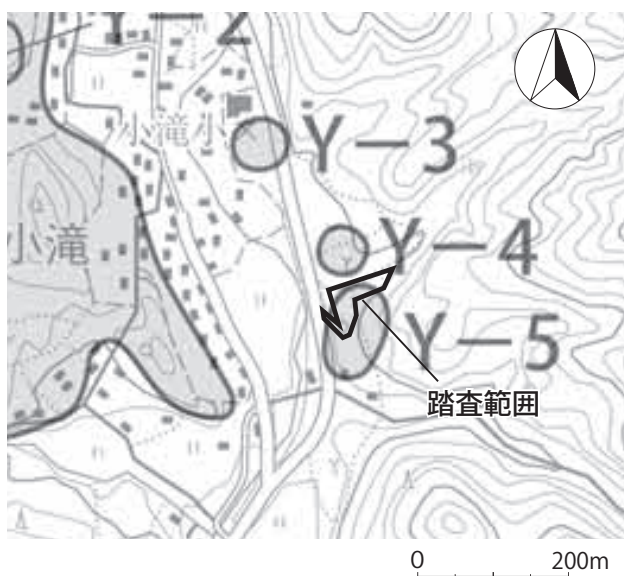
写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

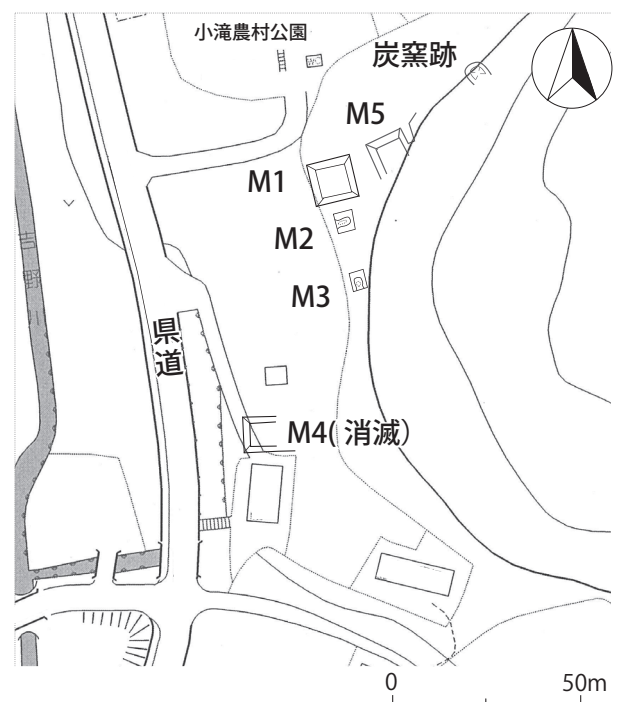
遺跡は、吉野川左岸の山地西側斜面に位置する小段丘上に立地する。平成2年の県道工事以前は、北から南へM1～M4と方形マウンド4基が確認されていた。M2は古墳の可能性があり、M1、3、4は古墳や塚等の可能性がある性格不明遺構と報告されている。このうちM4は県道工事に伴う県教育委員会の発掘調査後に消滅している。発掘調査でM4は宗教的な土壇の可能性が指摘されている。

現存するマウンドの位置は、小滝農村公園と谷を挟んで南側の山林内にあたる。M1～M3を確認、M1は1辺約12mの方形壇である。M2は小型の方形(円形)で1辺約5m、中央部が丸く落ち込んでいる。昭和12、13年頃行われたという発掘跡であろう。その発掘では、M2から底石・蓋石とも1枚岩の石棺が出土し、朱で塗られた内部に人骨と勾玉等があったと伝わる。M3はM2と同規模の方形マウンドである。

M1の東側に谷沿いに登ったところ、M1のすぐ東でM1と同規模の方形の地形が確認された。仮にM5とするが、M5は東側の堀切が途中で途切れ南側は堀切が不明瞭であり、造りはM4に近い印象を受ける。M5からさらに上流を踏査すると、中央が大きく窪んだ山寄型の円形マウンドが確認されたが、その形状から炭焼き窯跡の可能性が高い。



第20図 向畑C遺跡踏査範囲図 S=1/10000



第21図 向畑C遺跡マウンド位置図 S=1/2000

## 12 金山字萱ノ入他

(1) 調査日 平成30年7月5日

(2) 調査場所 南陽市金山字萱ノ入(萱ノ入山)、字赤坂、字芋沢、字上山田、釜渡戸字大下

(3) 調査目的

旧山形県庁正面バルコニーを支える円柱石材を採石したとされる近代産業遺跡である採石場跡を確認する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

調査地は、金山と釜渡戸の境に位置する山地である。円柱石材の採石地は、金山地区と中川地区の記録で相違があり、金山地区では金山の萱ノ入山、中川地区では金山の板宮向と中川の字大石となっているが、実際に二本の円柱石材運搬に従事し、旧県庁の落成式にも招かれた渡部栄氏が記述した金山地区の記録がより正確と思われる。分布調査報告書(5)では金山と中川の2ヶ所から産出したと考えたが円柱石材は金山地区(萱ノ入山)から産出したものと訂正する。中川地区の記録にある石材は使用箇所が異なる可能性がある。

金山の萱ノ入山は、原地区の東側の山である。金山から県道原中川停車場線に入ってからすぐ南側の山で、県道との間に小谷川が流れている。県道沿いの山腹には平坦面が幾段か見られる。畑跡かあるいは採石跡かは不明だが谷川内に釜渡戸石(御影石)の転石が見られ、直方体に整形された石も散見されることから採石地に近い可能性が高い。字赤坂で県道から南に入る道があるが、その道沿いの山の斜面は急峻で採石した跡は見当たらない。今のところ字萱ノ入(萱ノ入山)における産地候補地は県道沿いの地点が有力と考えておく。

次に板宮から釜渡戸に向うルートを探り、板宮向と字大下の現地を確認した。板宮に近い地点では自然石を見かけない、少し上流の字芋沢付近から谷川内に大きな花崗岩の転石が見られるようになった。石の大きさは字萱ノ入の転石より大きい。川を挟んで北側に段々畑上の平坦面があるが産地とは特定できない。釜渡戸字大下は山間の水田でどこに大石があったかは確認できなかった。



第22図 金山字萱ノ入他踏査範囲図 S=1/20000

0 500m

### 13 吉野川河道内

- (1) 調査日 平成30年8月13日、28日、9月14日、10月24日  
(2) 調査場所 ①南陽市二色根字的場、字中川原、字田中堰 ②柵塚字湯川原  
③赤湯字前川原、字石田

#### (3) 調査目的

吉野川河川改修事業で河床を掘り下げており、堤防法面に土層が現れていることから、遺跡台帳整備のために遺跡の有無を確認する。

#### (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

#### (5) 調査結果

①調査地は二色根山の南に位置する吉野川河道内である。渇水期で川の水は深さ数センチで、河床面が見える状況である。河床は、字傾城橋に近い方は二色根山から続く硬い地山が現れているが、少し下流に移動すると泥炭層の面となる。法面は、現堤防盛土下に粘性の強い明黄褐色の砂質粘土層が堆積し、その下層に黒い泥炭層が上流から下流まで一様に広がっている。二色根公民館の南東側では河床に泥炭層が全面に広がる。泥炭層を中心に遺構や遺物がないか観察したが、遺構と遺物は確認されなかった。この付近に集落遺跡等は無いものと考えられる。また、字限図調査から2つの旧河道の分岐点がこの範囲内にあると推定されていることから法面を観察し、左岸側に旧河道断面の可能性のある落ち込みを2地点で確認した。一つは二色根公民館西側付近で、暗灰色粘土層が地山に落ち込む地点。二つめは沖田木材の西側付近で、地山が急に落ち込み、礫が下部に堆積する地点である。吉野橋から東へ92m付近の吉野川右岸堤防外に、摩滅した板碑が建てられているのを確認した。板碑は、佐藤鎮雄文化財保護審議員によれば、工事前に当該地に住んでいた菅野氏がかつて河川から引き揚げたものとのことである。

②調査地は柵塚地内の吉野川河道内である。堤防盛土層下は礫層が厚く堆積している。今次調査地南西側は、踏査済みで遺物の散布は確認できなかったことから、この付近に遺跡は無いと考えられる。

③調査地は赤湯地区の吉野川河道内である。堤防上面から約5m下で黒色粘土層が水平に堆積している。黒色粘土層を確認したが遺物は確認できなかった。花見橋に近い場所で、加重痕と思われる黒色粘土層の沈降を2ヶ所確認した。上位のどの層から加重が加わったのかは不明である。位置的に橋脚があった可能性もあろう。石田地区付近では従来遺跡は確認されておらず、今回の調査からも遺跡は無いと考えられる。



第23図 吉野川河道踏査範囲図 S=1/10000

## 14 池黒字八幡田

- (1) 調査日 平成 30 年 10 月 23 日
- (2) 調査場所 南陽市池黒字八幡田～字鈴振田（字庚壇）
- (3) 調査目的

対象地の字八幡田は遺跡分布調査の未実施地である。字限図調査において畑地内に方形地割の草地が確認されている地点である。また、周知の庚壇遺跡内であるが、字八幡田～鈴振田の北辺には東西方位の水路又は道路状の地割がみられるため現地確認を行う。

### (4) 調査方法及び内容

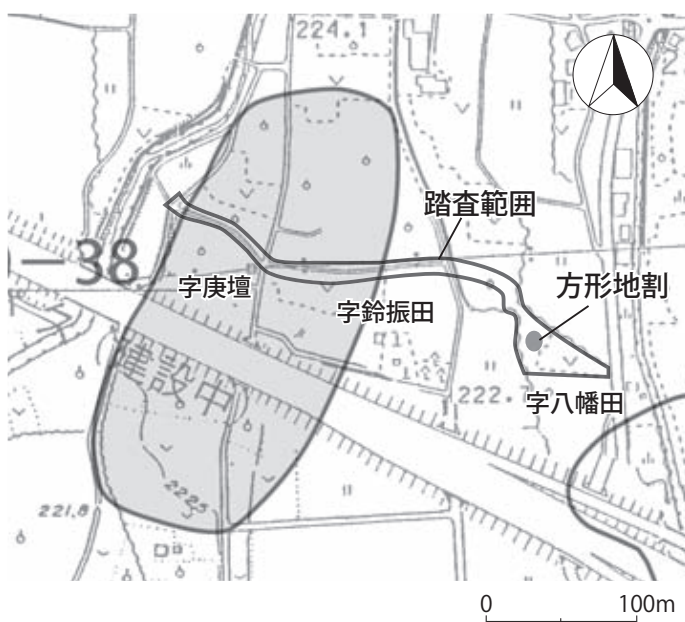
写真撮影を行いながら踏査する。

### (5) 調査結果

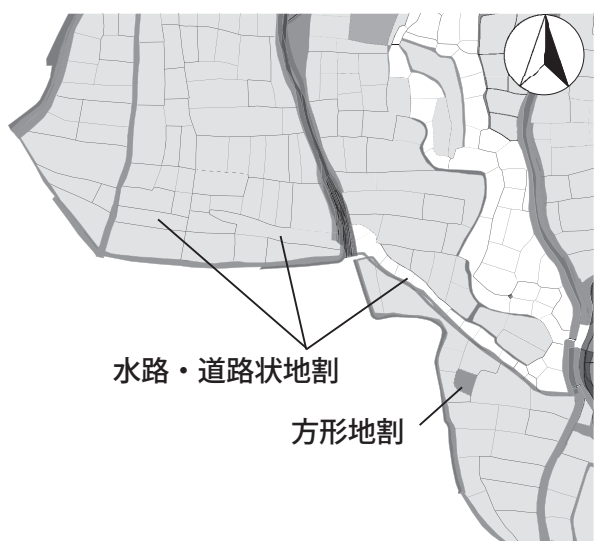
調査地は、庚壇遺跡の東隣及び遺跡内で織機川左岸の自然堤防にあたる。明治 8 年字限図の字八幡田の畑地内に一辺 10 m 強の方形地割が見られる。畑地として利用できない地形（塚等）であるため草地になっていた可能性がある。現地は畑地とその西側の水田が旧状をとどめており、方形地割の地点を確認することができた。現在は果樹が 2 本植えられた草地である。マウンド等は確認できないが、周辺地との用途の違いが感じられ、塚等があった可能性は排除できない。周辺に遺物は確認できなかった。

次に水路又は道路状の地割を調査した。字限図では、字八幡田北辺で南東から北西に当該地割が連続するが、現在その地点は耕地整理されており地割は既に確認できない。水田の現況からは軟弱な湿地と思われる。

字鈴振田、字庚壇の北辺に近い地点では、地割と同じ場所に農道が東西に通っており、西端で織機川を渡河し字東寺町へと続いている。この範囲での地割りは古道跡の可能性が高い。字限図上では公道と認められない農地内を通過する道路であるとも考えられる。道路が字東寺町方向に続くことから、字東寺町に寺があった時代の道路の可能性も考えられる。



第 24 図 池黒字八幡田踏査範囲図 S=1/5000



第 25 図 池黒字八幡田字限図  
(明治 7 年字限図による)

## 15 経塚山南古墳群

(1) 調査日 平成30年11月22日

(2) 調査場所 南陽市梨郷字経塚

(3) 調査目的

対象地は、遺跡分布調査の未実施地である。赤色立体地図原図において経塚山の枝尾根南端の3地点においてマウンドらしき地形が確認されたことから、遺跡台帳整備のために現地を踏査し、遺跡の有無とその性格を確認する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

調査地は、経塚山古墳群の立地する経塚山山頂から南に延びる枝尾根の南端に位置し、平野部に最も近い尾根端である。赤色立体地図上も明瞭にマウンドが読み取れる。踏査により3基の古墳とみられる高いマウンドを確認した。周辺古墳群と同様に現時点では古墳とみておく。遺跡名については、周知の経塚山古墳群から200m以上離れていることから同一古墳群とせず、経塚山南古墳群としておく。規模については今回現地計測を実施しなかったことから、赤色立体地図原図の紙ベースによる概寸を記す。

### ① 経塚山南1号墳（新規）

東端の尾根頂に位置する。尾根頂に沿って南東方向に延びた平坦面があり、その奥に一段高いマウンドがある。平坦面の側面には帯状のテラスがあり、平坦面の部分が前方部の可能性もある。マウンドは概ね円形である。マウンド北西側の尾根は周溝で断ち切られている。円墳の可能性が高いが前方後円墳の可能性も残る。大きさは円墳の場合は直径15～17m、前方後円墳であった場合は主軸長25～30mである。

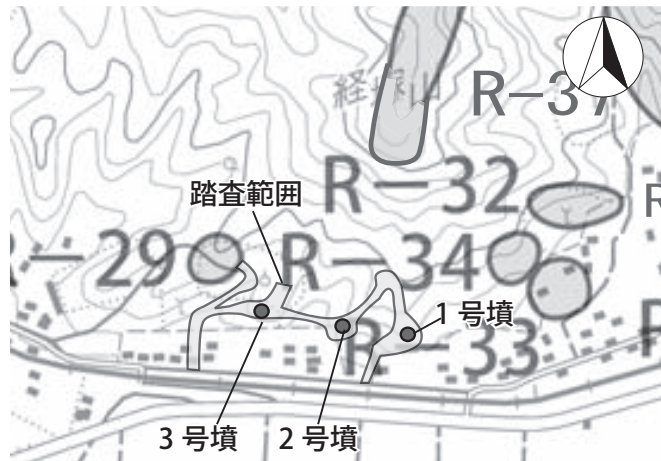
### ② 経塚山南2号墳（新規）

中央の尾根頂に位置する。1号墳から北西に尾根伝いに踏査した。尾根の分岐地点までは途中に小段があるがマウンド状の地形は確認されない。尾根分岐点から南西に延びる枝尾根を下ると、尾根の南西端に高いマウンドがある。マウンド東側には周溝が廻る。その形状から円墳と考えられる。墳頂の中央部は窪んでいる。大きさは直径13～14mである。

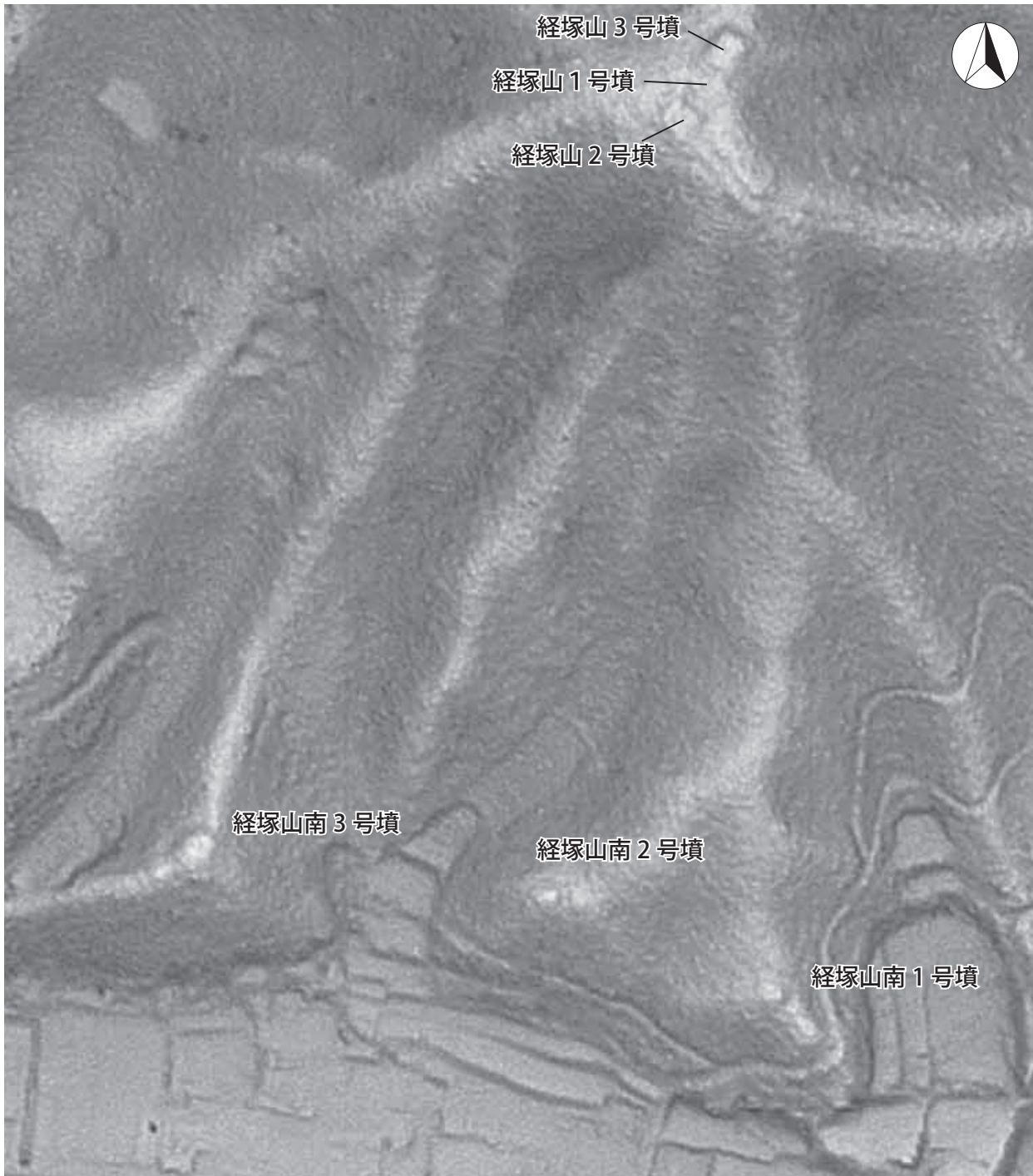
### ③ 経塚山南3号墳（新規）

西端の尾根頂に位置する。2号墳から西へ谷を下って尾根の東側から登る。比較的大きなマウンドで墳頂の平坦面も広い。墳頂北半に東西方位の溝状の落ち込みがみられる。マウンド北側の尾根は広く平坦面となっており、北側に周溝は無い。前方部の存在も視野に入れて踏査したが前方部端は確認できない。墳頂に上って南西方向を見下ろすと、墳丘南西部に接する小マウンド状の地形が確認された。隣接する古墳あるいは前方部の可能性もある。墳形は、円墳の可能性もあるが、方墳あるいは前方後方墳とみておく。大きさは方墳の場合は縦軸長約17m、前方後方墳であった場合は約27～30mである。

3号墳の立地する枝尾根の西側に位置する枝尾根も併せて踏査したが、尾根頂上は近年の開発で平坦に均されており、マウンド等は確認できなかった。途中の山道斜面ではやや赤色の土が見られた。旧石器時代の遺跡についても今後注意する必要がある。



第 26 図 経塚山南古墳群踏査範囲図 S=1/10000 0 200m



第 27 図 経塚山南古墳群赤色立体地図 S=1/2000 0 50m



## 16 天王山古墳群・狩野山古墳

- (1) 調査日 平成30年11月27日  
(2) 調査場所 ①南陽市竹原字白山・字天王山  
②南陽市和田字狩野

### (3) 調査目的

対象地は、遺跡分布調査の未実施地である。赤色立体地図原図において竹原地区及び和田地区の山の尾根2地点においてマウンドらしき地形が確認されたことから、遺跡台帳整備のために現地を踏査し、遺跡の有無とその性格を確認する。

### (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

### (5) 調査結果

#### ① 竹原字白山・字天王山（天王山古墳群 21号墳（新規））

調査地は、周知の天王山古墳群が所在する尾根の南東に伸びる枝尾根で、稜線は字白山と字天王山の境となっている。字白山にある八雲神社の入口を基点に踏査した。尾根は二股に分岐する地点が高まっており、その尾根頂は平坦で石祠がある。尾根頂平坦面の平面形は概ね円形である。その北側は一段下がって、細い平坦面が北に延びている。この円形の地形は人為的であると考えられる。北側平坦面とマウンドの高低差は約1mとやや低く、先に確認した経塚山南古墳群に比べ低平である。このマウンドは神社による造成地あるいは円墳である可能性がある。円墳とした場合の直径は、赤色立体地図原図の紙ベースによる概寸で約14mである。性格は不明だが遺跡保護上、天王山古墳群 21号墳としておく。

#### ② 和田字狩野（狩野山古墳（新規））

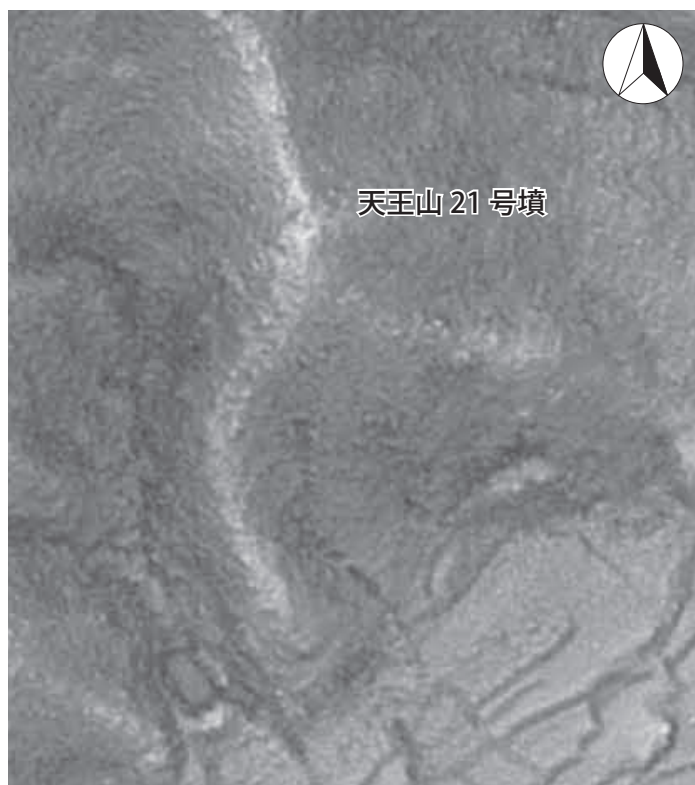
調査地は、和田地区にある全城院の北側に位置する山である。梨郷神社東側にある竜樹山遊歩道入口から踏査する。尾根頂は山頂直前で傾斜角度が変わりマウンドを成す。尾根頂には石祠（虚空蔵神社）があり、その平坦面は概ね円形で、西側に一段下がって平坦面が延びている。西側に前方部を有する前方後円墳の可能性がある。前方部端部は浅く尾根を断っている。前方後円墳とした場合の主軸長は、赤色立体地図原図の紙ベースで約34mである。山の字名「狩野」から狩野山古墳としておくが、その性格の把握についてはさらに調査が必要である。

#### ③ 課題

今次確認のマウンドを含め、梨郷地区の山地に分布するマウンド群（天王山古墳群、竜樹山古墳群、稲荷山古墳群、経塚山古墳群）は、南陽市史に依拠し古墳群として取り扱ってきたが、これら古墳群の発見時に報告されたように宗教的な土壇が混在している可能性は否定できない。また、遺跡性格の把握が不十分であっても疑義のある地形は古墳として括り、その現状保存と保護を優先させてきた経緯もあり、現在古墳とされているものの中には一部自然地形が含まれている可能性が残る。これらの課題を解決するためには発掘調査が必要となるため、今後、主要な古墳の測量調査やその測量図を基にした計画的な確認調査を行っていく必要がある。



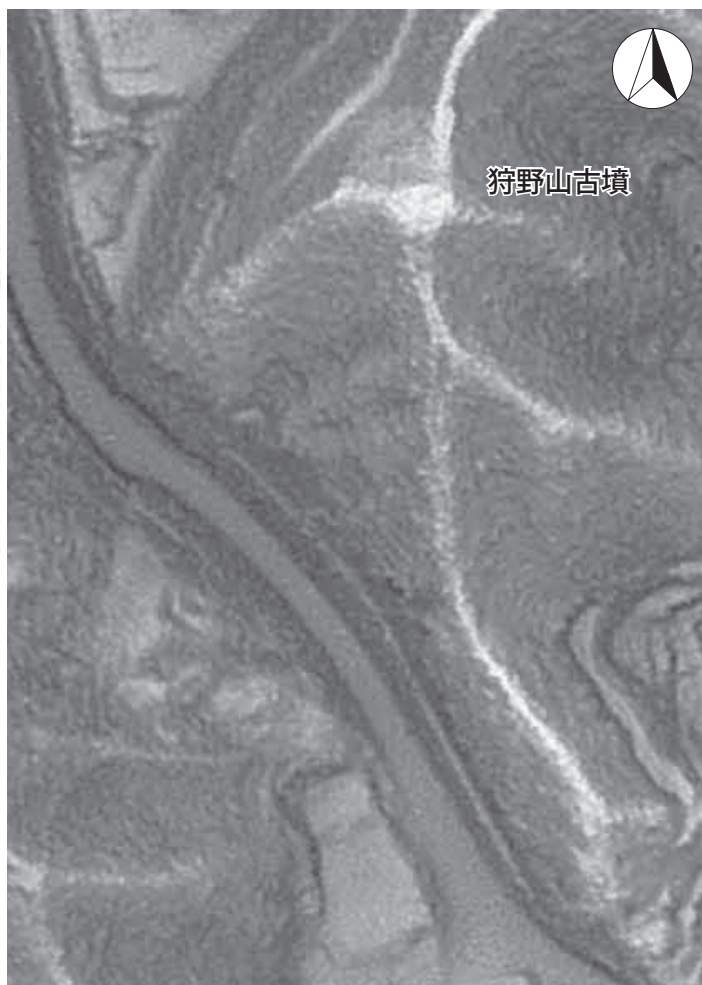
第 28 図 天王山 21 号墳踏査範囲図 S=1/5000



第 29 図 天王山 21 号墳群赤色立体地図 S=1/2000



第 30 図 狩野山古墳踏査範囲図 S=1/5000



第 31 図 狩野山古墳赤色立体地図 S=1/2000

### Ⅲ 試掘調査

#### 1 宮内字一本杉

- (1) 調査日 平成 30 年 3 月 28 日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字一本杉 1207 他  
調査対象地（工事）面積 1,984m<sup>2</sup>
- (3) 調査原因 公共事業
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、遺跡分調査未実施地である。公共施設整備の予定が生じたことから、遺跡の有無を確認するために試掘調査を行うものとした。10 mメッシュで幅 1 m×長 10 mの試掘溝 1ヶ所、幅 1 m×長 1 mの試掘穴 10ヶ所を設定し試掘を実施した。

#### (5) 結果

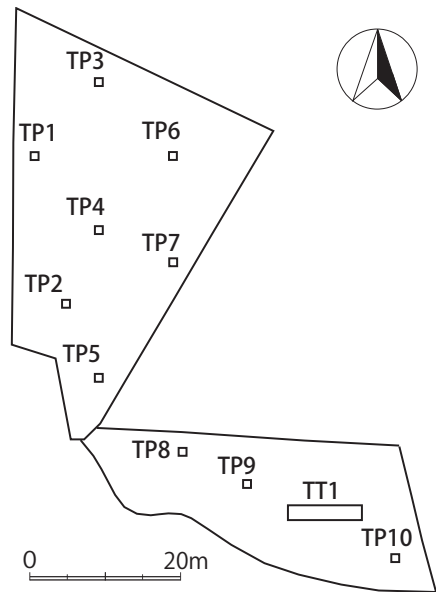
遺物は、TT1 及び TP9 において盛土層下の旧耕作層から土師器片、須恵器片等が出土した。遺構は、TT1 地表下約 25cm でピット 1ヶ所を確認したが新しいと思われる。

#### (6) 考察

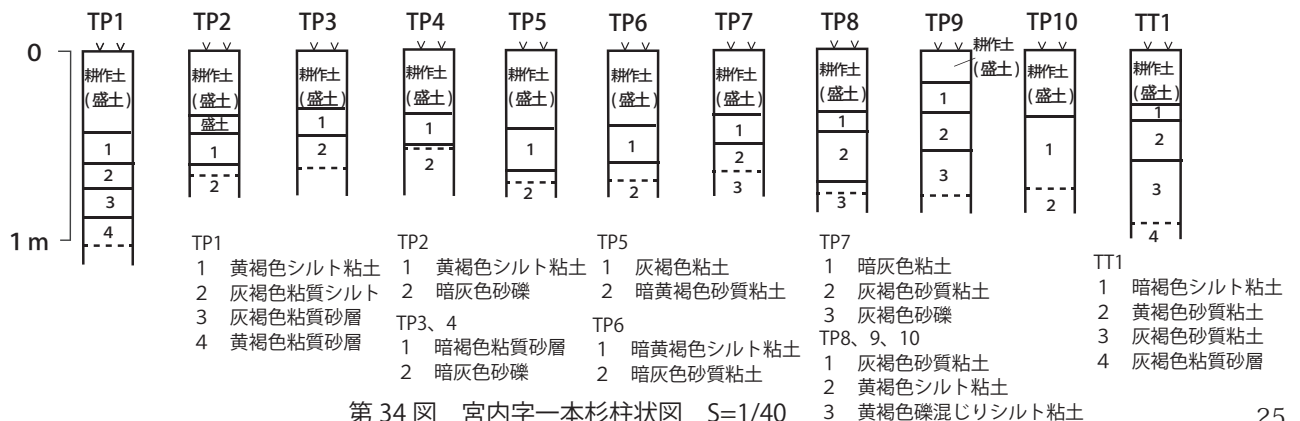
調査地は吉野川右岸に位置し、吉野川の氾濫原にあたる。現河道からは 3～4 段目の河岸段丘面に相当するとみられる。遺物はいずれも小片で流れ込みと思われる。TP2～TP9 の旧耕作土層下は砂礫層で河川跡と考えられる。TP1 は微高地東端と見られる。TT1、TP10 付近は流れの緩やかな範囲又は中洲状の微高地であったと思われる。



第 32 図 宮内字一本杉開発予定位置図 S=1/5000



第 33 図 宮内字一本杉トレンチ配置図 S=1/1000



第 34 図 宮内字一本杉柱状図 S=1/40

## 2 諏訪原C遺跡

- (1) 調査日 平成30年3月29日
- (2) 調査場所 南陽市元中山字諏訪原 701-4  
調査対象地（工事）面積 727.38㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の諏訪原C遺跡にかかる。住宅建替工事の計画が生じたことから、遺跡内容確認のため試掘調査を行った。調査対象範囲 727.38㎡について、既存建物解体撤去後に幅1m×長2mの試掘溝1ヶ所を設定のうえ調査した。

### (5) 結果

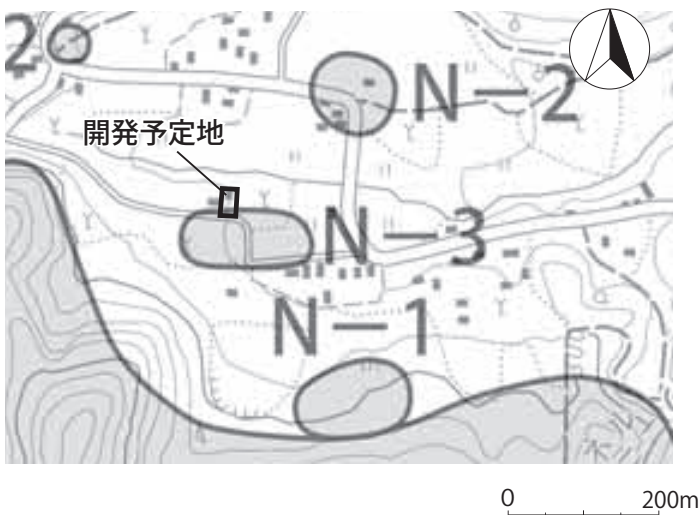
遺構・遺物は確認されなかった。

### (6) 考察

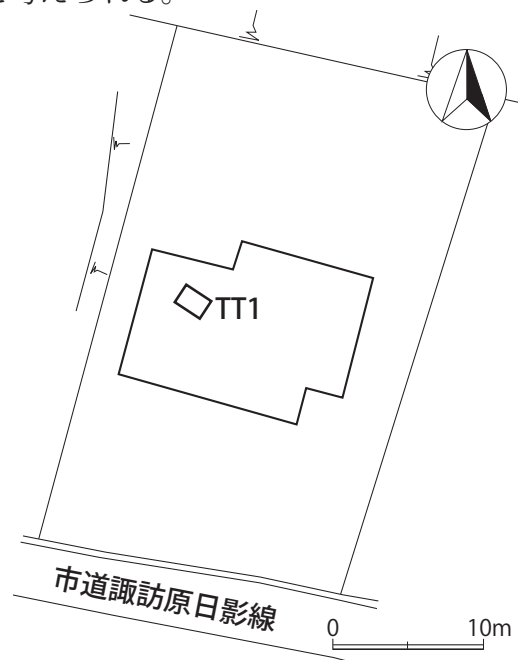
諏訪原C遺跡は縄文時代の遺跡である。調査地は遺跡の北端に位置し、日影地区から東流する小河川によって形成された河岸段丘上にあたる。

遺構・遺物は、出土しなかった。土層状況から以前の工事により旧耕作土層や包含層は既に失われているとみられる。

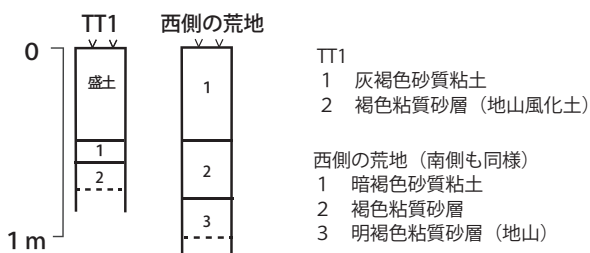
基本土層を把握するため周辺地でボーリングステッキによる調査を行った。周辺地（西側の荒地、南側畑地）でも TT1 の地山である明褐色粘質砂層が広範囲で堆積している状況が確認され、その地山層上には暗褐色砂質粘土層が地表から約 40～50cm 下まで存在していることから、今次調査地は切土されていると考えられる。



第35図 諏訪原C遺跡開発予定位置図 S=1/10000



第36図 諏訪原C遺跡トレンチ配置図 S=1/500



第37図 諏訪原C遺跡柱状図 S=1/40

### 3 長岡山遺跡・稲荷森古墳

- (1) 調査日 平成30年4月24日～26日
- (2) 調査場所 南陽市長岡字西田中西1193、1206-2  
調査対象地（工事）面積2,160㎡
- (3) 調査原因 公共事業（94条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の長岡山遺跡（長岡山館跡）、稲荷森古墳の範囲にかかることから、遺跡内容確認のため試掘調査を行った。施設建設範囲1,160㎡（調査区1）と駐車場用地範囲1,000㎡（調査区2）について、調査区1に幅2m×長2mの試掘溝1ヶ所、調査区2に幅2m×長20mの試掘溝3ヶ所を設定し、試掘を実施した。

#### (5) 結果

調査区1では盛土が厚く、自然堆積層に達することができなかった。平成8年度に当該地点で実施した試掘穴からは遺構と遺物は検出されていない。後日の工事立合いにより、岩盤まで削平された上に盛土が2m以上あることが確認された。

調査区2は、稲荷森古墳東側に位置し旧丘陵からの墳丘切離し部に関わることから、TT1～TT3を掘下げた後、地山の勾配を確認するためTT1を拡張した。TT1の中央から南へ拡張した範囲を拡張1、TT1西端から北へ拡張した範囲を拡張2とした。また、旧石器時代の遺跡の有無を確認するため拡張1とTT2、TT3の東端を深掘りし下層の土層を確認した。遺物は、表土から土師器片、石器等が出土した。遺構は、攪乱がひどく確認されなかった。旧丘陵の地形を一部把握することができた。

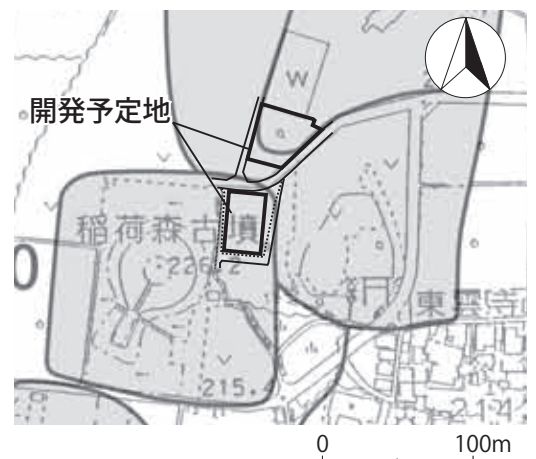
#### (6) 考察

調査区1は、長岡山遺跡の範囲内で長岡山丘陵の西斜面にあたり、平成10年小学校造成工事の際に削平・盛土された範囲である。

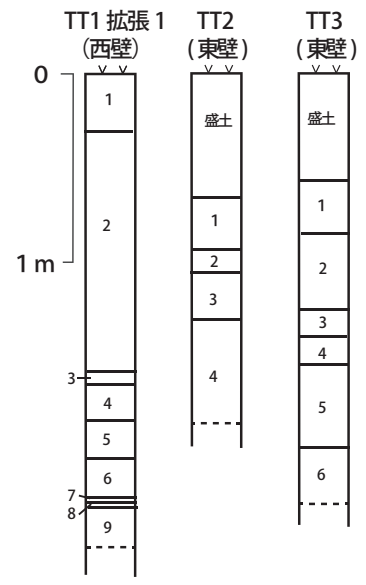
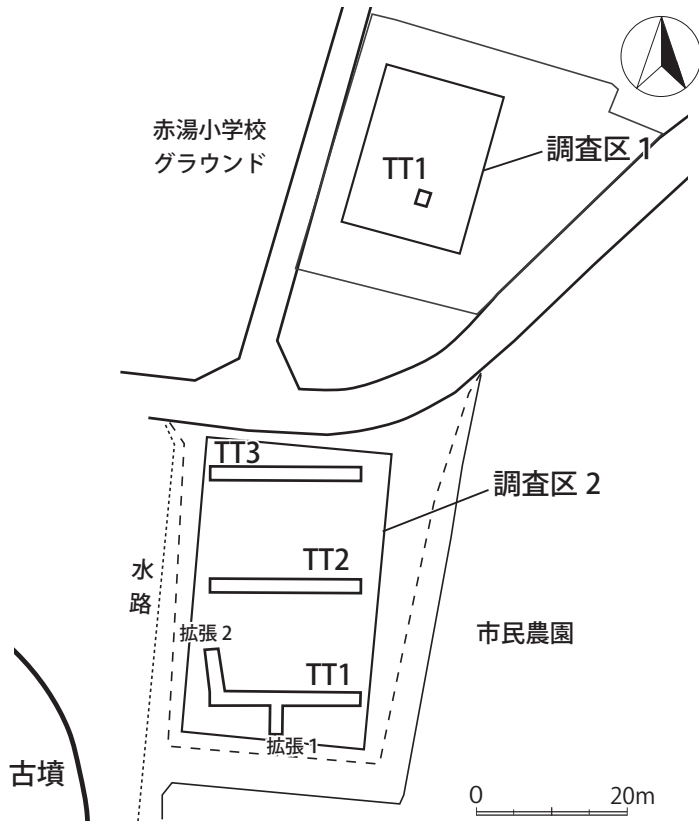
調査区2は、稲荷森古墳の遺跡範囲内（史跡指定地外）で、赤湯園芸高校時代の鶏舎跡地である。全てのトレンチで攪乱が著しい。攪乱層下部に水平な黄灰色粘土層の堆積が見られた。この層は人為的であるが遺物が伴わず、当該層が堆積した時代は不明である。

TT1は東西方向に伸びる枝尾根の裾に沿って掘った感があり、東西方向に伸びる地山が検出された。さらに南にむかって地山が高まるのが明らかとなった。TT2、TT3では地山は検出されなかった。これらの結果は、稲荷森古墳が西に張り出した岬状の枝尾根を利用して築造されていることを再確認させるものと言えよう。

深堀による土層確認では、TT2、3は沖積層で腐植土が見られ、深さ2.3mでも地山に達しない。TT1は地表下30cmで地山である。長岡山の段丘構造を把握するため3.7mまで掘削した。調査地東側の雲南稲荷神社付近の段丘面に比べ、今次地点の段丘は1段低い段丘と考えられ、地山上部は既に削平されているが後期旧石器の時期とみられる。最下層の青色～緑色の層は、最終氷期の水生層と考えられる。上半の地山に風生層が見られないことからこのTT1の地点には旧石器時代の遺跡は無い可能性が高いと言える。



第38図 長岡山遺跡・稲荷森古墳開発予定位置図 S=1/5000

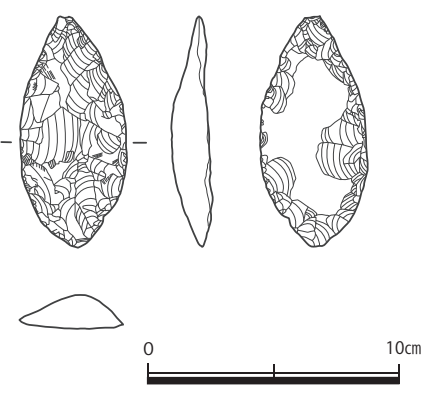


- TT1(拡張1、西壁)
- 1 暗灰色粘土
  - 2 黄灰色粘土(硬い)
  - 3 灰黄褐色シルト粘土
  - 4 黄灰色粘土
  - 5 黄灰色シルト粘土
  - 6 青色粘質砂層(軟)
  - 7 青灰色粘質砂層
  - 8 白色粘土
  - 9 青灰色粘土
- 以下、3.7mまで灰緑色粘質砂層  
3.1mに面的にクラック有

- TT2(東壁)
- 1 灰褐色粘土
  - 2 黄灰色粘土
  - 3 黒色粘土
  - 4 青味のある灰色粘土

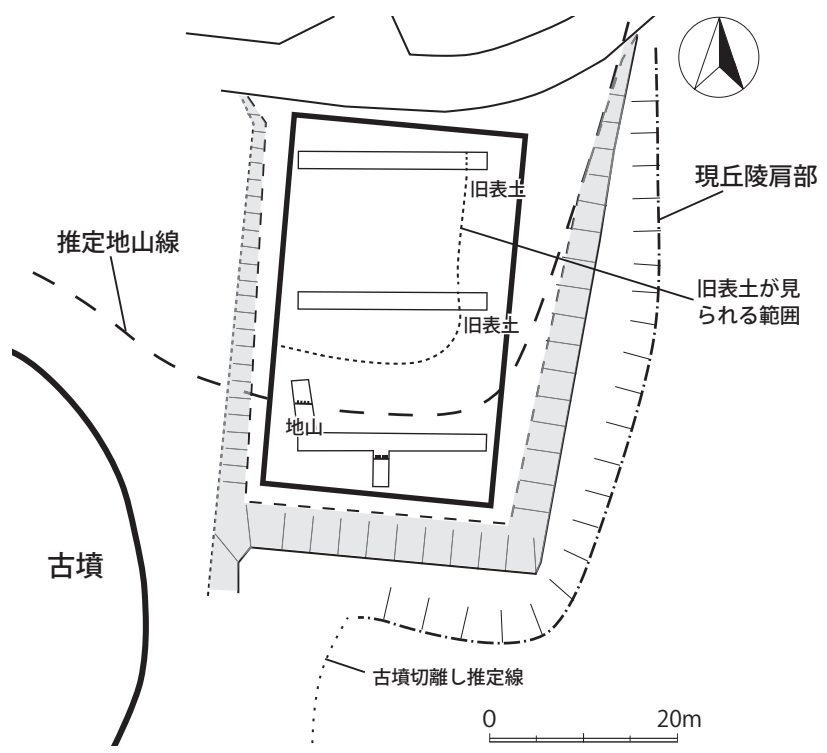
- TT3(東壁)
- 1 暗褐色粘土
  - 2 灰色砂質粘土
  - 3 褐色粘質砂層
  - 4 黄灰色粘土
  - 5 黒色粘土
  - 6 灰色粘土

第 41 図 長岡山遺跡・稲荷森古墳 柱状図 S=1/40



第 42 図 長岡山遺跡出土遺物 S=1/3 (TT1 表土層)

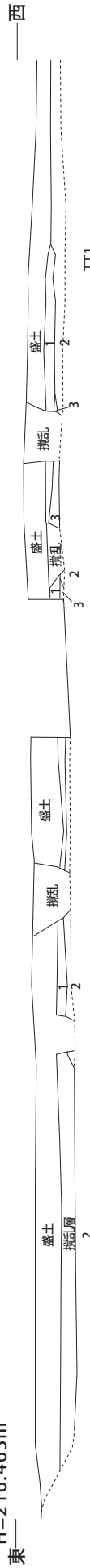
第 39 図 長岡山遺跡・稲荷森古墳トレンチ配置図 S=1/1000



第 40 図 旧丘陵地形推定図 S=1/800

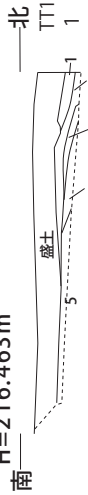
TT1(南壁)

H=216.463m

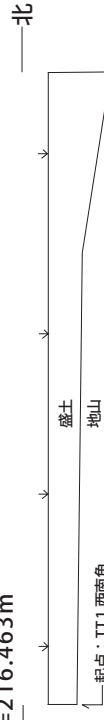


TT1 拡張トレンチ 1 (西壁)

H=216.463m



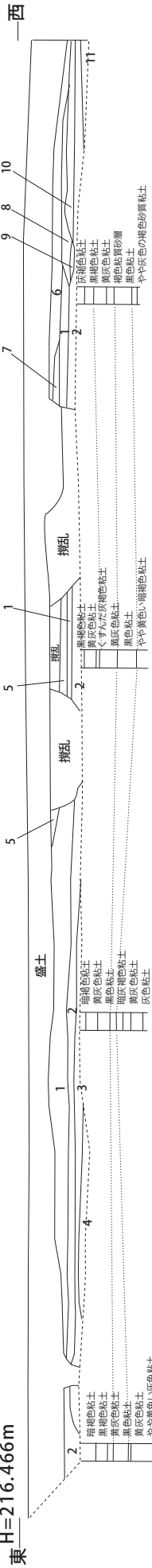
H=216.463m



TT1 拡張トレンチ 2 (西壁)

TT2(南壁)

H=216.466m

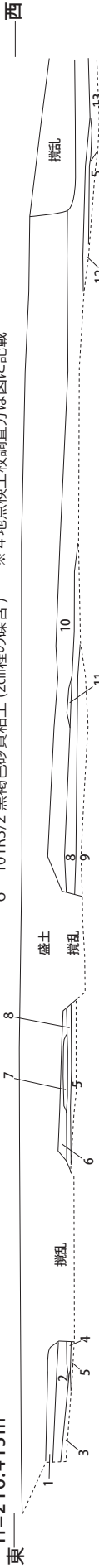


TT2

- 1 10YR2/3 黒褐色砂質粘土 (黄褐色混)
- 2 10YR2/3 黒褐色砂質粘土
- 3 10YR2/1 黒色粘土
- 4 10YR3/3 暗褐色粘土
- 5 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 (少し黄褐色混)
- 6 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (2cm程の礫含)
- 7 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (2cm程の礫含)
- 8 10YR4/4 褐色砂質粘土 (黒褐色混)
- 9 10YR3/1 黒褐色砂質粘土
- 10 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (黄褐色混)
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土

TT3(南壁)

H=216.413m



TT3

- 1 10YR2/2 黒褐色粘土 (硬)
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土 (硬)
- 3 10YR2/3 黒褐色粘土 (硬)
- 4 10YR2/1 黒色粘土
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土
- 6 10YR2/2 黒褐色粘土 (軟)
- 7 10YR2/1 黒色粘土
- 8 10YR3/4 暗褐色粘土 (軟)
- 9 10YR3/3 暗褐色粘土 (軟)
- 10 10YR2/3 黒褐色粘土 (旧耕作土か)
- 11 10YR2/1 黒色粘土
- 12 10YR3/2 黒褐色粘土
- 13 10YR2/3 黒褐色粘土

第 43 図 長岡山遺跡・稻荷森古墳 TT1 ~ 3 断面図 S=1/80



#### 4 漆山字西屋敷一

- (1) 調査日 平成30年4月27日
- (2) 調査場所 南陽市漆山字西屋敷一 1645-2  
調査対象地（工事）面積 400㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、遺跡分布調査未実施であることから、遺跡の有無を確認するため試掘調査を行うものとした。4月3日に周辺踏査、27日に試掘を実施した。調査対象範囲 400㎡について、開発者と協議のうえ建物の基礎予定地を外して幅 1 m×長 2.3 mの試掘溝 1ヶ所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

#### (5) 結果

遺構は検出されなかった。遺物は縄文土器片が4点出土した。

#### (6) 考察

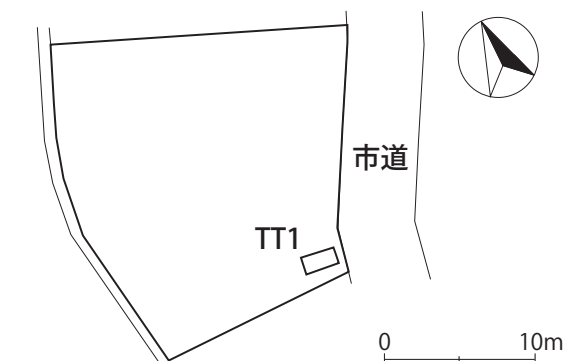
調査地は、漆山館跡南方に位置する南向きの緩斜面である。工事地北側は小崖面となっており崖下に沿って水路が流れる。隣接地の字名は大根在家で、漆山館の根小屋に由来する地名とも考えられる。

縄文土器片が出土した地表下 90cmの層が包含層と考えられ、炭粒の混入が見られる。遺構面は地表下約 105cmと思われるが、地形的に土器は流れ込みの可能性も残る。

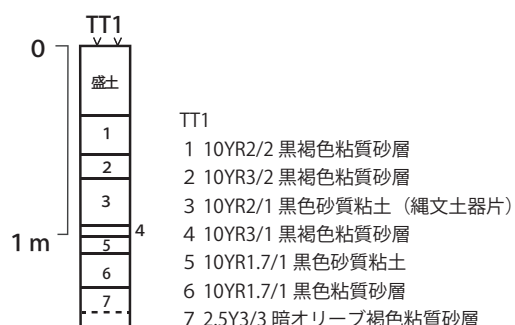
踏査において対象地西側一帯でも土師器片等が表採されていることから新規遺跡と考えられる。遺跡範囲は今次調査地を中心とした傾斜地一帯である。遺跡名は小字名によるが、字西屋敷の範囲は広く、字西屋敷一～四までは 550m 程離れており、東端の西屋敷四には周知の西屋敷遺跡が存在している。また、隣接地は字大根在家だが、字大根在家も範囲が広く、南端に既に大根在家遺跡が存在することから、遺跡名は「西屋敷一遺跡」とする。



第 44 図 漆山字西屋敷一開発予定位置図 S=1/5000



第 45 図 漆山字西屋敷一トレンチ配置図 S=1/500



第 46 図 漆山字西屋敷一柱状図 S=1/40



## 5 大橋城跡

- (1) 調査日 平成 30 年 6 月 8 日
- (2) 調査場所 南陽市大橋字館ノ内 601  
調査対象地（工事）面積 1,622.16㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93 条）
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の大橋城跡の範囲にかかることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 1,622.16㎡について、幅 1.5 m×長 15 m の試掘溝 1ヶ所を設定し試掘を実施した。堀跡はサブトレンチを設けた。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

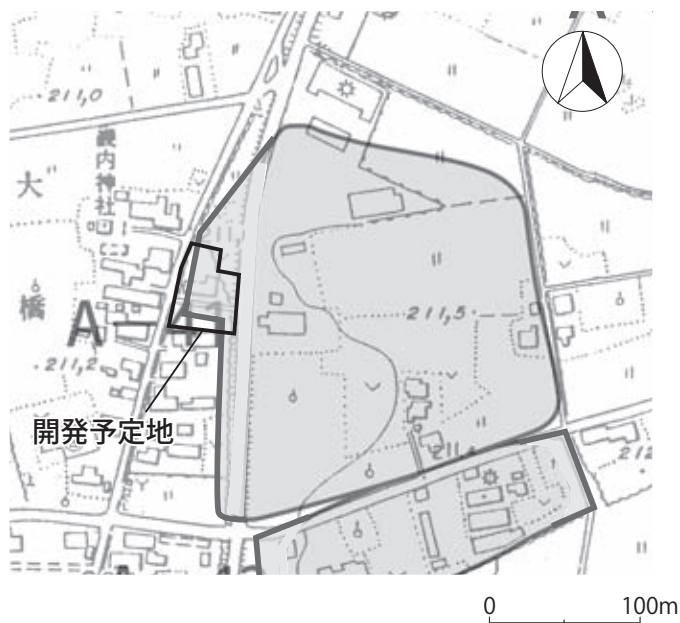
遺構は、大橋城本丸西堀の肩部とピットを検出した。

### (6) 考察

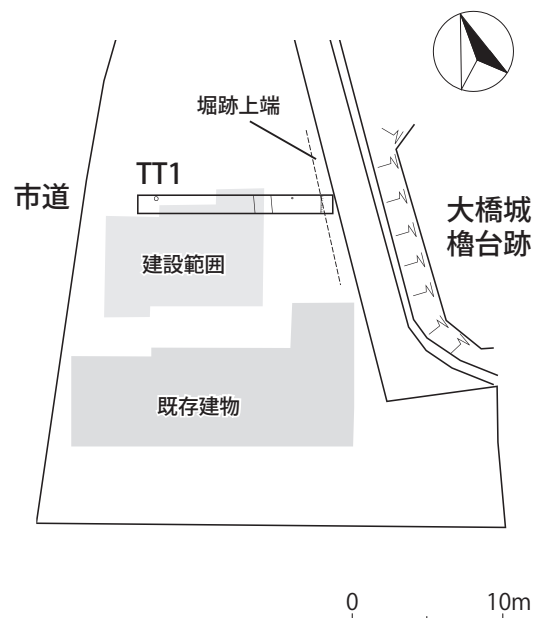
大橋城跡は中世城館址である。調査地は、大橋城本丸の西堀の外側にあたり、明治期の字限図においては小字名は「館之内」となっている。従前の字限図調査から本丸西北角に位置する櫓台跡の西堀西端が今次調査地内にかかる想定されていた。

遺物は、西堀跡から木材片が出土した。表土層及びごく新しい溝跡である SD1 からは近世陶器片が出土した。表土層からは石臼も検出された。

遺構は、トレンチ東端において本丸西堀の上端を検出した。堀の位置は字限図調査で想定されていた位置と一致している。時代不明のピットを 2 つ確認したが、まばらであり、構造物を建てるような土地利用は無かったとみられる。堀の外側に隣接して建物を建てることを制限していたか、道路や広場のような土地であった可能性もあろう。

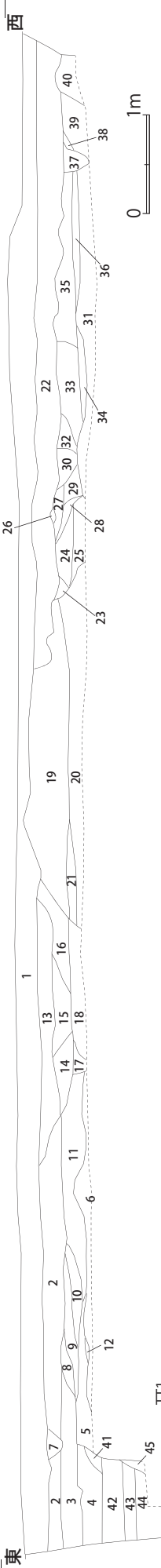


第 47 図 大橋城跡開発予定位置図 S=1/5000



第 48 図 大橋城跡トレンチ配置図 S=1/500

TT1(南壁)  
H=212m

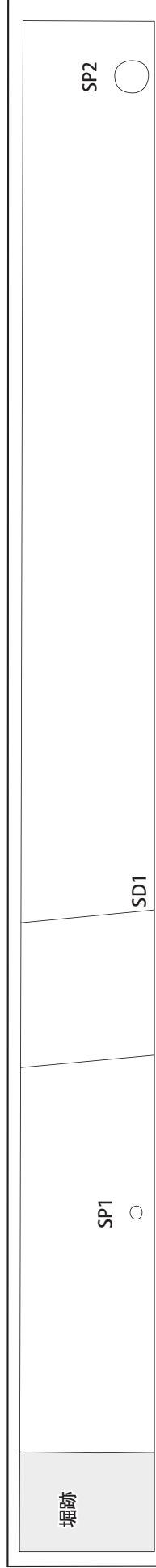


TT1

- 1 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 2 10YR4/4 褐色砂質粘土 (1より明るい。炭混じる)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 (黄褐色少し混じる)
- 4 10YR4/1 褐灰色砂質シルト (堀跡)
- 5 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 6 10YR4/4 褐色砂質シルト
- 7 10YR4/4 褐色砂質粘土 (炭少し混じる)
- 8 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 (炭少し混じる)
- 9 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質粘土
- 11 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 12 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 13 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (炭少し混じる)
- 14 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 15 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (炭少し混じる)
- 16 10YR3/2 黒褐色砂質粘土
- 17 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 (黄褐色少し混じる)
- 18 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (黄褐色少し混じる)
- 19 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (炭少し混じる)
- 20 10YR3/3 暗褐色砂質粘土 (灰色粘土混じる)
- 21 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 22 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 (炭少し混じる)
- 23 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 (炭少し混じる)
- 24 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 25 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 26 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 27 10YR3/4 暗褐色砂質粘土 (炭少し混じる)
- 28 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 29 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 30 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 31 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 32 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 33 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 34 10YR3/4 暗褐色砂質粘土
- 35 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 36 10YR4/6 褐色砂質粘土
- 37 10YR3/3 暗褐色砂質粘土
- 38 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 39 10YR4/4 褐色砂質粘土
- 40 10YR4/4 褐色砂質粘土 (黄褐色粘土混じる)
- 41 2.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (堀跡)
- 42 2.5YR3/1 黒褐色シルト粘土 (堀跡)
- 43 2.5YR3/1 黒褐色砂質粘土 (堀跡)
- 44 5Y2/2 オリーブ黒色粘質シルト (堀跡)
- 45 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト (堀跡)



TT1 平面図



第 49 図 大橋城跡 TT1 断面図・平面図 S=1/60

## 6 関根館跡

- (1) 調査日 平成30年6月8日  
 (2) 調査場所 南陽市関根字屋敷 701-1 他  
 調査対象地（工事）面積 1,099.6㎡  
 (3) 調査原因 民間開発（93条）  
 (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の関根館跡にかかることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 1,099.6㎡について、既存建物解体工事の際に試掘可能な地点において幅 1 m×長 3.5 mの試掘溝 1ヶ所を設定し、試掘を実施した。

### (5) 結果

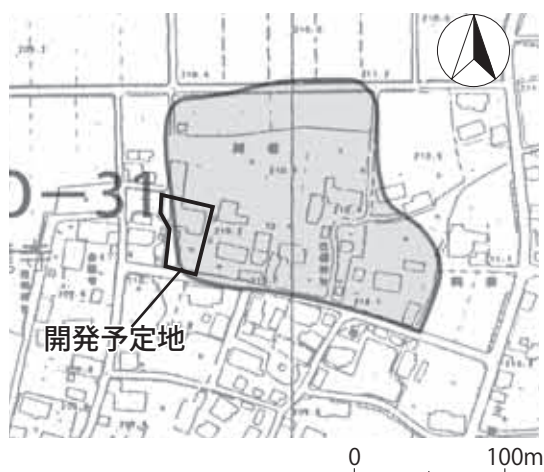
遺構は、関根館跡主郭西堀の肩部を検出した。従前の工事で 50cm 以上盛土されており、地表面で遺物は確認できず、TT1 でも遺物は出土しなかった。試掘後は埋め戻しを行った。

### (6) 考察

関根館跡は中世城館址である。調査地は、言わば二の丸に相当する位置にあたり、家臣等の屋敷跡があった場所と推測されている。

遺物は、出土しなかった。

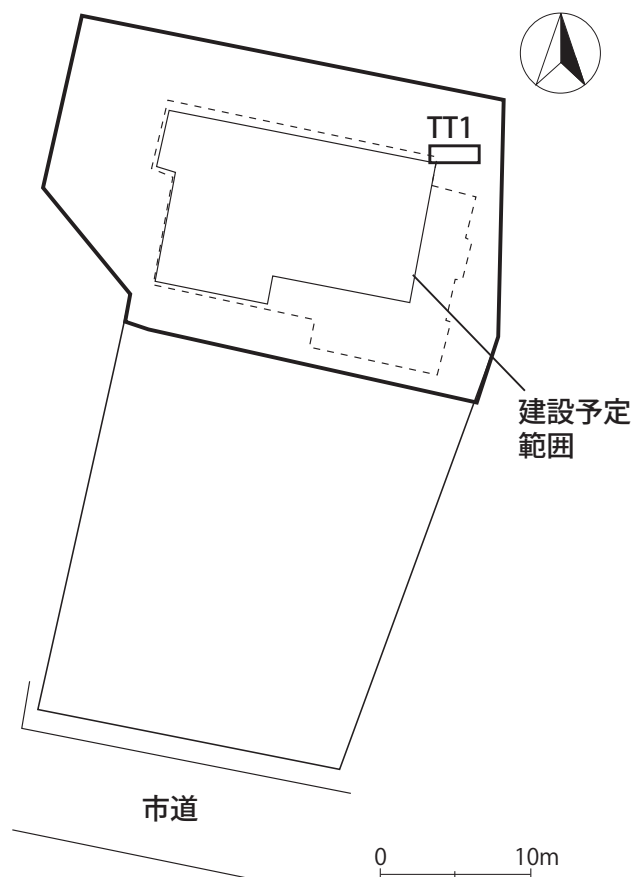
遺構は、主郭西堀と思われる落ち込みの上端を確認した。字限図調査によれば、主郭の周囲を草地が取り巻いており土塁跡又は埋没した堀跡と考えられていたが、これまでの踏査ではそのいずれとも判断できない現状であった。今次調査によりこの字限図に見られる草地には少なくとも堀跡が含まれることが判明した。なお、主郭側を掘っていないため土塁の有無については今回は判断できない。



第 50 図 関根館跡開発予定位置図 S=1/5000

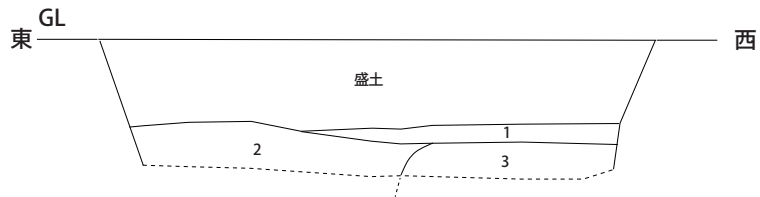


第 52 図 関根館跡柱状図 S=1/40



第 51 図 関根館跡トレンチ配置図 S=1/500

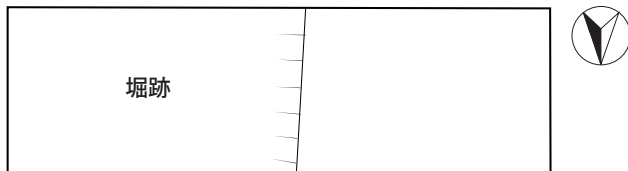
TT1 南壁



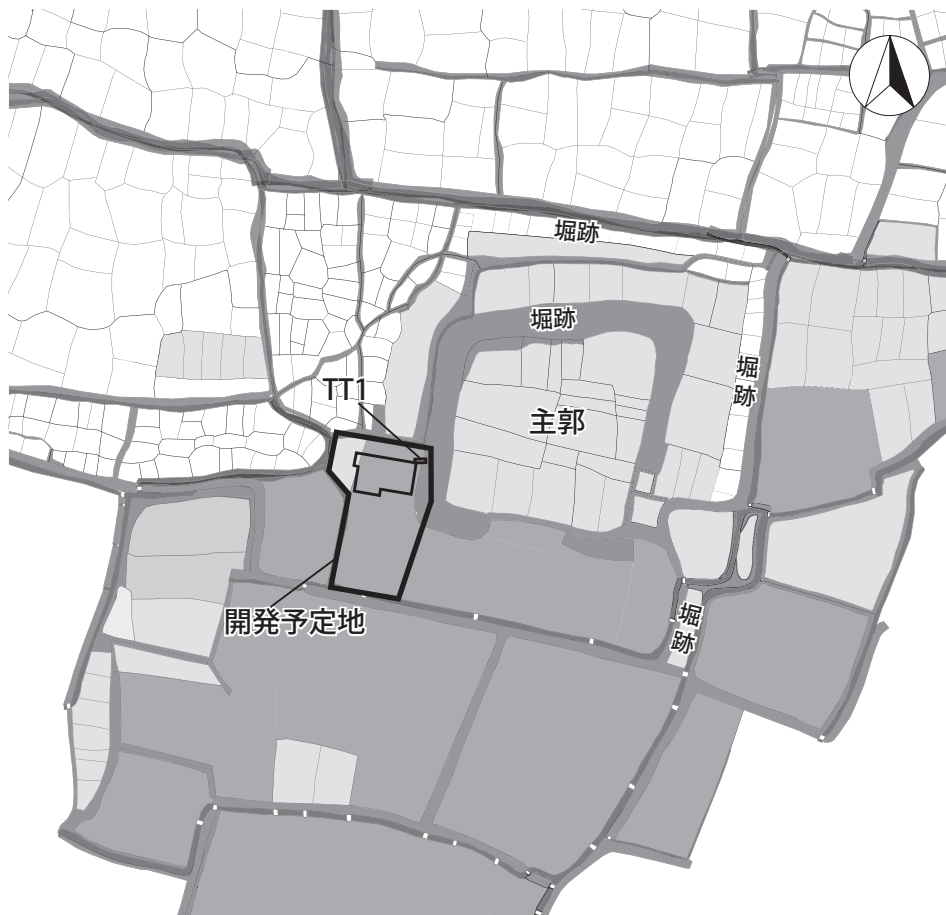
TT1

- 1 10YR2/2 黒褐色砂質粘土
- 2 2.5Y3/1 黒褐色砂質粘土（締りなし、軟、堀跡）
- 3 2.5Y3/2 黒褐色シルト（褐色粘土混）

TT1 平面図



第 53 図 関根館跡 TT1 平面図・断面図 S=1/50 0 1 m



第 54 図 関根館跡と今次開発予定地  
(明治 8 年字限図による)

7 <sup>みつまどおり ひがしろつかく</sup> 三間通字東六角

- (1) 調査日 平成30年6月13日
- (2) 調査場所 南陽市三間通字東六角 143-4 (東六角遺跡隣地)  
調査対象地 (工事) 面積 139.73㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の東六角遺跡の隣地で分布調査未実施地であることから、遺跡の有無を確認するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 139.73㎡について、幅 1 m×長 1 mの試掘穴 3ヶ所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

遺構は検出されなかった。遺物は表土から土師器片 1 点が出土した。

(6) 考察

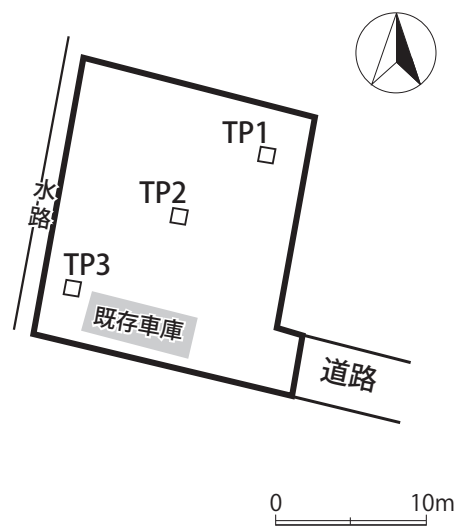
東六角遺跡は平安時代の遺跡である。調査地は、河間の低地が西に向かって低い自然堤防に変化していく直前の地点とみられ、調査地西端が周知の遺跡の東辺にあっている。

遺物は、TP1 表土から摩滅した土師器片が 1 点出土したが、遺物は流れ込みと思われる。

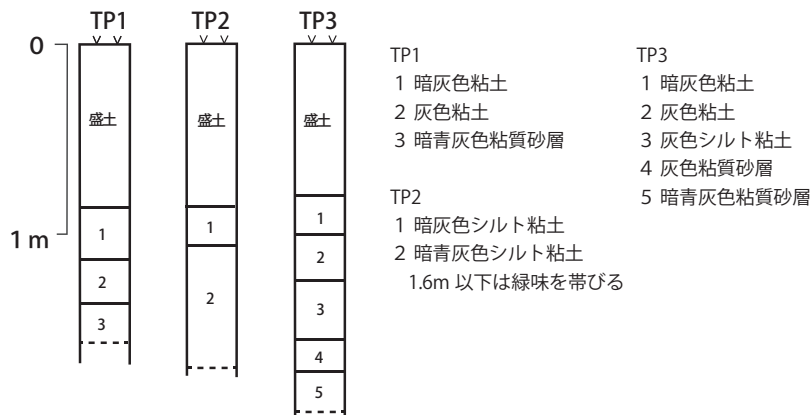
遺構は確認されなかった。試掘結果及びボーリングステッキによる土層調査の結果から、当該地は遺跡の範囲外であると考えられる。したがって東六角遺跡は今調査地までは広がっていないと考えられる。



第 55 図 三間通字東六角開発予定位置図 S=1/5000



第 56 図 三間通字東六角試掘穴配置図 S=1/500



第 57 図 三間通字東六角柱状図 S=1/40

## 8 矢ノ目館跡 (1)

- (1) 調査日 平成30年6月13日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字北的919  
調査対象地(工事)面積100㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の矢ノ目館遺跡の範囲内であることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲100㎡のうち舗装の無い地点を選び、幅1m×長1mの試掘穴2ヶ所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

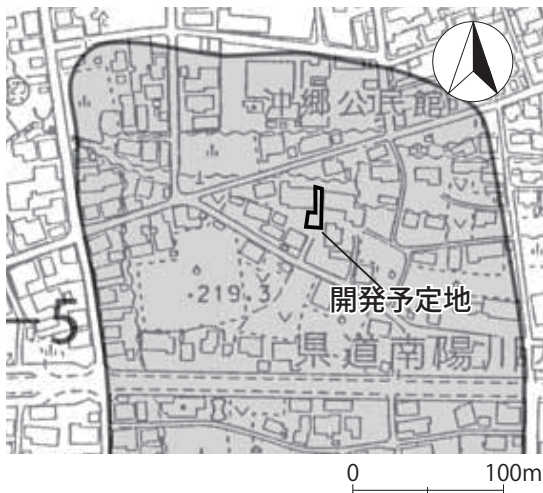
遺構は、TP2で土坑1ヶ所を検出した。遺物は、平安時代の須恵器坏等が出土した。

### (6) 考察

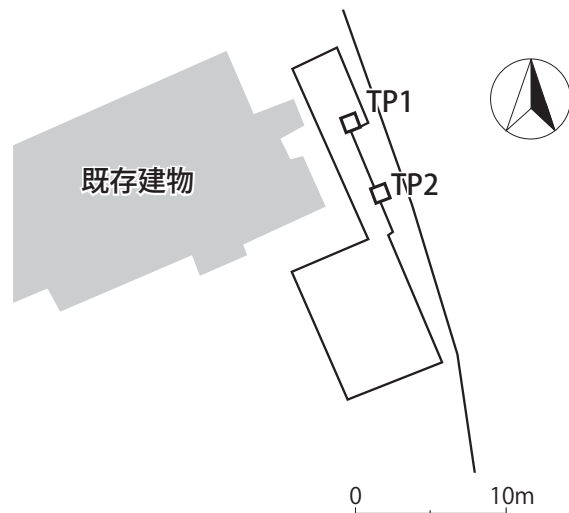
矢ノ目遺跡は奈良・平安時代の遺跡である。古代置賜郡衙に関係するとみられる郡山遺跡群の主要遺跡の一つである。調査地は自然堤防上にあたり、周辺は果樹園や宅地の利用が多い。調査地は、矢ノ目館跡主郭から北に約130m程の位置にあたる。

遺物は、TP1表土層から土器片1点、TP2の第4層及び土坑覆土から土師器片と須恵器坏1点が出土した。遺構は、TP2で土坑が1ヶ所確認された。土坑はTP2北西角で検出された。土坑の南東角にあたりとみられ、覆土は炭混じりで土師器片が多く含まれる。

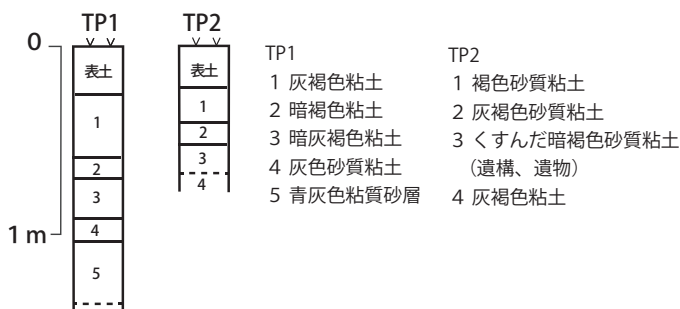
一帯は古くからの集落で、今次調査地のある敷地内には板碑も存在している。今次調査地の南を流れる水路は、かつて沖郷地区を流れていた旧吉野川から分岐し、稲荷森古墳方向に流れる主要水路になっており、その南北に形成された自然堤防上に集落遺跡が広がっていると考えられる。



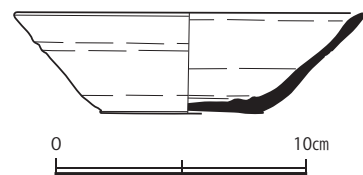
第58図 矢ノ目館跡(1) 開発予定位置図 S=1/5000



第59図 矢ノ目館跡(1) 試掘穴配置図 S=1/500



第60図 矢ノ目館跡(1) 柱状図 S=1/40



第61図 矢ノ目館跡(1) 出土遺物 S=1/3

## 9 漆山字東高堰一 (1)

(1) 調査日 平成 30 年 6 月 15 日

(2) 調査場所 南陽市漆山字東高堰一 855-3、857-1  
調査対象地 (工事) 面積 857.05㎡

(3) 調査原因 民間開発

(4) 調査方法及び内容

当該地は、遺跡分布調査の未実施地である。周知の東高堰古墳の近隣であることから、遺跡の有無を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 857.05㎡について、幅 1 m×長 1 m の試掘溝 2ヶ所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

遺構は、ピットを検出した。遺物は土師器片が出土した。

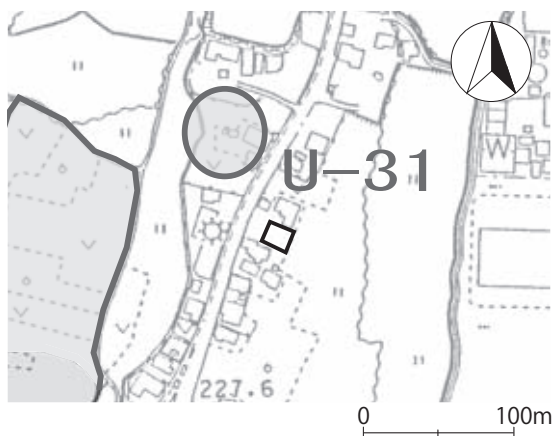
(6) 考察

調査地は、織機川<sup>おりはたがわ</sup>右岸に位置する。織機川旧河道左岸に発達した自然堤防上にあたり、同じ自然堤防上には、西高堰古墳、大仏遺跡、天王遺跡が立地する。調査地東辺から東側は 1 段低く、東側にむかって緩やかに低くなることから、調査地は自然堤防の東端にあたると思われる。

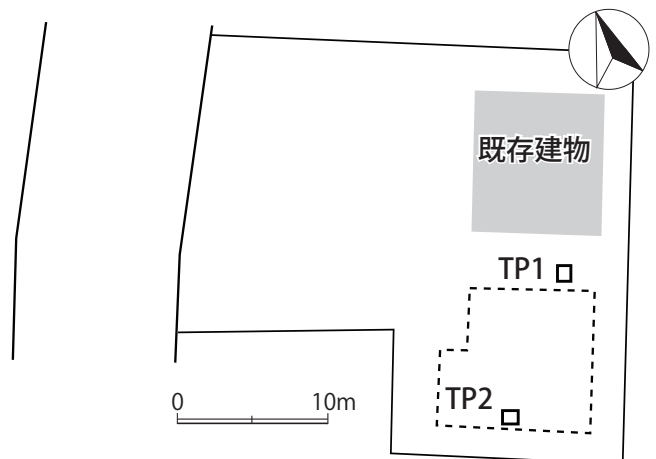
遺物は、TP1、TP2 とも第 2 層の黒色層から出土した。土師器の小片が各 1 点である。地表面でも土師器片 3 点を表採した。時代は古代と思われる。

遺構は、TP1、TP2 ともにピットを確認した。遺構面の深さは地表面から 70～82cm である。

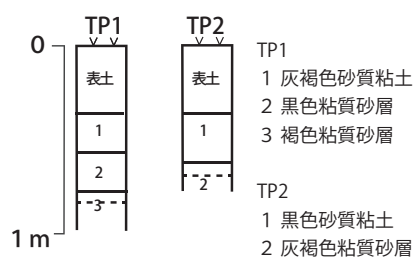
試掘結果から、調査地は遺跡の東端と考えられる。新規遺跡 (東高堰一遺跡) として登録又は周知の遺跡 (西高堰古墳) の範囲拡大及び種別追加等が必要である。



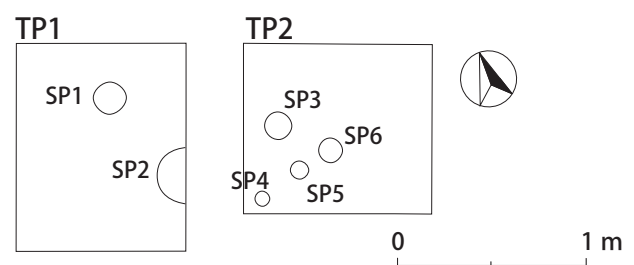
第 62 図 漆山字東高堰一 (1) 開発予定位置図 S=1/5000



第 63 図 漆山字東高堰一 (1) 試掘穴配置図 S=1/500



第 64 図 漆山字東高堰一 (1) 柱状図 S=1/40



第 65 図 漆山字東高堰一 (1) 平面図 S=1/40

## 10 上河原遺跡

- (1) 調査日 平成 30 年 6 月 22 日
- (2) 調査場所 南陽市島貫字六角 690  
調査対象地（工事）面積 11,000m<sup>2</sup>
- (3) 調査原因 公共事業（94 条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の上河原遺跡及び島貫遺跡にかかることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 11,000m<sup>2</sup>について、幅 1.5 m×長 20 m の試掘溝 3 ヶ所を設定し、試掘を実施した。島貫遺跡の範囲は防火水槽設置地及び水路で、既に試掘調査や立会調査が実施された範囲であることから、今回は上河原遺跡にかかる範囲を調査対象とした。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

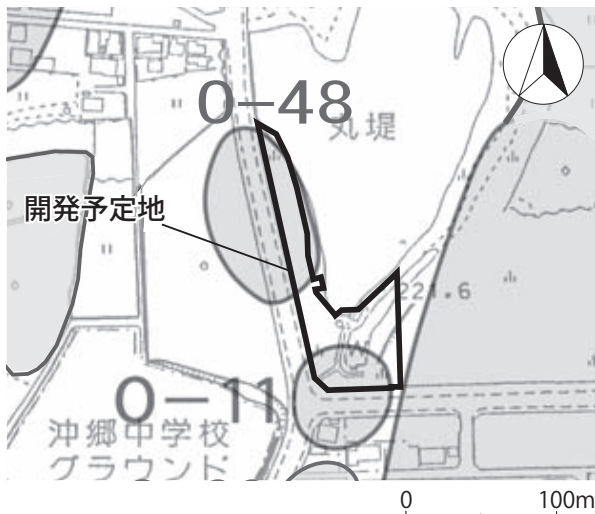
遺構はピット、土坑、溝跡を検出した。遺物は平安時代の土師器、須恵器が出土した。

### (6) 考察

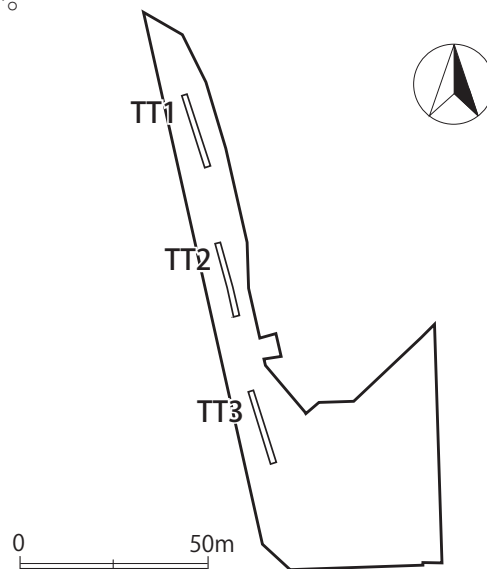
上河原遺跡は平安時代の遺跡である。調査地は丸堤の西縁にあたり、吉野川旧河道右岸の自然堤防である。遺跡はこの自然堤防上に立地する。

遺物は、TT1～3 の遺構面上層及び遺構覆土から出土した。出土遺物は土師器及び須恵器である。SK1 からは土師器壺の底部が出土した。須恵器片は SG1 から出土した。

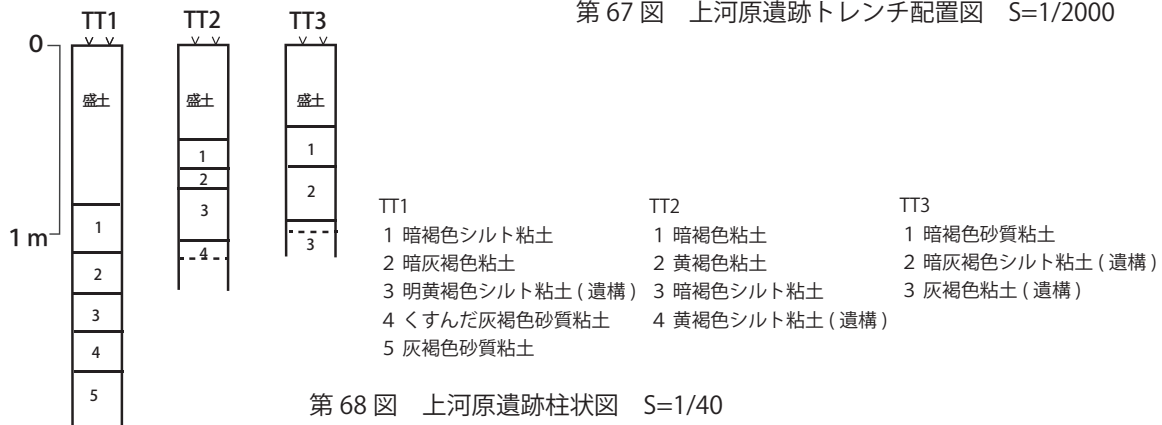
遺構は、TT1、TT2 でピット、TT3 でピット、土坑、溝跡を確認した。全体的に TT2 南半から TT3 北半の範囲で遺構・遺物が多い。



第 66 図 上河原遺跡開発予定位置図 S=1/5000

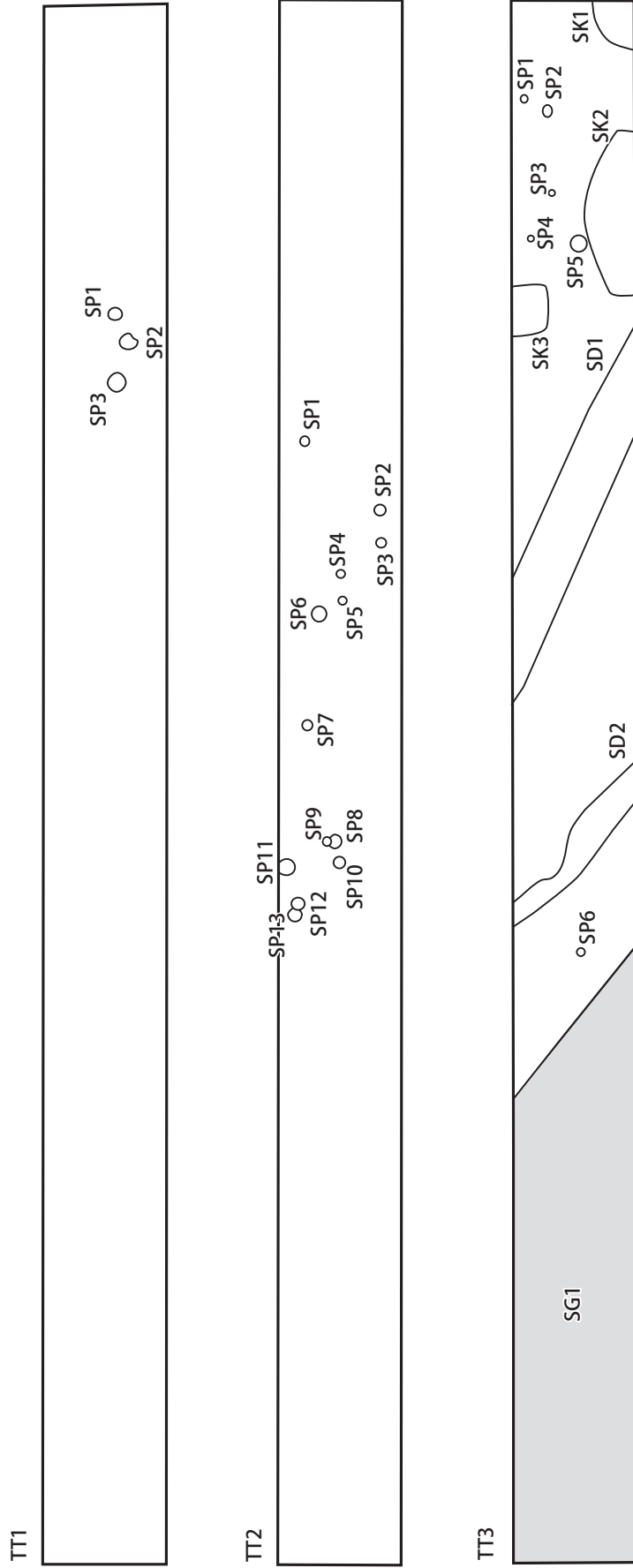


第 67 図 上河原遺跡トレンチ配置図 S=1/2000



第 68 図 上河原遺跡柱状図 S=1/40





0 2m

第 69 図 上河原遺跡 TT1 ~ 3 平面図 S=1/80

## 11 上大作裏遺跡(1)

- (1) 調査日 平成30年6月26日
- (2) 調査場所 南陽市和田字甲大作 3404-1 他  
調査対象地(工事)面積 5,511㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、上大作裏遺跡にかかることから、遺跡の範囲と内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 5,511㎡について、幅 1.5 m×長 20 mの試掘溝 4ヶ所、幅 1 m×長 1 mの試掘穴 6ヶ所と幅 1.5 m×長 1.5 mの試掘穴 2ヶ所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

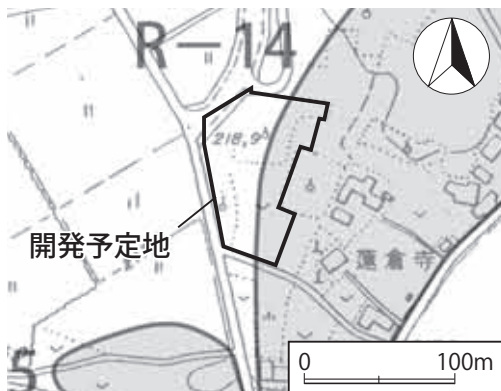
### (5) 結果

遺構はピット等を検出した。遺物は表土から土器片が出土したが時期は不明である。

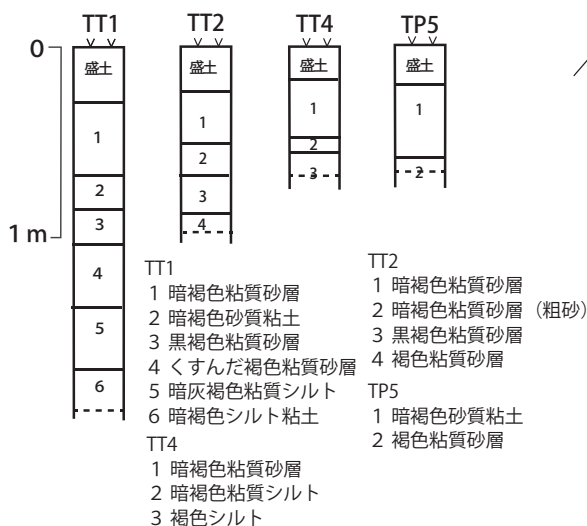
### (6) 考察

上大作裏遺跡は縄文時代、弥生時代、平安時代、中世の遺跡である。調査地は、織機川旧河道右岸の自然堤防の西端で、遺跡の西辺に位置する。

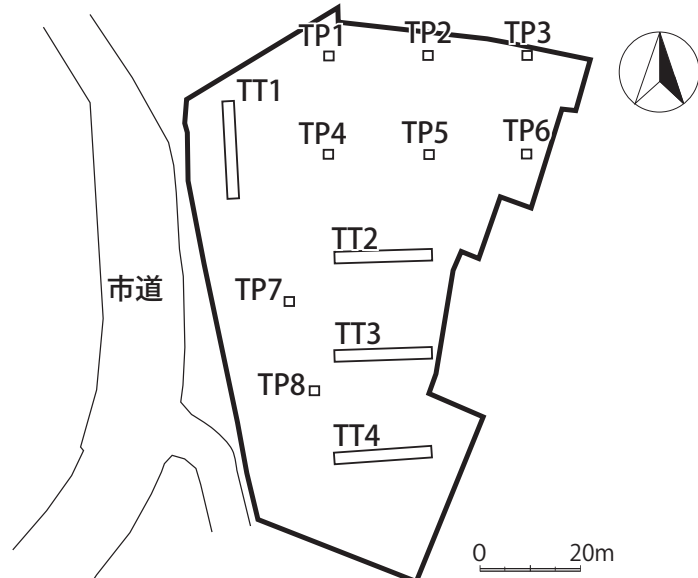
遺物は、TT4 表土で土器の小片が 1 点出土した。遺構は、TT3、TT4 でピット 3 ヶ所、土坑 1 ヶ所を検出したが、遺物が伴わず年代は不明である。古くても中世頃の遺構かと思われるが、全般に現代の溝跡や掘り込み等の攪乱が多く、新しい掘り込みである可能性も残る。遺跡の主体は東側の微高地上に立地するものと考えられる。



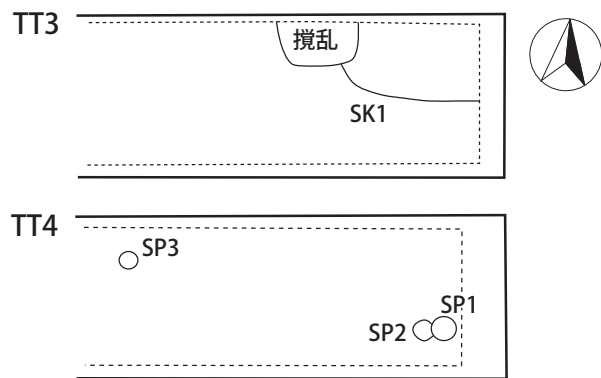
第 70 図 上大作裏遺跡(1) 開発予定位置図 S=1/5000



40 第 72 図 上大作裏遺跡(1) 柱状図 S=1/40



第 71 図 上大作裏遺跡(1) トレンチ配置図 S=1/1500



第 73 図 上大作裏遺跡(1) 平面図 S=1/60

## 12 観音堂遺跡

- (1) 調査日 平成30年7月18日
- (2) 調査場所 南陽市蒲生田666-3他(字高畑、字関口前、宮内字関口五)  
調査対象地(工事)面積4,800㎡
- (3) 調査原因 市道整備(94条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、観音堂遺跡の範囲内であることから、遺跡の内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲4,800㎡のうち用地買収済地について、幅1m×長1mの試掘穴9ヶ所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

遺構は確認されなかった。遺物は土師器片1点が出土した。

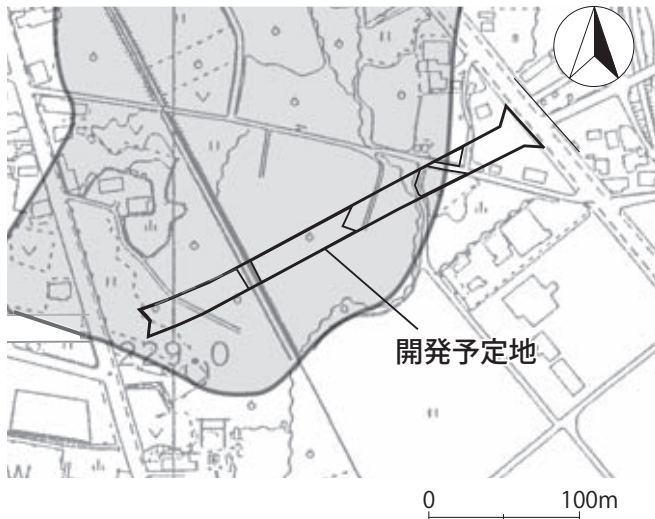
### (6) 考察

観音堂遺跡は縄文時代及び平安時代の遺跡である。遺跡の範囲は広いがこれまで数回実施された県教委による試掘調査では、遺構が確認された範囲は限られ、遺構も少なく、県道赤湯宮内線整備工事の際も発掘調査は実施されなかった。

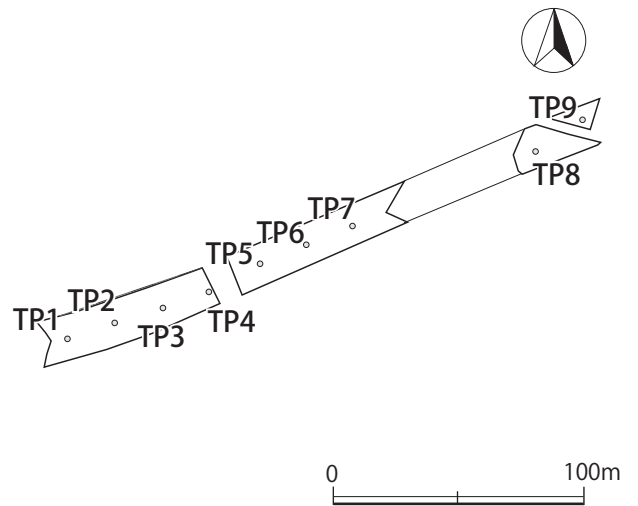
遺構は確認されなかった。遺物はTP1の表土層で土師器小片が1点確認された。

土層は、多くの試掘地点において耕作土直下で川原石が多く混じる砂礫層となる。この状況から河川氾濫原であったと考えられる。遺跡が確認できなかったことから、周辺地の地表面踏査も実施したが、周辺地でも遺物の散布状況は確認できなかった。

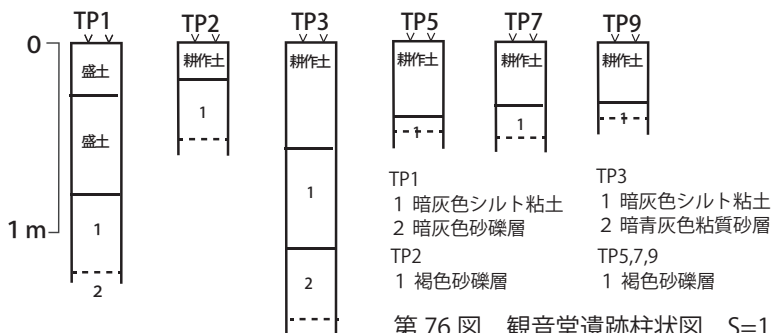
これらのことから、一帯は氾濫原の中に洪水堆積物が所々で小規模な微高地を形成している土地と考えられ、観音堂遺跡は遺跡範囲内に一様に広がっているのではなく、小規模な微高地に分散して立地している遺跡群である可能性がある。



第74図 観音堂遺跡開発予定位置図 S=1/5000



第75図 観音堂遺跡試掘穴配置図 S=1/3000



第76図 観音堂遺跡柱状図 S=1/40

### 13 漆山字東高堰一(2)

- (1) 調査日 平成30年7月30日、31日
- (2) 調査場所 南陽市漆山字東高堰一 864-1 他  
調査対象地(工事)面積 20,693㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地であることから、遺跡の有無を確認するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 20,693㎡について、幅 1.5 m × 長 2.5 m の試掘溝を 28ヶ所、幅 1 m × 長 10 m の試掘溝 6ヶ所、幅 1 m × 長 5 m の試掘溝 1ヶ所を設定し、試掘を実施した。各地点掘底でボーリングステッキによる土層確認を行った。試掘後は埋め戻した。

#### (5) 結果

遺構は、確認されなかった。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器等が出土したが、流れ込みと思われる。土層等から対象地は低湿地だったと思われる。

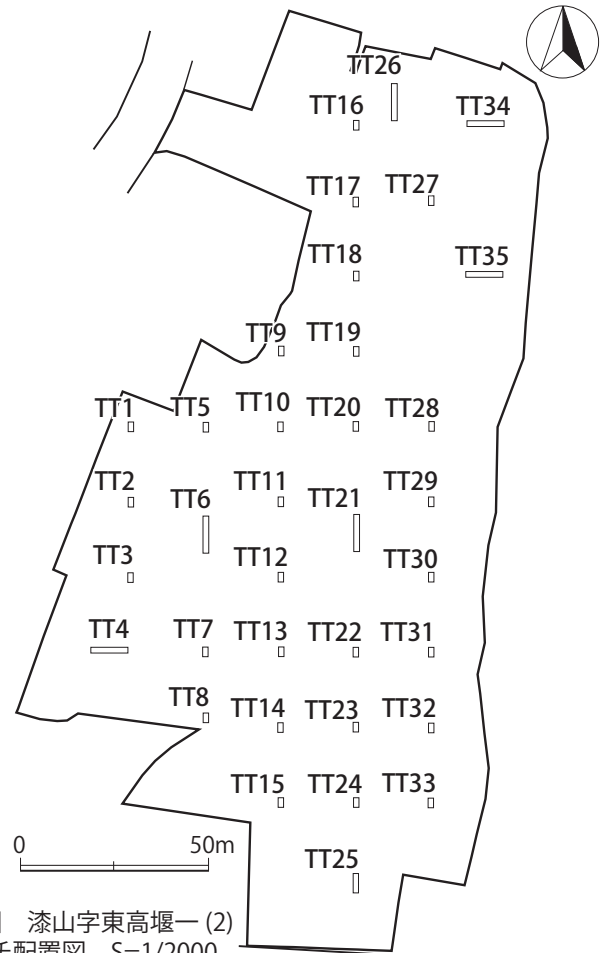
#### (6) 考察

調査地は、織機川右岸の後背湿地あるいは織機川旧河道左岸の後背湿地とも言える西北から東南へ下る緩い傾斜のある低地で、現況は水田である。対象地の西側には織機川旧河道によって形成された自然堤防が発達し、複数の遺跡が立地している。土層からは、調査地西端の一部を除き、ほとんどが低湿地であったと思われる。

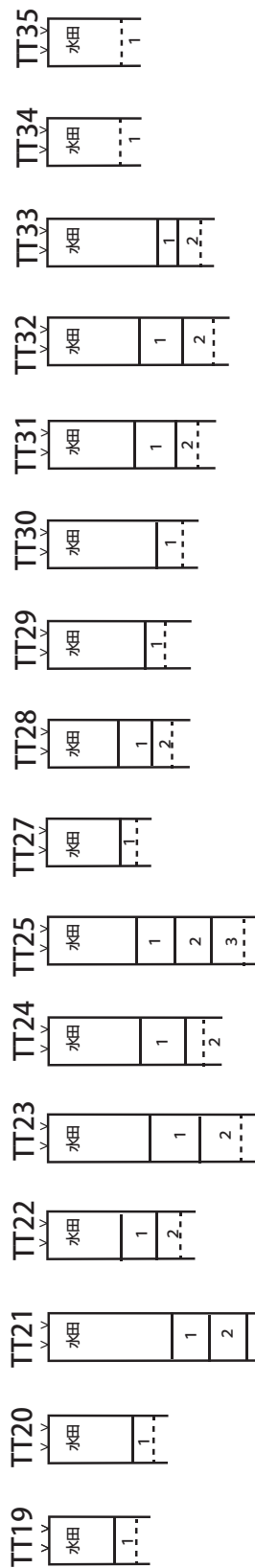
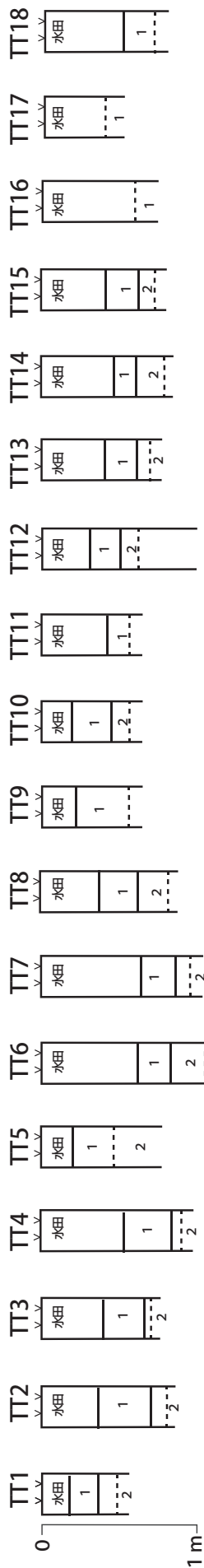
遺物は、TT1～4の表土層(第1層)及び第2層から出土した。弥生土器、土師器、須恵器が混在し、出土状況から遺物は流れ込みと思われる。遺構は、確認されなかった。これらのことから、今次対象地は遺跡の近隣ではあるが、遺跡は無いと思われる。



第 77 図 漆山字東高堰一(2) 開発予定位置図 S=1/5000



第 78 図 漆山字東高堰一(2) トレンチ配置図 S=1/2000



TT1	1 暗褐色シルト粘土 2 黄褐色粘質砂層	TT16	1 褐色粘質砂層	TT27	1 褐色粘質砂層	TT32	1 黒褐色粘質砂層 2 灰褐色粘質砂層
TT2	1 暗褐色シルト粘土 2 黄褐色粘質砂層	TT17	1 黄褐色粘質砂層	TT28	1 暗褐色粘質粘土 2 暗灰褐色砂質粘土	TT33	1 黒褐色砂質粘土 2 灰褐色砂質粘土 (軟)
TT3	1 暗褐色シルト粘土 2 黄褐色粘質砂層	TT18	1 褐色粘質砂層	TT29	1 暗灰褐色粘質砂層	TT34	1 褐色砂層
TT4	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT19	1 暗青灰色粘質砂層	TT30	1 暗灰色粘質砂層	TT35	1 暗灰色砂層
TT5	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT20	1 褐色砂層	TT31	1 黒褐色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層 3 灰褐色粘質砂層		
TT6	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT21	1 褐色粘質砂層 2 灰色シルト粘土 3 灰色粘質砂層	TT22	1 暗褐色粘質粘土 2 暗灰褐色砂質粘土		
TT7	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT22	1 暗褐色粘質粘土 2 暗灰褐色砂質粘土	TT23	1 黒褐色粘質砂層 2 灰褐色粘質砂層		
TT8	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT23	1 黒褐色粘質砂層 2 灰褐色粘質砂層	TT24	1 黒褐色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層		
TT9	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT24	1 黒褐色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層	TT25	1 黒色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層 3 灰褐色粘質砂層		
TT10	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT25	1 黒色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層 3 灰褐色粘質砂層	TT26	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層		
TT11	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT27	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT27	1 褐色粘質砂層		
TT12	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT28	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT28	1 暗褐色粘質粘土 2 暗灰褐色砂質粘土		
TT13	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT29	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT29	1 暗灰褐色粘質砂層		
TT14	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT30	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT30	1 暗灰色粘質砂層		
TT15	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT31	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT31	1 黒褐色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層 3 灰褐色粘質砂層		
TT16	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT32	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT32	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層		
TT17	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT33	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT33	1 黒褐色砂質粘土 2 灰褐色砂質粘土 (軟)		
TT18	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT34	1 暗褐色粘質砂層 2 赤褐色粘質砂層	TT34	1 褐色砂層		

第 79 図 漆山字東高堰一(2)柱状図 S=1/40 ※掘底までのデータ

## 14 沢田遺跡 (1)

- (1) 調査日 平成 30 年 8 月 30 日
- (2) 調査場所 南陽市若狭郷屋字樋ノ越  
調査対象地 (工事) 面積 2,000㎡
- (3) 調査原因 公共事業 (94 条)
- (4) 調査方法及び内容

当該地は、周知の沢田遺跡の範囲内である。遺跡の内容を把握するために試掘調査を行うものとした。調査対象範囲約 2,000㎡について、幅 2 m×長 2 m の試掘溝 5ヶ所、幅 2 m×長 10 m の試掘溝 1ヶ所を設定し試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。工事予定地西半は長堤跡で以前の調査で遺跡が確認されないことから試掘範囲から除外した。

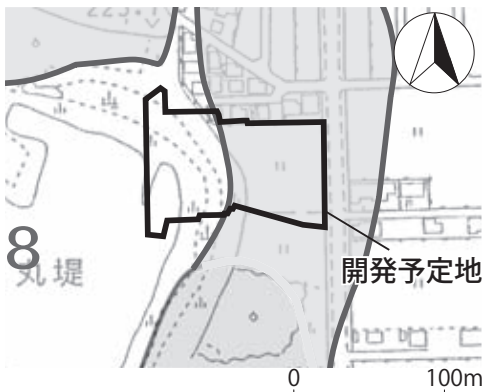
### (5) 結果

遺構は、土坑を 1ヶ所確認した。遺物は、土師器、須恵器等が出土した。

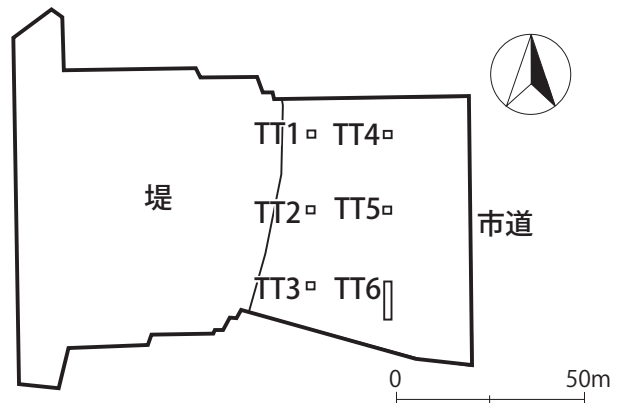
### (6) 考察

沢田遺跡は弥生～平安時代の遺跡である。調査地は、吉野川旧河道左岸にあたり、東南方向に流れる派流の分岐地点にあたる。

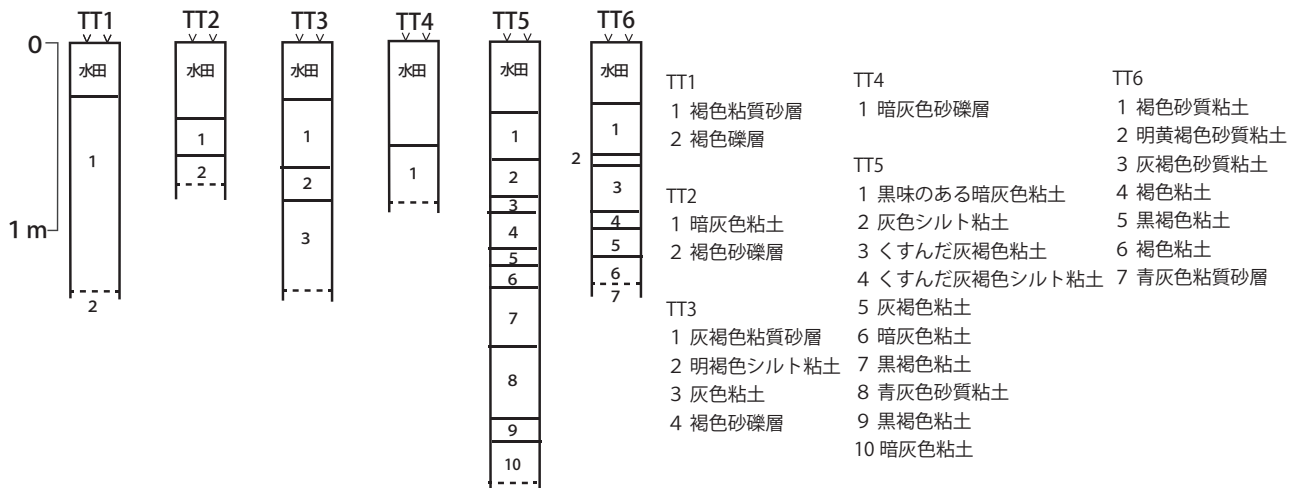
遺物は、TT4 表土層から流れ込みと思われる須恵器片 1 点、TT5 の第 2 層・第 4 層から土師器片を検出した。遺構は、TT5 第 4 層で浅い土坑を検出した。覆土に土師器片を含み平安時代の遺構とみられる。土層状況から今次調査地西半は主に河川の流路であったと思われる、TT5 付近から東に微高地があったと思われる。TT5 で土層確認のため深掘を実施した。地表下 1.2m の第 7 層あるいは地表下 2 m 付近の第 10 層が古墳・弥生時代の層に相当する可能性があるが、遺物は検出されず年代は不明である。



第 80 図 沢田遺跡 (1) 開発予定位置図 S=1/5000



第 81 図 沢田遺跡 (1) トレンチ配置図 S=1/2000



第 82 図 沢田遺跡 (1) 柱状図 S=1/40

## 15 清水上遺跡

- (1) 調査日 平成 30 年 10 月 2 日  
(2) 調査場所 南陽市蒲生田字濃満<sup>のま</sup>屋敷（字町屋敷）1409-1  
調査対象地（工事）面積 940㎡  
(3) 調査原因 民間開発（93 条）  
(4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の清水上遺跡である。遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 940㎡について、幅 1.8 m×長 20 m の試掘溝 1 ケ所、幅 1.8 m×長 5 m 試掘溝 1 ケ所を設定のうえ試掘を実施し、遺構把握のため最終的に TT1 と TT2 を連結した。TT1 西端は 1 段深掘りを行い、下層の状況を確認した。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

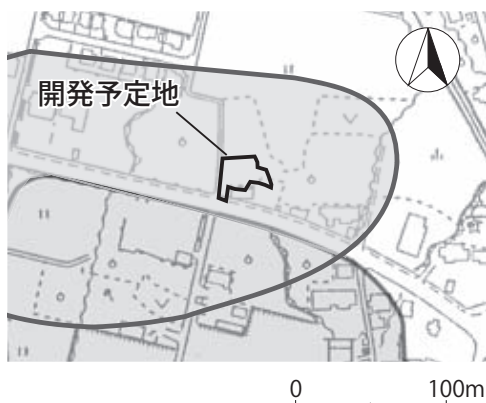
遺構は、掘立柱建物跡 1 棟、ピット、溝跡、焼土跡を確認した。平成 26 年度調査検出の建物群と関連するとみられる。遺物は、石器、縄文土器、土師器、須恵器が出土した。

### (6) 考察

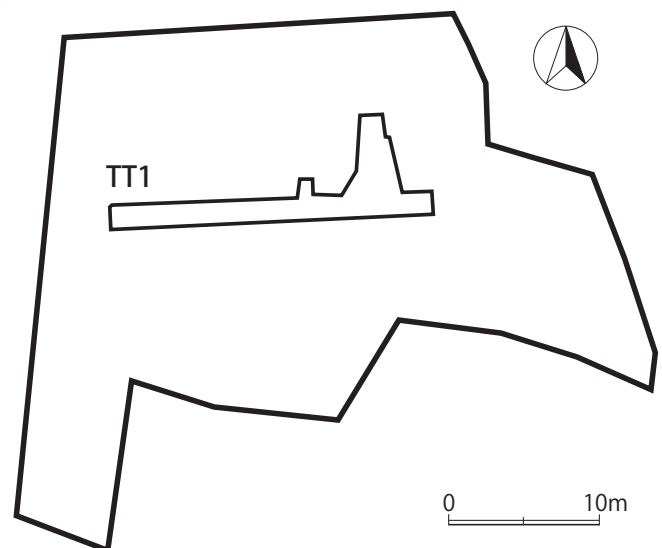
清水上遺跡は古墳～平安時代の遺跡である。調査地は、旧吉野川右岸にあたる微高地で畑地であるが以前は桑畑であったと言う。周辺地形や土層から包含層や遺構面上部は削平を受けていると考えられる。

遺物は、表土から石器、縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土した。柱穴からは土師器片のほか、埋め土に混入したとみられる石器等が出土した。

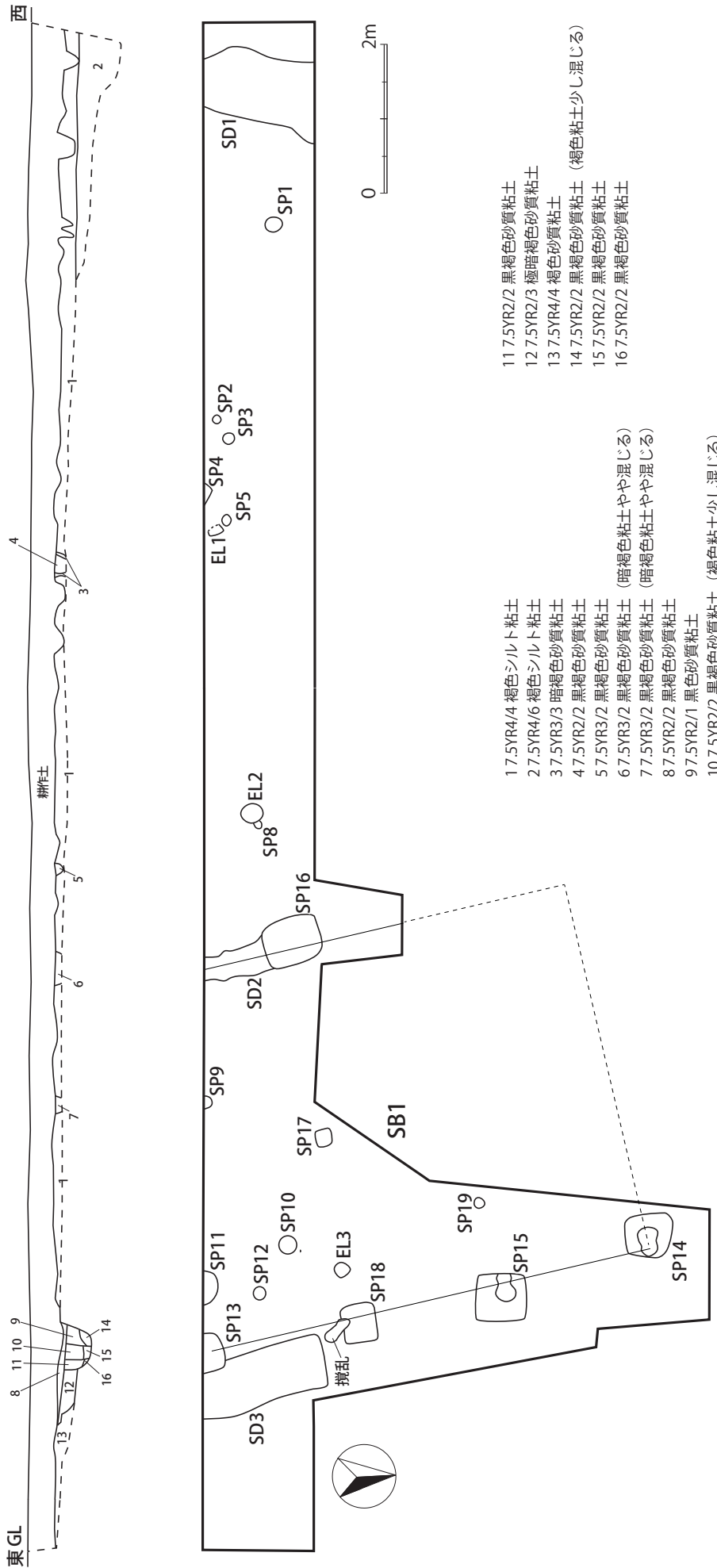
遺構は、掘立柱建物 1 棟、柱穴、溝跡、焼土跡を確認した。遺物から主に平安時代の遺構面が残存していると考えられる。直径 50cm～60cm の隅丸方形の掘り方を持つ柱穴列が検出され掘立柱建物跡（SB1）と考えられる。SB1 の南北軸は N-7° -W で、平成 26 年度調査の建物群と概ね一致する。桁行の柱間は約 2.2m で、梁行では SP16 と SP18 で柱間約 2.4m となる。溝跡は 3 条検出された。SD1 のみ平安時代の遺構面より 1 段下層で検出されたが時期は把握できなかった。SD2、SD3 は SB1 の桁行に沿うように検出されたが、切り合いから SB1 より先行すると思われる。両溝跡とも北辺が途切れている。炉跡状の焼土跡（EL1～3）が 3 ケ所、東西に並ぶように検出された。鍛冶遺構か。SB1 との先行関係は切合いが無く不明である。



第 83 図 清水上遺跡開発予定位置図  
S=1/5000



第 84 図 清水上遺跡トレンチ配置図 S=1/500



第 85 図 清水上遺跡 TT1 平面図・断面図 S=1/80



## 16 矢ノ目館跡 (2)

- (1) 調査日 平成 30 年 10 月 10 日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字並柳 1035-1、1035-9、1037-1、1037-3  
調査対象地 (工事) 面積 1,034.12㎡
- (3) 調査原因 民間開発 (93 条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の矢ノ目館跡にかかることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 1,034.12㎡について、幅 1.5 m×長 5 m の試掘溝 1 ケ所と幅 1.5m×長 10m の試掘溝 1 ケ所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

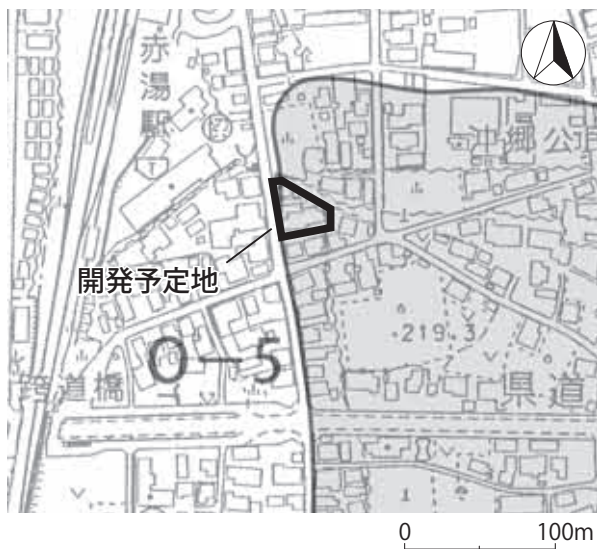
遺構は、溝跡、近代の古道跡を確認した。遺物は、古墳時代の器台と平安時代の須恵器片等が出土した。

### (6) 考察

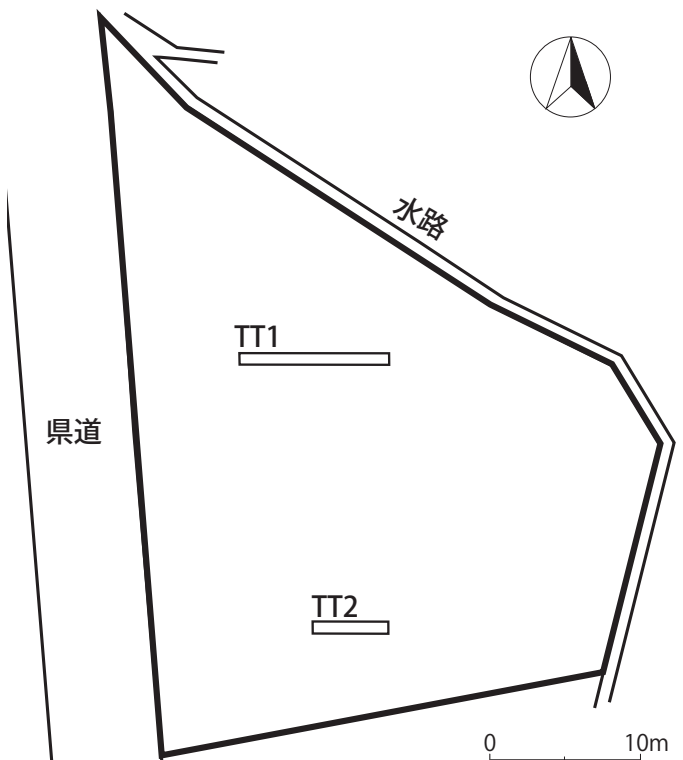
矢ノ目館跡は主に平安時代の遺跡である。調査地は、旧吉野川から分かれた派流跡に沿う水路の南側にあたる。派流は、矢ノ目館跡付近に微高地を形成しながら稲荷森古墳方向に流れ、条里制地割との関係も指摘されている。調査地はこの派流からさらに南に水路が分岐する地点で、上流側に頂点を持つ三角形の地割りとなっている。

遺物は、TT1 の表土層から、古墳時代の器台、平安時代の須恵器片、中世陶器片が出土した。TT1 の SD1 からは須恵器片が出土した。いずれも流れ込みと思われるが割れ口はさほど摩滅していない。TT2 からは遺物の出土は無かった。

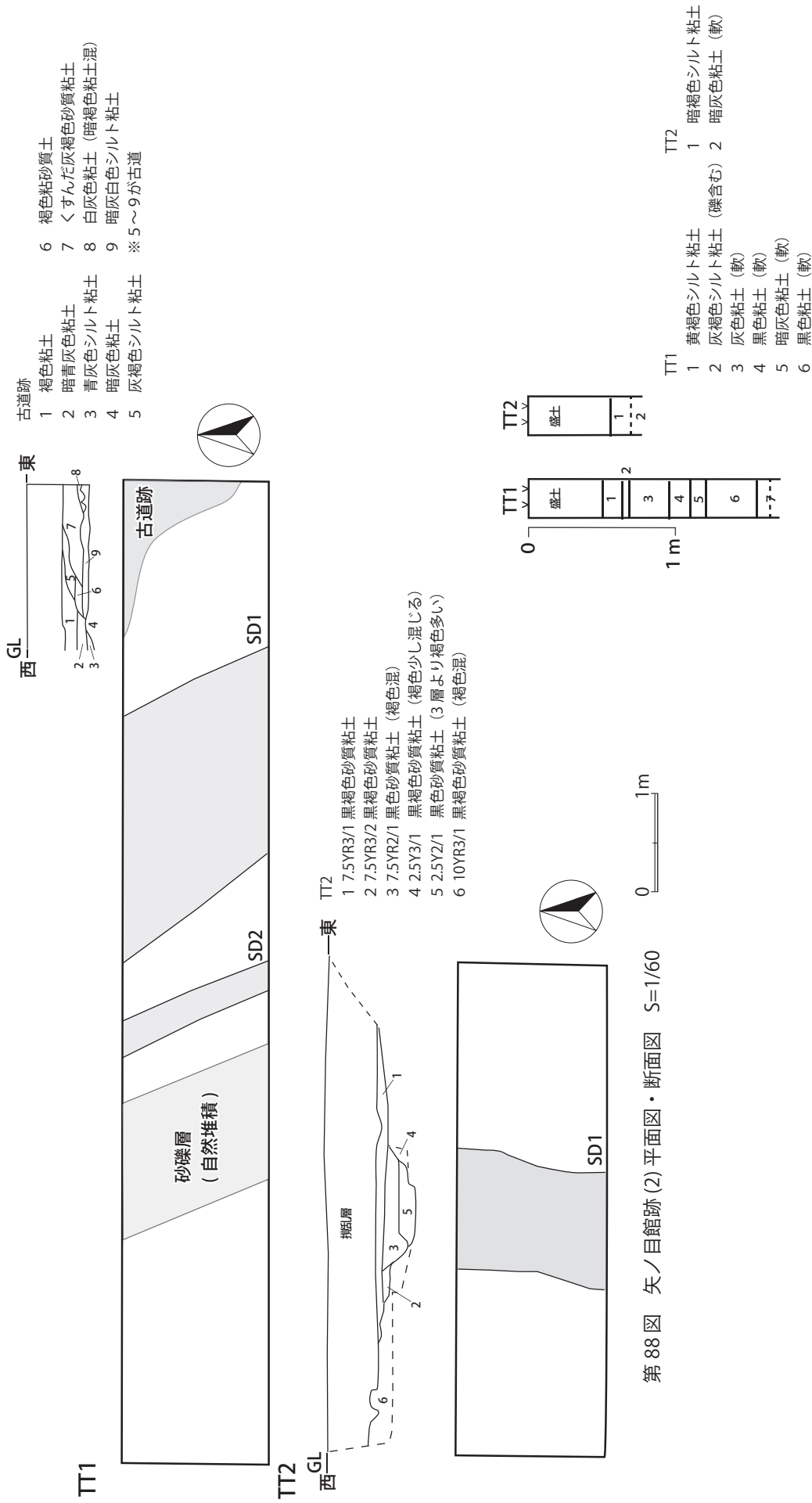
遺構は、TT1 で溝跡 2 条と近代の古道跡を確認した。TT2 で溝跡 1 条を確認した。いずれの溝跡も所属年代は不明である。SD3 は近代以降の溝跡である。古道跡と思われる盛土は、TT1 東端で検出。付近住民の話では南東方向に向う古道があったと伝わっているとのことや、明治期の字限図から古道跡とした。



第 86 図 矢ノ目館跡 (2) 開発予定位置  
S=1/5000



第 87 図 矢ノ目館跡 (2) トレンチ配置図 S=1/500



第 88 図 矢ノ目館跡 (2) 平面図・断面図 S=1/60

第 89 図 矢ノ目館跡 (2) 柱状図 S=1/40

## 17 沢田遺跡 (2)

- (1) 調査日 平成 30 年 10 月 18 日
- (2) 調査場所 南陽市島貫字上西原 606-2  
調査対象地 (工事) 面積 335㎡
- (3) 調査原因 民間開発 (93 条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の沢田遺跡内であることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 335㎡について、幅 1.5 m×長 10 m の試掘溝 1 ヶ所、幅 3 m×長 5 m の試掘溝 1 ヶ所を設定し、試掘を実施した。SE1 は性格把握のため 45cm の深さまで半裁した。土層確認のため TT2 北半で深掘りを行った。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

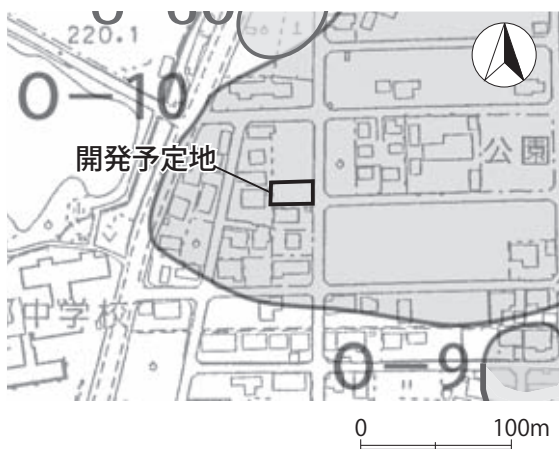
遺構は、井戸跡、ピット、溝跡が検出された。遺物は、縄文土器、土師器、須恵器が出土した。

### (6) 考察

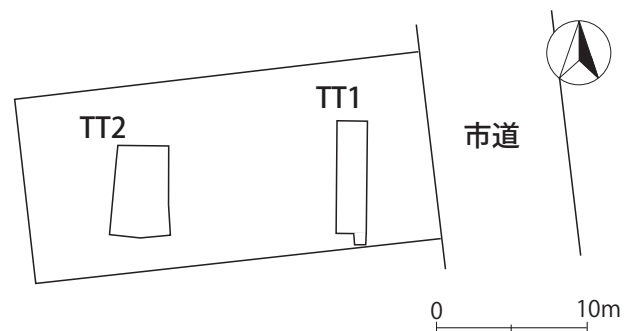
沢田遺跡は縄文～中世の遺跡であり、古代置賜郡衙に関連する郡山遺跡群の中心的な遺跡である。調査地は、旧吉野川左岸の自然堤防上にあたる微高地である。調査地の西方約 60 m で 7 世紀末～8 世紀初頭の焼失家屋が検出されている。字限図から今次調査地の南方 6～7 m に 1 辺 10 m 強の方形地割の草地があったことが分かる。

遺物は、TT1 の表土層から縄文土器片、土師器片、須恵器片、TT2 第 2 層、第 3 層から土師器片、TT1 の SD1 から古墳時代及び平安時代の土師器片、SE1 から縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土した。TT1 表土層からは有段口縁壺の口縁部片が出土した。

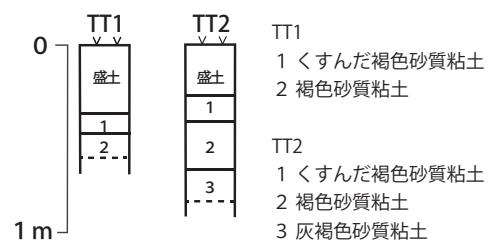
遺構は、TT1 でピット 7 ヶ所、溝跡 1 ヶ所、井戸跡 1 ヶ所を確認した。SP1～3 は掘立柱建物の可能性がある。切り合い関係から建物廃絶後に井戸が掘られたと思われる。SD1 は前述の方形地割の北側 6.5 m の距離に位置する。SD1 上に南から被るように第 2 層が堆積しており、SD1 の南に地形的な高まりがあった可能性が残る。



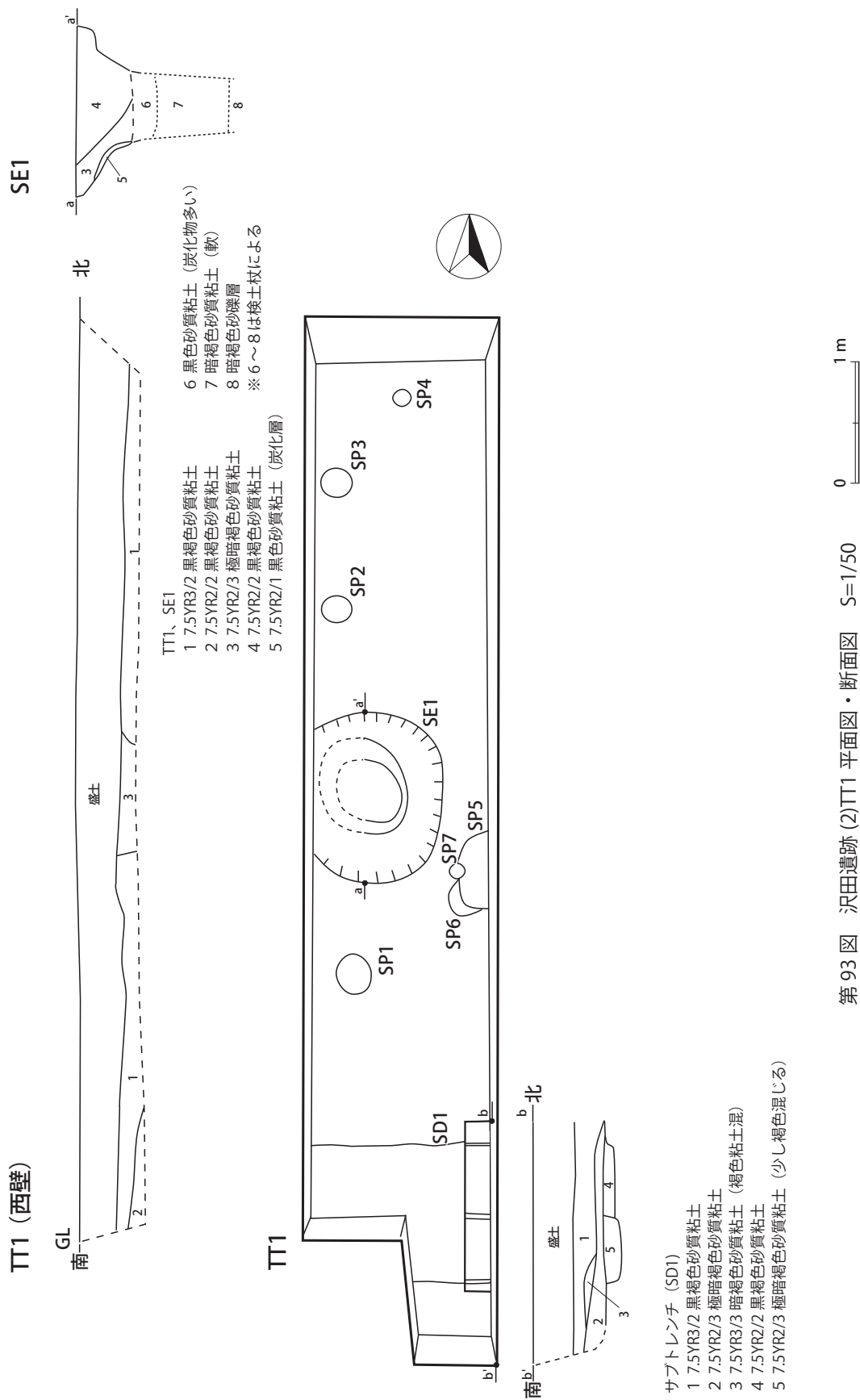
第 90 図 沢田遺跡 (2) 開発予定位置図  
S=1/5000



第 91 図 沢田遺跡 (2) トレンチ配置図 S=1/500



第 92 図 沢田遺跡 (2) 柱状図 S=1/40



第 93 図 沢田遺跡 (2)TT1 平面図・断面図 S=1/50

## 18 柵塚字辻ノ前

- (1) 調査日 平成 30 年 10 月 26 日  
 (2) 調査場所 南陽市柵塚字辻ノ前 850-2、850-3、864-1、865-1  
 調査対象地（工事）面積 1,151㎡  
 (3) 調査原因 民間開発  
 (4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。遺跡の有無を確認するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 1,151㎡について、幅 1.5 m×長 10 mの試掘溝 1ヶ所、幅 1.5 m×長 15 mの試掘溝 1ヶ所を設定し、試掘を実施した。TT2 西端は一部深掘りを行い、土層を確認した。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

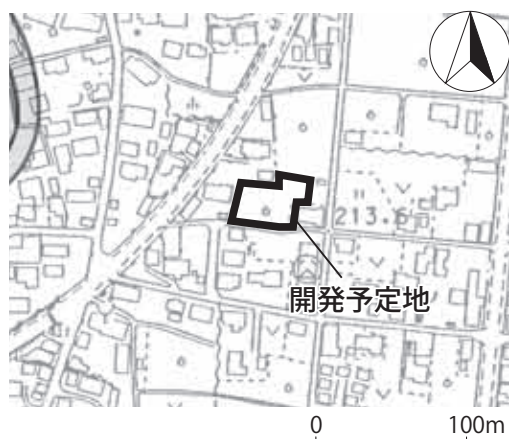
遺構は確認されなかった。遺物は表土から須恵器片が出土した。

### (6) 考察

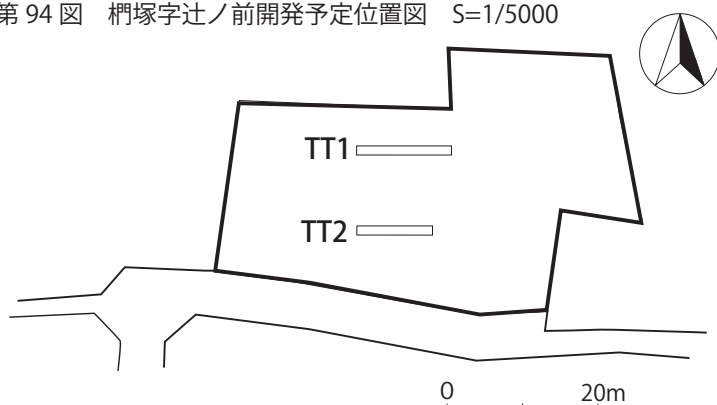
調査地は、大谷地西辺にあたる低地である。南に吉野川が流れ、柵塚館の山の東方に位置する。

遺構は確認されず、遺物は須恵器片を各トレンチの表土から各 1 点検出したが流れ込みと思われる。

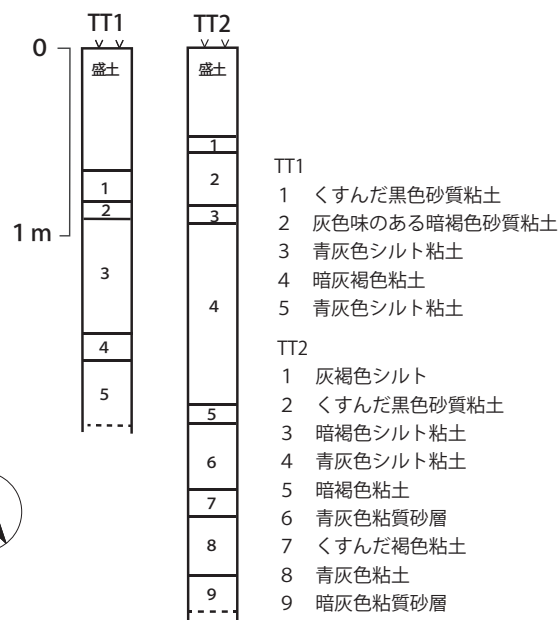
土層からは、大谷地内（低湿地）であったと考えられる。TT2 西端で地表下 2.9 ~ 3 m まで深掘りを実施したが泥炭層は確認されなかった。地元の方の話によれば、対象地西南側の市道で深掘りした際に「もっくれ」（未分解の泥炭層）が出たとのことで、対象地はわずかな微高地であったか、あるいは 3 m 以下に泥炭層があるものと思われる。今次調査結果から、対象地に遺跡は無いと考えられる。



第 94 図 柵塚字辻ノ前開発予定位置図 S=1/5000



第 95 図 柵塚字辻ノ前トレンチ配置図 S=1/1000



第 96 図 柵塚字辻ノ前柱状図 S=1/40

## 19 馬場遺跡

- (1) 調査日 平成30年11月14日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字馬場一424  
調査対象地(工事)面積224.67㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の馬場遺跡にかかることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲224.67㎡について、幅1.5m×長5mの試掘溝1ヶ所を設定し試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。

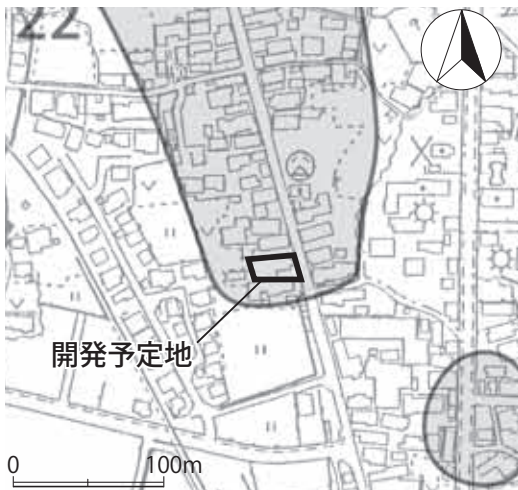
### (5) 結果

遺構はピット群、溝跡を確認した。遺物は土器小片が出土した。

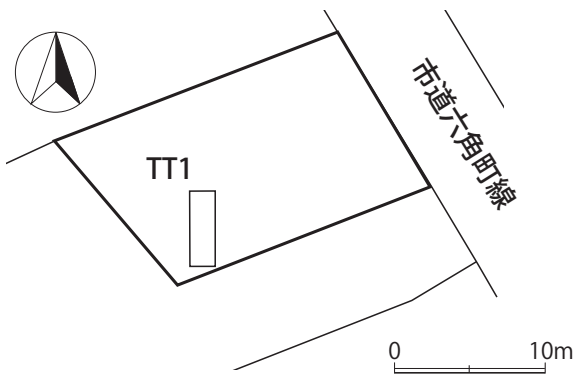
### (6) 考察

馬場遺跡は地名から中世の馬場跡あるいは館跡を含む遺跡とみられる。調査地は吉野川右岸の自然堤防上に位置し、南堀の内側にあたり堀内へ入る入口の隣地である。

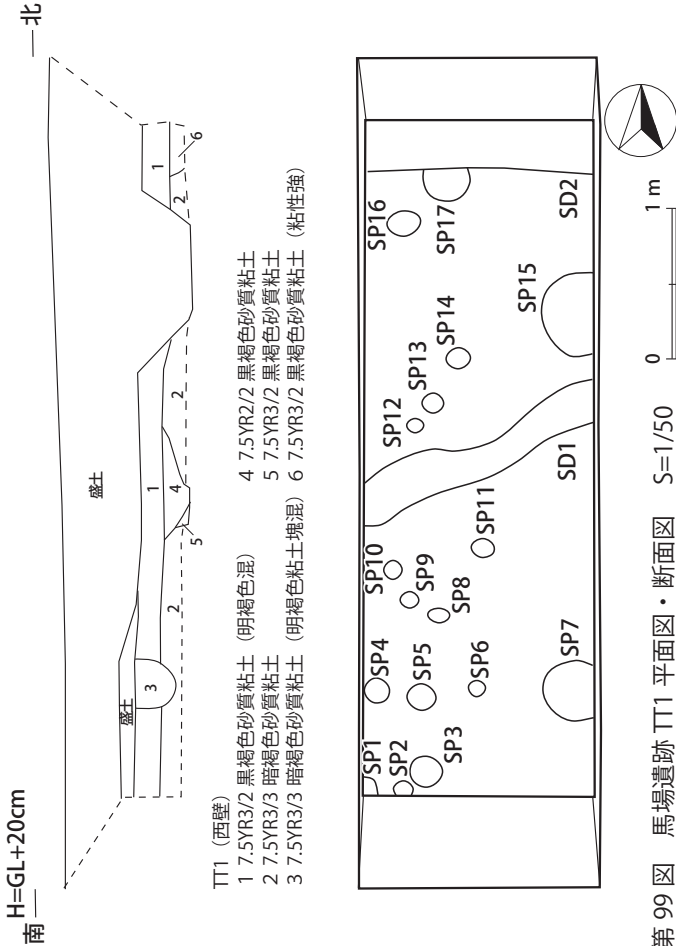
遺物は、表土下の第1層から土器の小片が少量出土した。土器は磨滅した小片であるため時代は不明である。遺構は、ピット17ヶ所、溝跡2ヶ所を確認した。字限図から、今次トレンチは南堀跡から北に約7～10mほど離れていると思われる。堀に沿って土塁等があったかどうかは今次調査では明らかにできなかった。土層状況ではトレンチ南側の1/4ほどまで第1層に炭が多く混じってやや黒味を増すが、第1層を明確に分層することはできなかった。炭は近隣地における火災等の痕跡である可能性も残る。



第97図 馬場遺跡開発予定位置図 S=1/5000



第98図 馬場遺跡トレンチ配置図 S=1/500



第99図 馬場遺跡 TT1 平面図・断面図 S=1/50

## 20 矢ノ目館跡 (3)

- (1) 調査日 平成 30 年 11 月 21 日
- (2) 調査場所 南陽市郡山字砂原 974-1、975  
調査対象地 (工事) 面積 911.96㎡
- (3) 調査原因 民間開発 (93 条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の矢ノ目館跡にかかることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 911.96㎡について、幅 2 m×長 10 m の試掘溝 1 ヶ所を設定し、試掘を実施した。掘削中に埋設管が出たことからトレンチを半ばで西にずらした。試掘後は埋め戻しを行った。

### (5) 結果

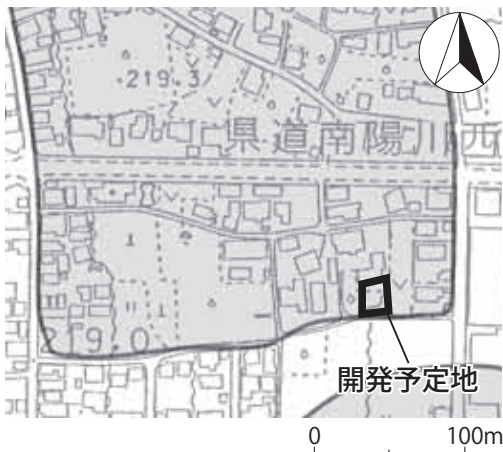
遺構は堀跡を確認した。遺物は土師器片が出土した。

### (6) 考察

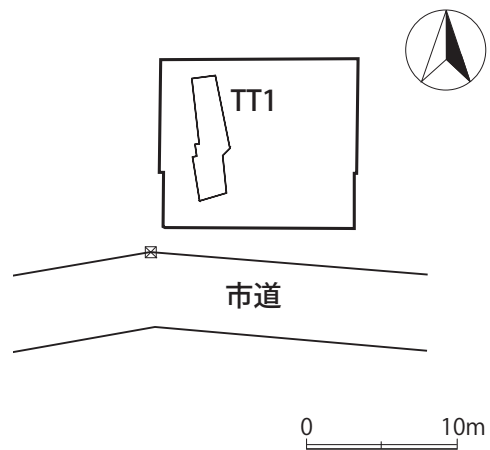
矢ノ目館跡は奈良・平安時代の遺跡で、旧吉野川の派流沿いに発達した自然堤防上に立地する。調査地は、館跡東南角の堀跡にかかる。

遺物は、表土及び第 2 層上面から土師器片が出土した。

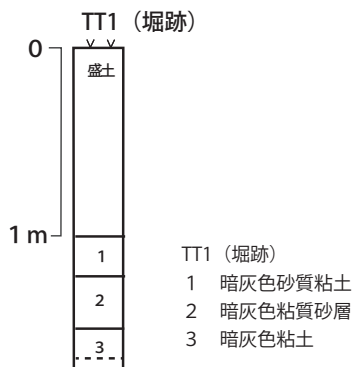
遺構は、館堀の東南角部にあたる堀跡を確認した。遺構確認に留めたため深さは不明であるが、ボーリングステッキでは地表下 165cm まで軟弱な湿地性の堆積層があることを確認した。堀の北斜面の傾斜角度は約 40 度である。土塁跡の有無については土層断面で検討したが、積極的に土塁跡と見なせる土層は確認できなかった。本来土塁があったとしても削平されたと思われる。



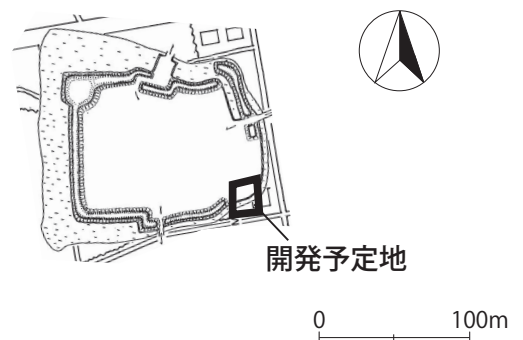
第 100 図 矢ノ目館跡 (3) 開発予定位置図 S=1/5000



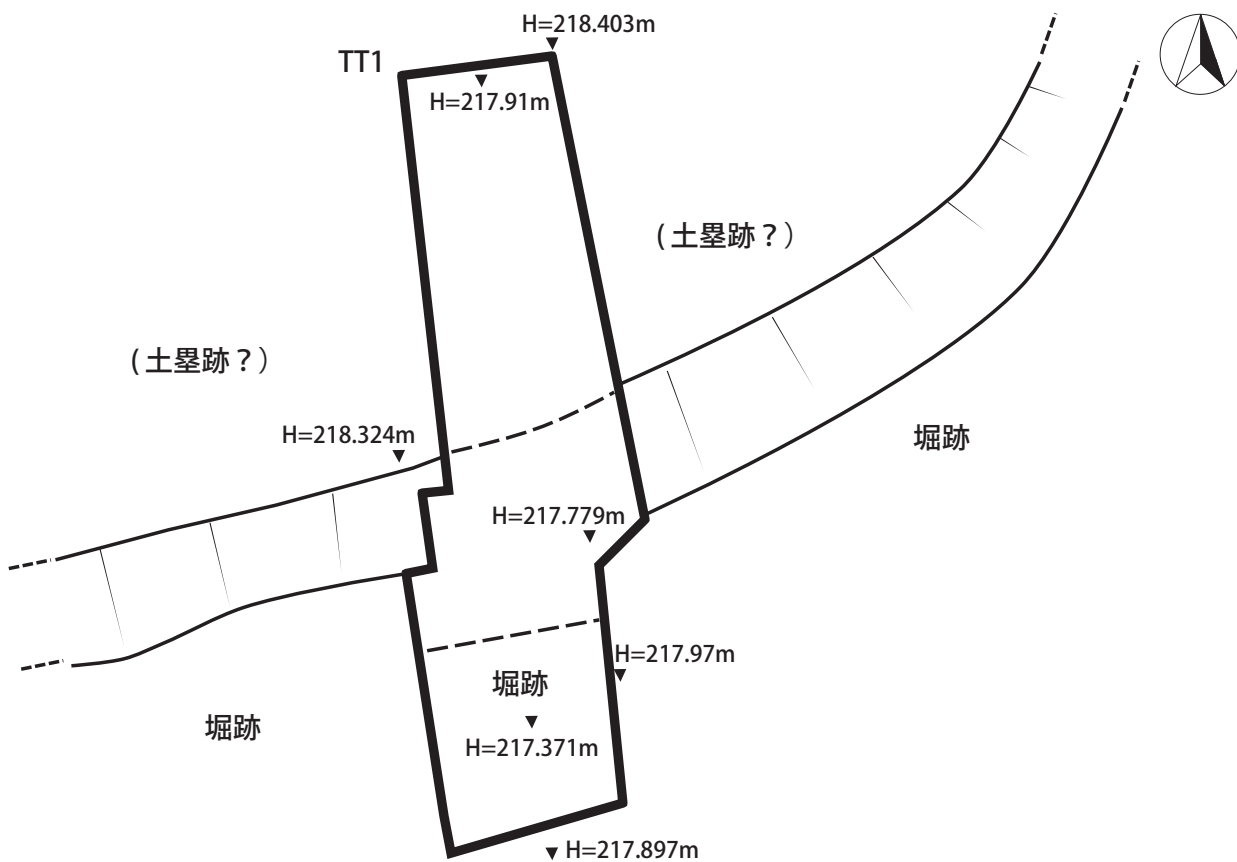
第 101 図 矢ノ目館跡 (3) トレンチ配置図 S=1/500



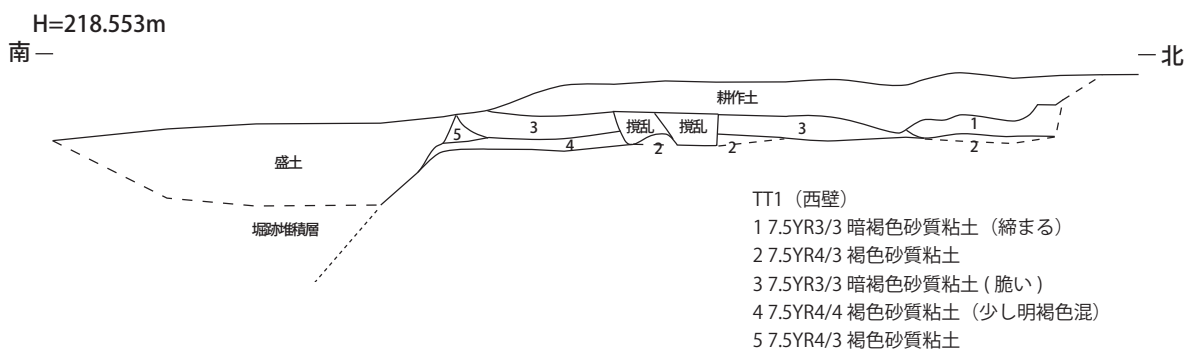
第 102 図 矢ノ目館跡 (3) 柱状図 S=1/40



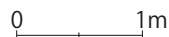
第 103 図 矢ノ目館跡縄張図と開発予定地 S=1/5000



第104図 矢ノ目館跡(3)平面図 S=1/80



第105図 矢ノ目館跡(3)TT1断面図(西壁) S=1/60





## 21 上大作裏遺跡 (2)

(1) 調査日 平成30年11月21日

(2) 調査場所 南陽市砂塚字中大作二

調査対象地（工事）面積 633.441㎡

(3) 調査原因 民間開発（93条）

### (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の上大作裏遺跡の範囲内であることから、遺跡内容を把握するため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 633.441㎡について、幅1m×長1mの試掘穴4ヶ所を設定し、試掘を実施した。試掘後は埋め戻しを行った。周辺地形把握及び周辺遺跡状況確認のため周辺踏査を行った。

### (5) 結果

遺構は確認されなかった。遺物は、地表面で土師器小片が採取された。

### (6) 考察

上大作裏遺跡は、縄文時代、弥生時代、平安時代、中世の複合遺跡で、織機川旧河道右岸に発達した自然堤防上に立地する。今次調査地は遺跡南端に位置している。

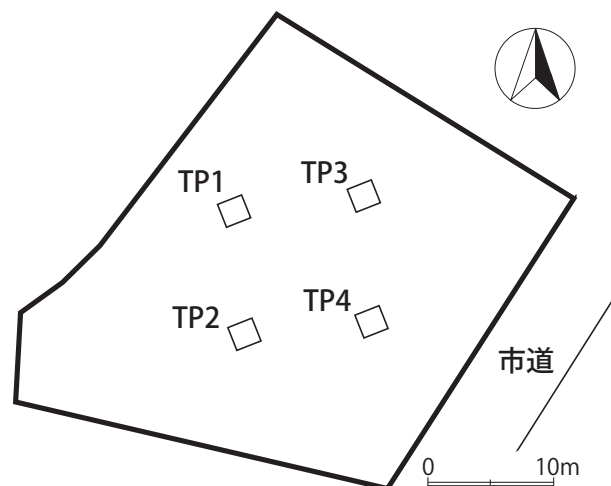
遺物は、踏査で土師器小片の散布を少量確認したが、試掘においては出土しなかった。遺構は、耕作土下の褐色砂質粘土層にいくつかの溝跡を検出したが、いずれも現代の畑の畝跡と思われ、遺構は確認されなかった。

土層からは、南に傾斜する土地であったとみられ耕作土は南側が厚くなる。傾斜地に耕作土を盛土して均したと思われ、地表面の小土器片は均した土に混入したと思われる。遺跡に関する層としては、地表下92cmで確認された黄褐色粘質砂層が遺構面になる可能性があると思われるが、今回は遺物・遺構ともに確認されなかった。

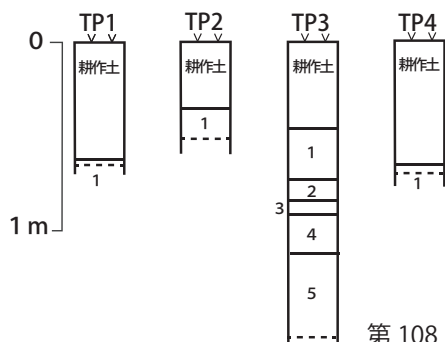
周辺踏査では、調査地北側に位置する蓮蔵寺東側の畑地で須恵器（坏）片を表採した。字中野の古墓地及び小社の付近では、今回は遺物の散布は確認されなかった。



第106図 上大作裏遺跡(2) 開発予定位置  
図 S=1/5000



第107図 上大作裏遺跡(2) 試掘穴配置図  
S=1/600



- TP1～4
- 1 明黄褐色粘質砂層
  - 2 黒褐色砂質粘土
  - 3 褐色粘質砂層（赤味有）
  - 4 黄褐色粘質砂層
  - 5 灰褐色粘質砂層

第108図 上大作裏遺跡(2) 柱状図 S=1/40

試掘調査風景



大橋城跡、堀上端の検出中



漆山字東高堰一 試掘穴



上河原遺跡



沢田遺跡

## IV 立会調査

### 1 漆山字東寺町三 (1)

- (1) 調査日 平成30年4月17日
- (2) 調査場所 南陽市漆山字東寺町三
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、踏査実施地でこれまで遺跡は確認されていないが、字名から付近に寺院があった可能性がある。工場の新築工事の計画が生じたことから遺跡の有無を確認するため工事立合いを実施する。

### (5) 結果

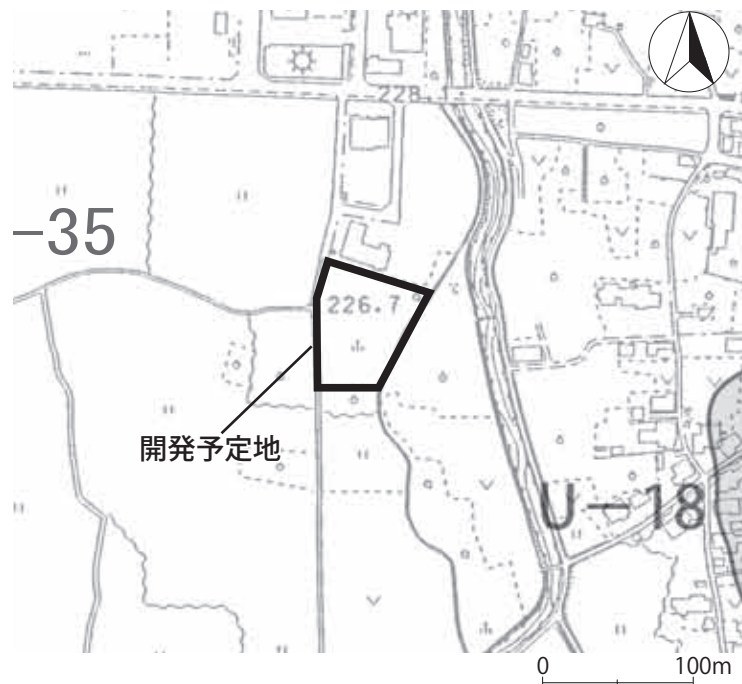
遺構・遺物は検出されなかった。

### (6) 考察

対象地は、織機川右岸の氾濫原及び自然堤防の範囲にあたる。今次の切土工事による掘削面、掘削土のいずれにも遺物の混入はみられなかった。表土剥離の状態に近い面的な掘削が実施されたが、遺構は確認されなかった。

擁壁工事による深掘りでも遺物は確認できなかった。これらのことから対象地には遺跡は無いと思われる。

対象地は川沿いの土地で全体に東に傾斜しており川岸にあたると思われる。また、対象地東に水路が流れ、その東側の畑地は字中島であることから中洲にあたると思われる。



第 109 図 漆山字東寺町三 (1) 開発予定位置図 S=1/5000

## 2 宮内字黒木一

- (1) 調査日 平成30年5月29日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字黒木一 1069-18
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。住宅新築に伴う土工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

### (5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。

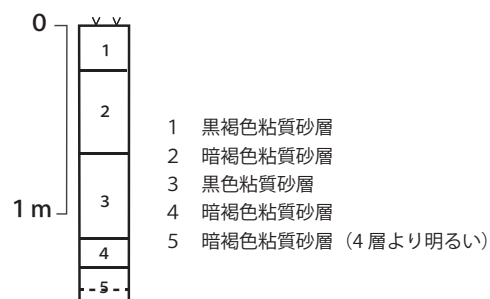
### (6) 考察

対象地は、吉野川右岸にあたる。基礎工事の際に、土層の観察と遺物・遺構の有無を確認したが、掘削が浅いこともあり遺構・遺物は検出されなかった。

土層や周辺地形から、対象地は吉野川の氾濫原から自然堤防に移行する境付近に位置し、やや微高地であったと思われる。



第110図 宮内字黒木一開発予定位置図 S=1/5000 0 100m



第111図 宮内字黒木一柱状図 S=1/40

### 3 宮内字塔ノ越一

- (1) 調査日 平成 30 年 6 月 28 日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字塔ノ越一 2005-18
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。住宅建替工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

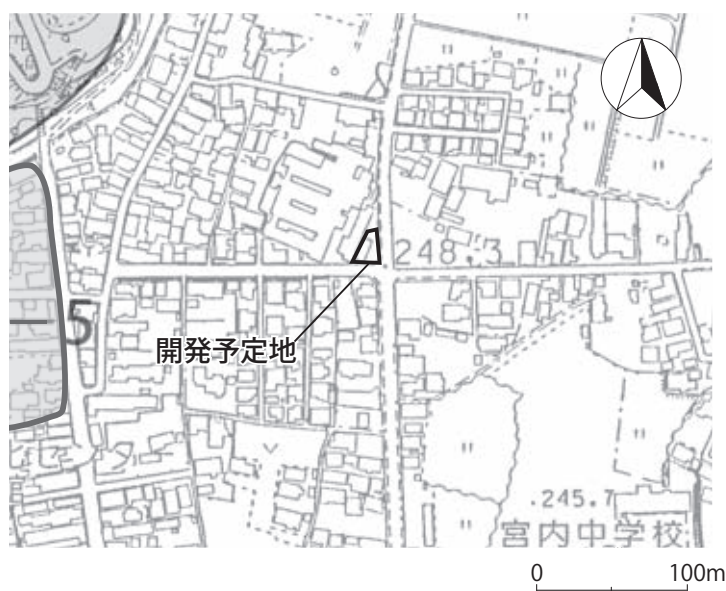
#### (5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。

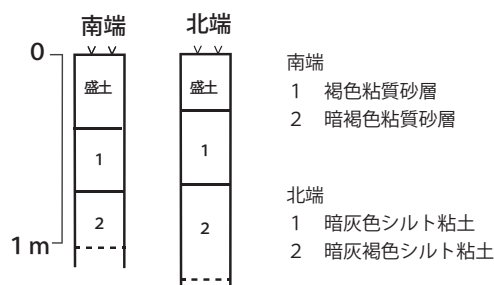
#### (6) 考察

対象地は、吉野川右岸の微高地にあたる。住宅建替に伴う解体工事による掘削の際に土層の観察と遺物・遺構の有無を確認した。掘削は盛土内にとどまったため遺構は確認できなかった。残土や周辺表土からは遺物は確認されなかった。

ボーリングステッキにより工事地内の南西角と北西角の2地点で土層を確認した。軟弱土壌であり、土層からは河川跡または低湿地であったと思われる、遺跡はないと思われる。



第 112 図 宮内字塔ノ越一開発予定位置図 S=1/5000



第 113 図 宮内字塔ノ越一柱状図 S=1/40

#### 4 宮内字内原四

- (1) 調査日 平成 30 年 7 月 6 日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字内原四
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の内原三遺跡の隣地で内原段丘の斜面に位置する。遺跡分布調査未実施地であることから工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

#### (5) 結果

遺構・遺物は検出されなかった。

#### (6) 考察

対象地は、内原段丘上にあたる。深掘りを行う浄化槽工事の際に、土層の観察等を実施した。地表下 2 m まで掘削したが以前の盛土内にとどまり、旧表土に達しないことから、遺跡の確認はできなかった。対象地が盛土造成地と判明したことから周辺の畑地等を踏査したが周辺では遺物の散布は確認できなかった。遺跡は無いものと思われる。



第 114 図 宮内字内原四開発予定位置図 S=1/5000

## 5 若狭郷屋字三百刈

- (1) 調査日 平成 30 年 7 月 9 日
- (2) 調査場所 南陽市若狭郷屋字三百刈 848-3
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の沢見遺跡、沢田遺跡の隣地である。遺跡分布調査未実施地であることから、土工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。深掘りを行う水道敷設工事（幅 65cm × 5.5m）の掘削の際に立会いを行った。

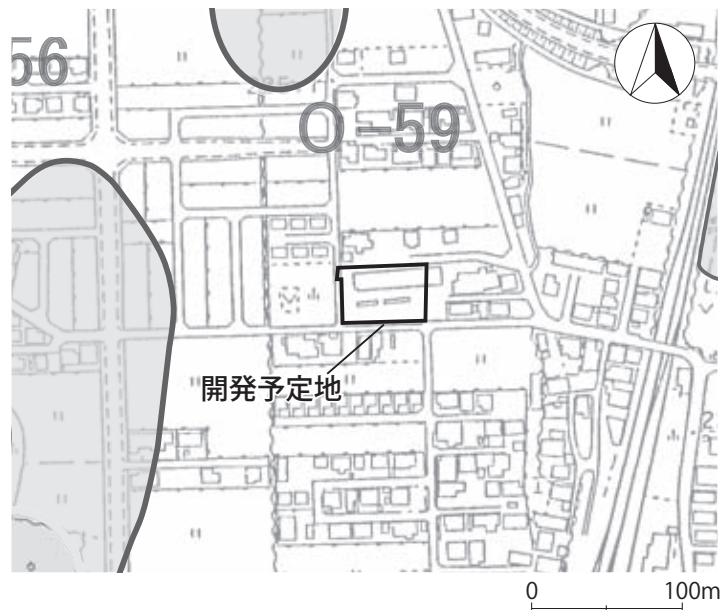
### (5) 結果

遺構・遺物は確認されなかった。

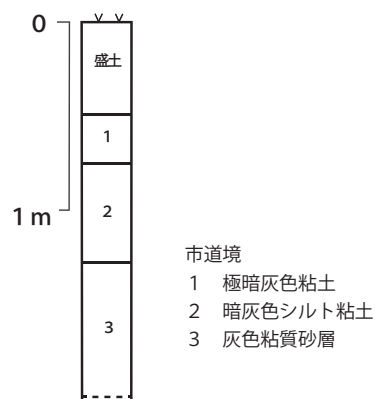
### (6) 考察

対象地は、吉野川旧河道左岸の後背湿地にあたる。造成工事は主に盛土工事である。市道内から敷地内に水道を敷設する掘削工事の際に、土層の観察と遺物・遺構の有無を確認した。遺物・遺構は検出されなかった。土層からは低湿地であったと思われる。以前の周辺調査でも遺跡は確認されていないことから、今次対象地に遺跡はないと考えられる。

また、沢見遺跡で平成 27 年に確認された南北方位の大溝跡は確認されなかったことから、溝跡は対象地内を通過していないと考えられる。



第 115 図 若狭郷屋字三百刈開発予定位置図 S=1/5000



第 116 図 若狭郷屋字三百刈柱状図 S=1/40

## 6 竹原字石仏

- (1) 調査日 平成30年7月11日
- (2) 調査場所 南陽市竹原字石仏43-34他
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地であることから、住宅建替えに伴う既存建物解体工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

### (5) 結果

遺構は確認されなかった。工事地西側の畑地で須恵器片の散布を確認した。

### (6) 考察

対象地は、南向きの緩斜面が低地になる傾斜変換点付近にあたる。既存建物の解体工事の際に立会いを行ったが、以前の盛土が1m以上あるとみられ、掘削は旧表土まで達しなかった。

周辺踏査を実施し、工事地西側の畑地で遺物の散布を確認した。遺物は、須恵器片(大甕)である。周辺は古くから住宅地が広がり、遺跡の有無やその状況が把握しにくい地域であるが、工事地より北側の緩斜面地に遺跡が広がっている可能性がある。新規遺跡となるが範囲が不明であるため、今後さらに周辺調査を行う必要がある。



第117図 竹原字石仏開発予定位置図 S=1/10000



## 7 漆山字東寺町三 (2)

- (1) 調査日 平成30年7月25日
- (2) 調査場所 南陽市漆山字東寺町三
- (3) 調査原因 市道整備
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。字名が示すようにこの付近にはかつて寺があったと伝わることから、市道拡幅工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

### (5) 結果

遺構・遺物は確認されなかった。

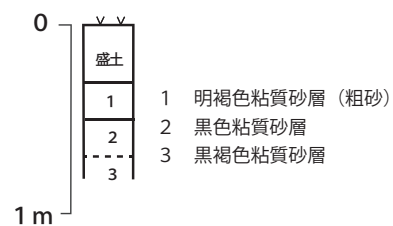
### (6) 考察

対象地は、織機川右岸にあたる水田地帯である。現在、織機川の東側に三堀観音、羽黒神社があるが、かつての寺は三堀寺宝乗院と呼ばれ、現在の羽黒神社の西方100m付近にあったと伝わり、寺は水害を受け現在地に移転したとされる。

工事地付近には、東寺町、西寺町という小字名が広い範囲で残っており、道路拡幅工事の際に、土層の観察と遺物・遺構の有無を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。周辺地形から、寺跡は今次調査地より南～南西方向に位置する可能性がある。市道西側の水田は、県事業によるほ場整備が今後予定されており、今後、寺院跡の確認が課題である。



第118図 漆山字東寺町三(2) 開発予定位置図 S=1/5000



第119図 漆山字東寺町三(2) 柱状図 S=1/40

## 8 和田字東前田

(1) 調査日 平成30年8月10日

(2) 調査場所 南陽市和田字東前田

(3) 調査原因 民間開発

### (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の片岸館跡の隣地である。遺跡分布調査未実施地であることから、工事の際に立会いを行い、片岸館の範囲及び遺跡の有無を確認する。工事時の確認に加え、業者の協力により対象地の中央部に幅1m×長2mのトレンチを掘り下げ、土層及び遺跡の有無を確認した。

### (5) 結果

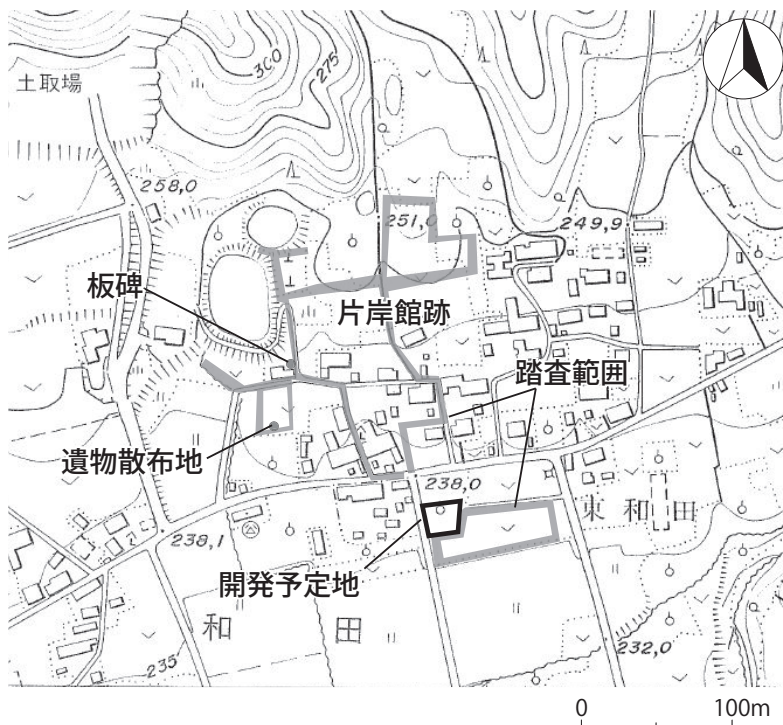
試掘地及びその南東の畑地では遺構・遺物は確認されなかった。

### (6) 考察

対象地は、南に傾斜する緩斜面地に立地する。片岸館跡から南へ100mほど離れた位置で、現在の土地利用は段々畑となっている。

事前の周辺踏査及び盛土造成工事の際に土層の観察と遺物・遺構の有無を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

堆積土は、表土から1m下まで粘質砂である。1m下の掘り底面では、暗褐色で湿気が強まる。今次調査から、対象地に遺跡はないと考えられる。館跡との関係を調べるため周辺を踏査した。館跡の西端に正寿院跡があり、その南側の畑地において須恵器等の散布を確認した。さらに周辺を調査し遺跡範囲を確認する必要がある。



第120図 和田字東前田開発予定位置図 S=1/5000



第121図 和田字東前田柱状図 S=1/40

## 9 宮内字鐘小屋二

- (1) 調査日 平成30年8月13日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字鐘小屋二（市道別所裏通線）
- (3) 調査原因 市道整備
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、遺跡分布調査未実施地であることから、工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

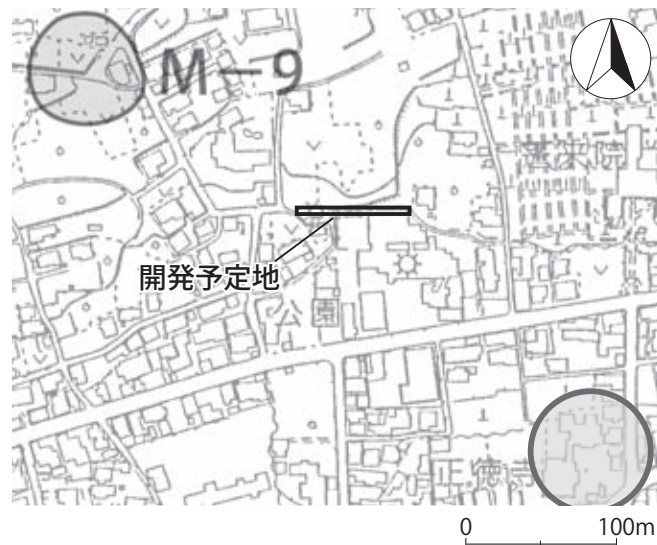
### (5) 結果

遺構・遺物は確認されなかった。

### (6) 考察

対象地は、南向きの緩傾斜地にあたる。字名「鐘小屋」の地名から鍛冶等が行われた地域の可能性があり、宮内熊野大社の大鐘を鑄造した場所であるという伝承も残る。

市道工事の際に、土層の観察と遺物・遺構の有無を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。工事地西側の法面において一定間隔で木材が打ち込まれている状況がみられたが、比較的新しい杭列と判断された。対象地南側の幼稚園造成工事時の調査でも遺跡は確認されなかったことから、今次対象地に遺跡はないと考えられる。



第122図 宮内字鐘小屋二開発予定位置図 S=1/5000

## 10 長岡山遺跡・長岡山東遺跡

(1) 調査日 平成30年8月20日～23日、踏査：6月29日

(2) 調査場所 南陽市長岡字西田中、字西田中西

(3) 調査原因 公共整備(94条)

### (4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の長岡山遺跡、長岡山東遺跡の範囲である。建物及び駐車場の工事範囲については4月に試掘調査を実施済みで、今後は下水道工事に伴う立会いを行った。土層観察については東北芸術工科大学長井先生のご指導を得た。

### (5) 結果

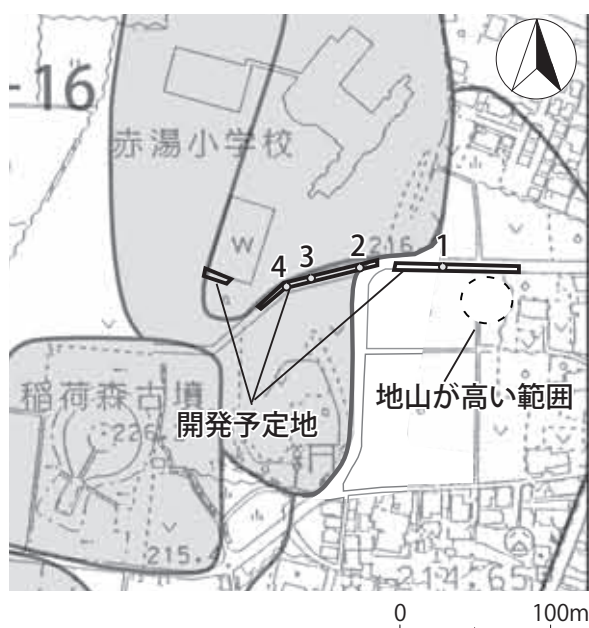
遺構・遺物は確認されなかった。古赤色土の存在が確認された。

### (6) 考察

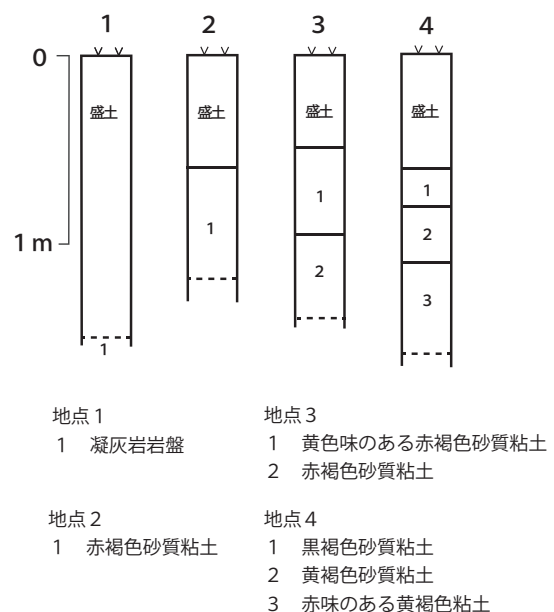
対象地は、長岡山丘陵の東斜面にあたる。下水道工事の際に土層の観察と遺物・遺構の有無を確認した。また、施設整備地の北側区画となるU字溝工事の掘削状況を確認した。遺構・遺物は検出されなかった。

土層では、掘削範囲東端から山裾までは地表下60cm～1.5mに凝灰岩質の岩盤が見られる。掘削範囲東端の南側に位置する果樹園はマウンド状の高まりとなっているが、この付近では地山が地表下60cmと浅い。長岡公民館前付近では1.5mまで急に深くなり、山裾に近づくと再び浅くなる。赤湯小学校南側の上り坂の道路では、山裾から尾根方向にかけて黄褐色～赤味のある黄褐色～赤黄色の土層(いわゆる赤土)が見られる。化石土壌である古赤色土とみられ、高位段丘面と思われる。掘底面には、網状斑(虎班)がみられる。段丘面には旧石器時代の遺跡が存在する可能性があるため今後も注意が必要である。

6月の事前踏査では、対象地東端の南側に低いマウンド状の地形を確認した。明治期の字限図で半円形の地割が確認され、現状も北から東南に弧状に水路が廻る。自然地形で元々地山が高いと思われるが、円弧状地割の成因は不明である。古墳が多い地区であるため今後も注意が必要と思われる。



第123図 長岡山遺跡・長岡山東遺跡開発予定位置図  
S=1/5000



第124図 長岡山遺跡・長岡山東遺跡柱状図  
S=1/40

## 11 漆山字備後塚

(1) 調査日 平成30年10月23日

(2) 調査場所 南陽市漆山字備後塚

(3) 調査原因 公共事業

(4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の大仏遺跡の隣地である。遺跡分布調査未実施地であることから、防火水槽設置工事の際に立会いを行い、遺跡の有無を確認する。

(5) 結果

遺構・遺物は確認されなかった。

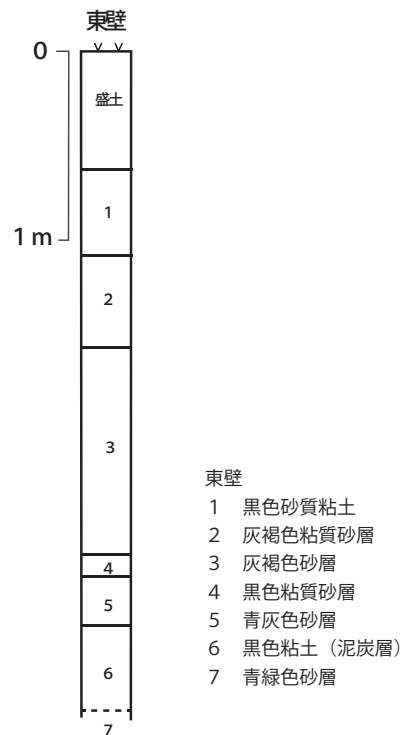
(6) 考察

対象地は、大仏遺跡が立地する旧織機川によって形成された微高地の東端にあたり、地形的には低地にあたる。工事の深掘りの際に土層観察と遺物・遺構の有無を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。

土層からは低地であったと思われ、耕作土下に黒色の砂質粘土層（砂が40～50%）が厚く堆積している。地表面下約3mで粘性が強く軟弱な黒色粘土層（腐食の進んだ泥炭層）の堆積がみられ、その上下は砂礫層となっている。いずれの層からも遺物は確認できなかった。



第125図 漆山字備後塚開発予定位置図 S=1/5000



第126図 漆山字備後塚柱状図 S=1/40

## 12 若狭郷屋字浦城

(1) 調査日 平成30年10月23日

(2) 調査場所 南陽市若狭郷屋字浦城

(3) 調査原因 公共事業

(4) 調査方法及び内容

対象地は、周知の若狭郷屋敷跡の隣接地であることから、防火水槽設置工事の際に立会いを行い、遺跡の範囲及び遺跡の有無を確認する

(5) 結果

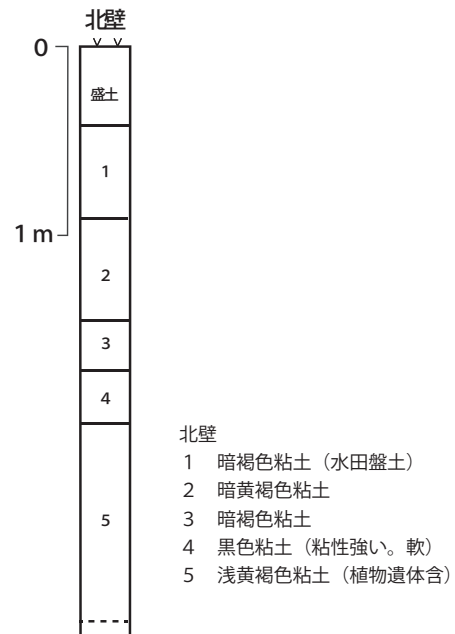
遺構・遺物は確認されなかった。

(6) 考察

対象地は、吉野川右岸側の氾濫原にあたる。防火水槽設置工事の深掘りの際に土層観察と遺物・遺構の有無を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。土層からみて低地であったと思われる。



第127図 若狭郷屋字浦城開発予定位置図 S=1/5000



第128図 若狭郷屋字浦城柱状図 S=1/40

## V 梨郷地区の古墳群等測量調査

### 1 調査概要と目的

(1) 調査期間 平成 30 年 9 月 25 日～平成 31 年 3 月 29 日

(2) 調査場所 南陽市梨郷字神楽山～和田字竈山

#### (3) 調査目的

対象地は、市域北西に位置する山地で、標高 377 m の竜樹山とその西に位置する標高 324 m の経塚山からなる。梨郷地区のこれらの山中にある古墳群は、梨郷山中古墳群とも称され、東から天王山古墳群、竜樹山古墳群、稲荷山古墳群、経塚山古墳群の 4 群が知られているが、これまで古墳の正確な位置を示すための地図がなく、遺跡保護を図るために古墳の位置と周辺環境の把握、未確認古墳の調査が課題となっていた。また、対象地内には中世城館址の存在が知られているが、その形状の把握や未確認の城郭遺構の調査も課題となっていた。これらのことから遺跡台帳を整備し、今後の調査や遺跡保護に資するために地図等の作成を行うこととした。

### 2 調査方法

調査地の現況は山林であることから、落葉後に航空レーザー測量及び現地での補助測量を実施した。

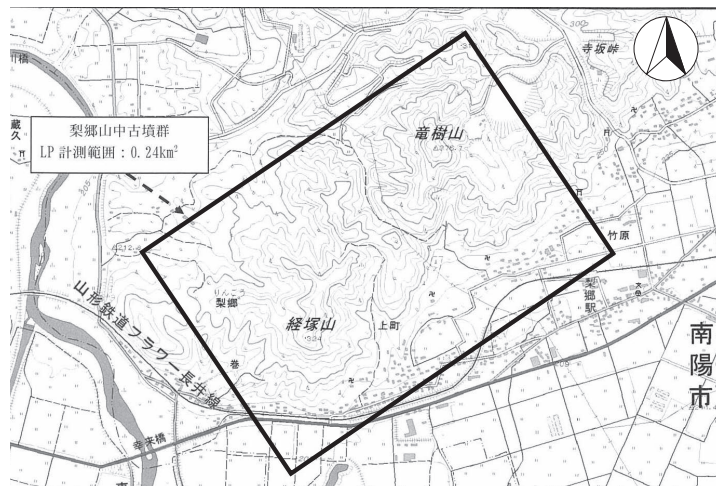
### 3 測量方法と経過

測量計画は、GNSS 衛星配置等を考慮し、計測諸元、飛行コース、GNSS 基準局の設置場所及び GNSS 観測について作成し、1 m×1 m に 4 点の計測データを取得するものとした。測量機材は、必要に応じ「公共測量作業規定の準則」に定める検定を第三者機関より受けたものを使用した。

3 次元航空レーザー測量は航空レーザー計測システム及び GNSS/IMU 装置を搭載した固定翼機を用いて実施した。調査範囲内を 11 コースで対地高度 1240m～1360m、飛行速度 252km/h で飛行し計測した。

航空レーザー測量データ（GNSS 基準局の GNSS 観測データ、航空機上の GNSS 及び IMU 観測データ、レーザー測距データ）を統合解析し、地表のレーザー照射位置の三次元座標を求めた。調整用基準点を設定し、三次元計測データを補正した。

補正後のオリジナルデータから、建物や植生等の地物を除去したグランドデータを作成、これを基に等高線データ、赤色立体地図となる地形表現図を作成した。



第 129 図 測量調査範囲図（※実際のデータ範囲は計画範囲より広い）

## 4 成果

### (1) 古墳群について

梨郷地区の山中に立地する4つの古墳群は、発見当初は経塚や宗教的土壇とみられており、川西町の下小松小松古墳群調査の進展等から古墳として認識されるようになった。しかし、笹藪という悪条件もあり、古墳に伴う遺物は確認されていないことから、今後、試掘等を行って遺跡の性格を確認する必要がある。本報告では従来の説に従い古墳として取り扱う。

#### ①天王山古墳群

古墳の個々の位置及び方位の修正の他に、下記の情報が得られた。

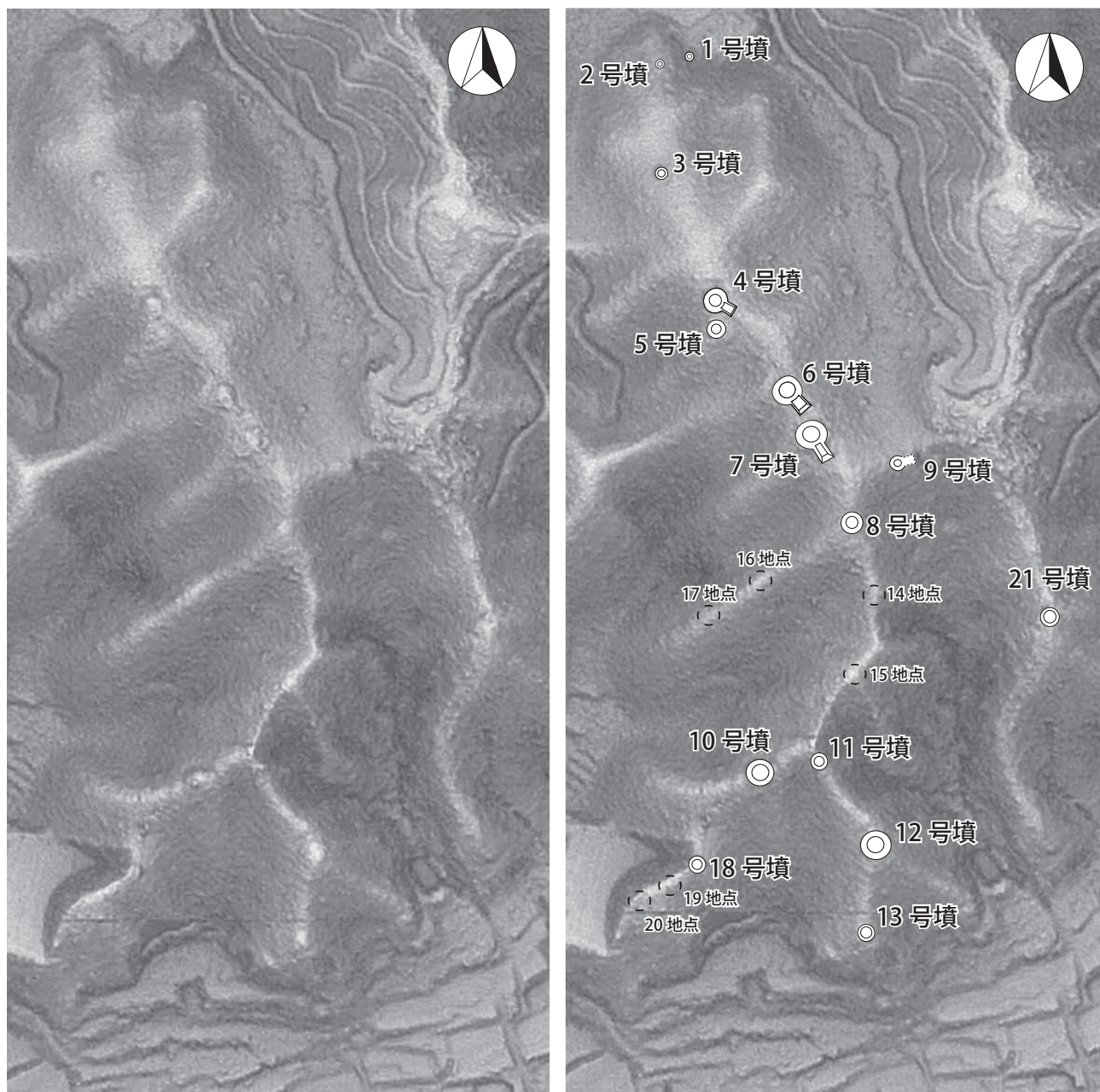
10号墳：前方後方墳としていたが、円墳（または前方後円墳）の可能性が高まった。

12号墳：方墳としていたが、円墳の可能性はある。

18号墳：隆起地形として把握していたが、古墳（円墳？）の可能性が高まった。

21号墳：新規確認、踏査を実施。円墳の可能性はある。

14、16、17地点：古墳ではない可能性が高まった。



第130図 天王山古墳群位置図 S=1/3000

0 100m

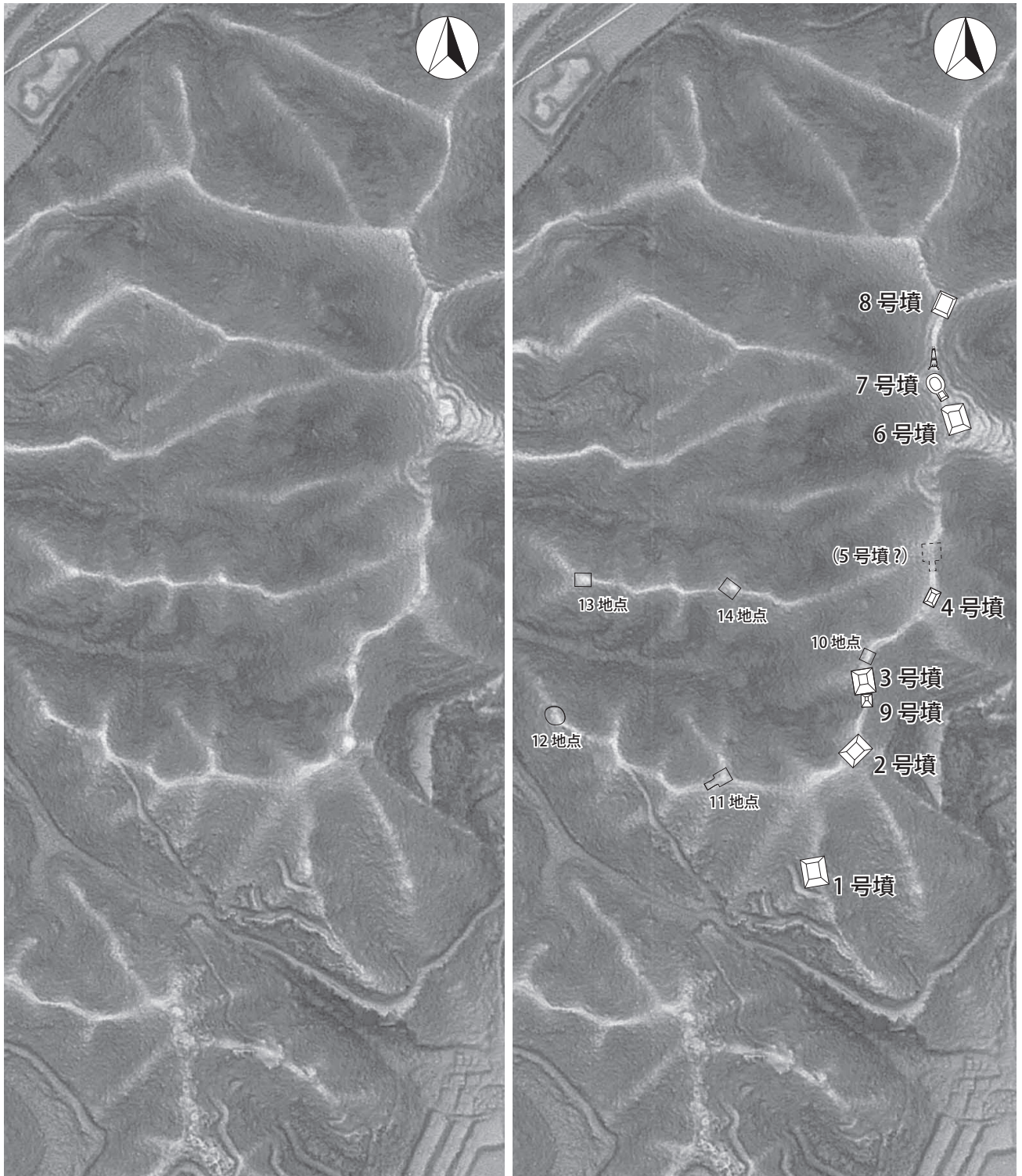


## ② 竜樹山古墳群

古墳の個々の位置及び方位の修正の他に下記の情報が得られた。

5号墳：自然地形の可能性が高くなった（古墳ではない可能性が高まった）。

新たに 13、14 地点にマウンド状地形を確認した（現地未確認、今後踏査を要する）。



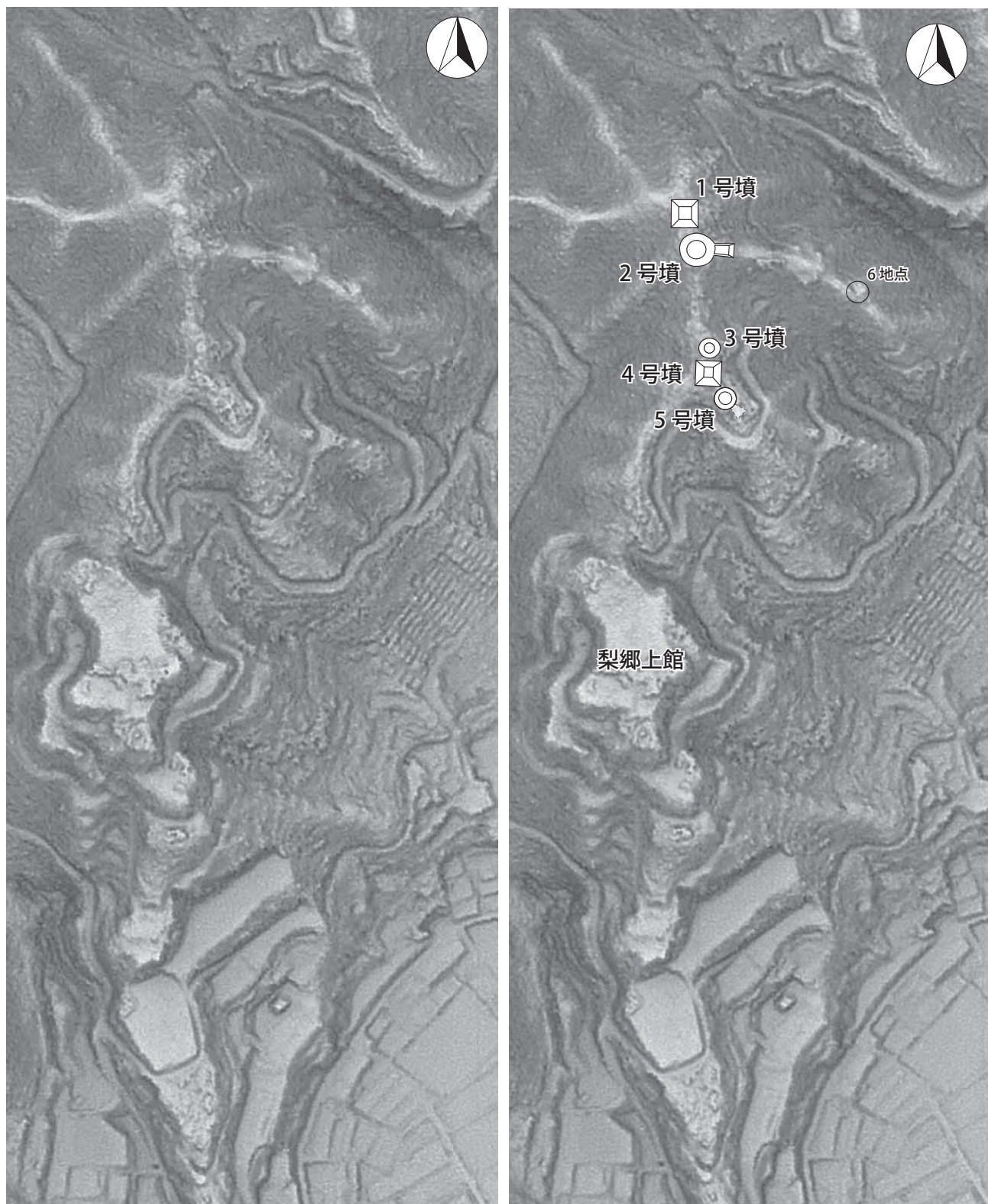
第 131 図 竜樹山古墳群位置図 S=1/4000

0 100m

### ③ 稲荷山古墳群

古墳の個々の位置の修正が図られた。未踏査である西や北側の枝尾根は自然地形であると判断される。5号墳の東南方向に隆起地形らしきものがあるが、この付近は作業道造成に関連した改変があるため、後日踏査が必要である。

古墳群は、梨郷上館の主郭北側に位置している。梨郷上館は主郭北側を堀切で区画している。その堀切の北側、古墳群が立地している尾根には城館址に関連するような遺構は読み取れないことから、古墳群の範囲までは城館跡は及んでいないと思われる。



#### ④ 経塚山古墳群

古墳の個々の位置及び方位の修正の他に、下記の情報が得られた。

2号墳：前方後円墳とされていたが、前方後方墳の可能性もある。

5号墳：自然地形の可能性が高くなった。

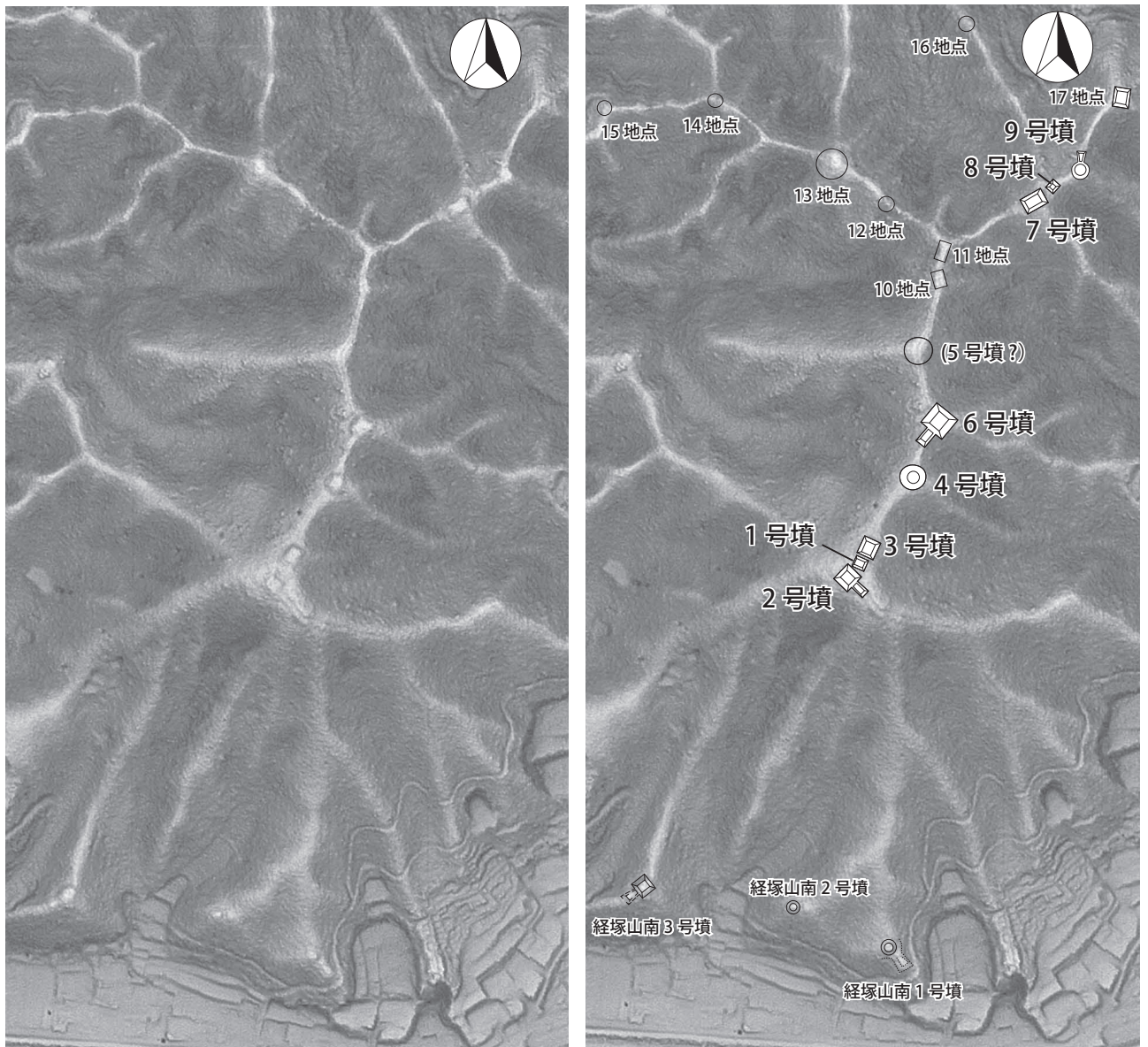
7号墳：前方後方墳の可能性もあるとされていたが、方墳とみられる。

14地点は、何らかのマウンドの可能性もある。

16地点は、自然地形とみられ、古墳ではないと考えられる。

17地点に新たに方形マウンドがあることが確認された（17号墳）。

新たに経塚山南古墳群3基が確認され、11月22日に現地踏査を実施した。



第 133 図 経塚山古墳群位置図 S=1/5000

0 100m

## (2) 中世城館址について

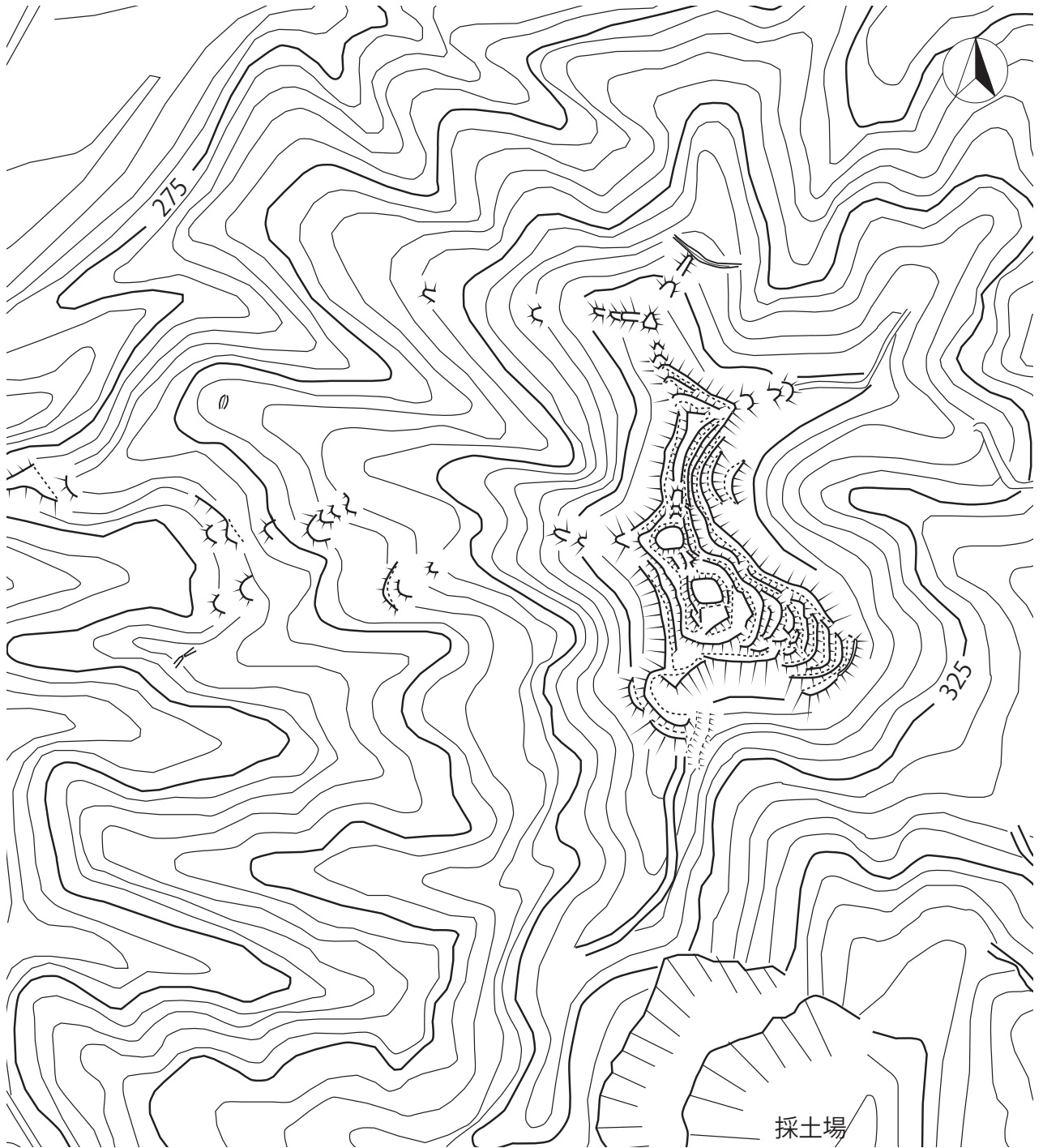
### ① 梨郷上館跡

赤色立体地図により梨郷上館の略図を作成した。新たな略図作成のため、山形県中世城館遺跡調査報告書第1集（1995 加藤ほか）に掲載の梨郷上館略側図を参考とし、4月13日に現地踏査を実施している。第134図中Ⅰ～Ⅲは、県報告の記載番号である。Ⅲは主郭にあたる。従来の略側図と比べるとⅡ付近の違いが大きい。なお、県報告にあるⅡの東斜面の畝状縦堀は今次踏査では藪のため位置の特定ができず、赤色立体地図及び県報告を元に推定し記載している。



## ② 竜樹山館跡

赤色立体地図により竜樹山館の略図を作成した。山形県中世城館遺跡調査報告書第1集(1995 加藤ほか)に掲載の竜樹山館略側図を参考とした。平成27年11月に現地踏査を実施している。従来の略側図と比べ各曲輪間の距離や位置関係が修正された。



第135図 竜樹山館略図 S=1/3000

0 100m

### ③ 竈山館跡

赤色立体地図により市遺跡分布調査報告書(4)に掲載の竈山館略図を修正した。従来の略図と比べ、各曲輪間の位置関係や方位が修正された。



## Ⅵ 第一次長岡南森遺跡確認調査（概報）

## 長岡南森遺跡確認調査 凡例

- 1 本報告は、山形県南陽市長岡字南森、字南森西、字清水尻、字西田中南、字西田に所在する長岡南森遺跡の第1次確認調査に係る概要報告である。報告内容については修正が行われる余地を含むことに留意されたい。
- 2 長岡南森遺跡の第1次確認調査は、平成30年度国庫補助事業として南陽市教育委員会が実施した。
- 3 調査期間は、2018年5月7日から6月25日までである。
- 4 調査体制は次のとおりである。  
調査員 角田朋行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）  
主幹課 社会教育課  
主幹課長 社会教育課長 佐藤賢一  
埋蔵文化財係技能士（調査補助員） 佐藤祥一
- 5 本報告書の作成、執筆は、角田朋行が担当した。遺物実測は、吉田江美子、山田渚が担当した。
- 6 挿図の縮尺はスケールで示した。
- 7 写真図版は任意の縮尺で採録した。
- 8 遺跡の基準点設置は、明光技研株式会社に委託した。
- 9 放射性炭素年代測定は、山形大学高感度加速器質量分析センターに委託し、その結果を付章に掲載した。
- 10 発掘調査で得られた資料は、南陽市教育委員会で保管している。
- 11 調査にあたっては、土地所有者の皆様をはじめ、次の方々によるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）  
山形県教育委員会、南陽市シルバー人材センター、青木敬、青山博樹、植松暁彦、菊地芳朗、佐藤鎮雄、佐藤庄一、門叶冬樹、柳沼賢治、吉野一郎



## 第1章 調査の経緯と目的

### 第1節 調査に至る経緯

南陽市長岡地区は、独立丘陵である長岡山と南森の東南に集落が発展した地域である。丘陵地を中心として旧石器時代から中世の遺跡が分布している。特に古墳時代には本市における拠点的な地域であったとみられ、県内最大の前方後円墳である稲荷森古墳が所在する。

長岡南森遺跡は、南森と呼ばれる独立丘陵に立地する縄文～中世の遺跡である。昭和53年に稲荷森古墳調査団によって確認され、稲荷森古墳と関連する古墳時代の重要な遺跡と考えられている。市教育委員会は、平成5年に明治期の字限図調査を行い、南森丘陵が前方後円墳に似た地割を有していたことを把握した。古墳の可能性が疑われる遺跡として市教育委員会による踏査が断続的に実施され、遺物の採集と地形の確認が進められたが、詳細な地形図も無く、一部が古墳に似た自然丘陵という認識を変えるような結果は得られなかった。特に後円部に相当する丘陵南半部は、その形状や尾根頂が平坦で広すぎるなど、古墳と異なる状況を呈しており、その原因のひとつとして中世館跡が存在することを確認した。

近年、周辺の土地開発が急激に進み、平成26年には開発が南森丘陵の間際まで及んだことから、遺跡の現状把握と今後の調査及び保護の基礎資料を得ることを目的として平成28年度に市教育委員会は測量調査を実施した。その結果、南森丘陵が改変を受けた古墳である可能性は否定しきれず、遺跡の性格を把握するための調査と検討が必要であると判断された。

市教育委員会は、平成29年度に長岡南森遺跡の確認調査を行う方針を定め、地権者訪問を行い、調査への理解と協力を依頼するなど諸準備を進めた。調査は、所有地の発掘について地権者の承認を得た地点から順次調査を進めることとし、平成30年度を初年度とする確認調査の年次計画を策定、平成30年（2018年）5月7日から調査を実施した。

### 第2節 調査期間と目的

#### (1) 調査期間

第1次長岡南森遺跡確認調査

発掘調査期間

平成30年（2018年）5月7日～平成30年（2018年）6月5日

踏査等実施日

平成30年（2018年）6月15日、18日、25日

#### (2) 第1次確認調査の調査地

山形県南陽市長岡字南森 1696、1698、1702、1703、1704、1705、1706

#### (3) 第1次確認調査の目的

長岡南森遺跡の性格把握及び南森丘陵の地形成因の把握を目的とする。特に古墳時代の遺跡としての内容把握と南森丘陵が古墳かどうかの確認を重要事項と位置づけ、初年度となる第1次調査では下記を目標を設定した。調査にあたっては、古墳か否かに関して予断を持たず、客観性を持って調査にあたることに努めた。

- ・丘陵の現況地形及び成因の把握（切土・盛土等の有無の確認）
- ・丘陵北半部西斜面テラス帯の形状・構造の把握、東斜面の改変状況の把握
- ・墳端やくびれ部に相当する地形の有無
- ・古墳に伴う遺物や外表施設等の有無
- ・次年度調査計画立案のための基礎データの収集及び課題の把握

### 第3節 調査方法

#### (1) グリットの設定

南森丘陵の測量図を基本にグリットを設定した。南森丘陵は、長形状の北半部と楕円形状の南半部から成るが、グリットは丘陵北半部を東西に半裁した南北軸を基線とし、基線から西と東へ5m移動した各ラインを10m×10mグリットの基軸線(方位は真北)とした。グリットは、南森丘陵の東西方向をアルファベット大文字で東からA～Rと表記し、南森丘陵の南北方向を数字で北から1～22と表記した。丘陵の北半部は概ねI3～O11、南半部は概ねD12～Q20の範囲に納まる。

現地で設営した基準杭は、グリットの西北角に配置し、6ヶ所の基準杭(杭A～杭E：プラスチック杭、杭F：金属釘)を設置した。埋設杭及び金属釘の世界測地系(測地成果2011)に基づく座標値は次のとおりである。

杭	X	Y	H
A	-217662.008	-59334.244	217.106
B	-217652.008	-59274.244	219.639
C	-217642.008	-59294.244	220.254
D	-217622.008	-59314.244	216.293
E	-217622.008	-59284.244	219.175
F	-217602.008	-59284.244	291.974

#### (2) 調査地点の設定

第1次確認調査では、地権者の発掘承認が得られた範囲内でなおかつ支障木ができるだけ少ない地点にトレンチを設定することとし、古墳であれば比較的残りが良いと思われる丘陵北半部の西斜面に2地点(第1トレンチ、第2トレンチ)、東斜面に2地点の合計4地点を計画したが、調査期間の都合上、東斜面の調査は未実施となった。

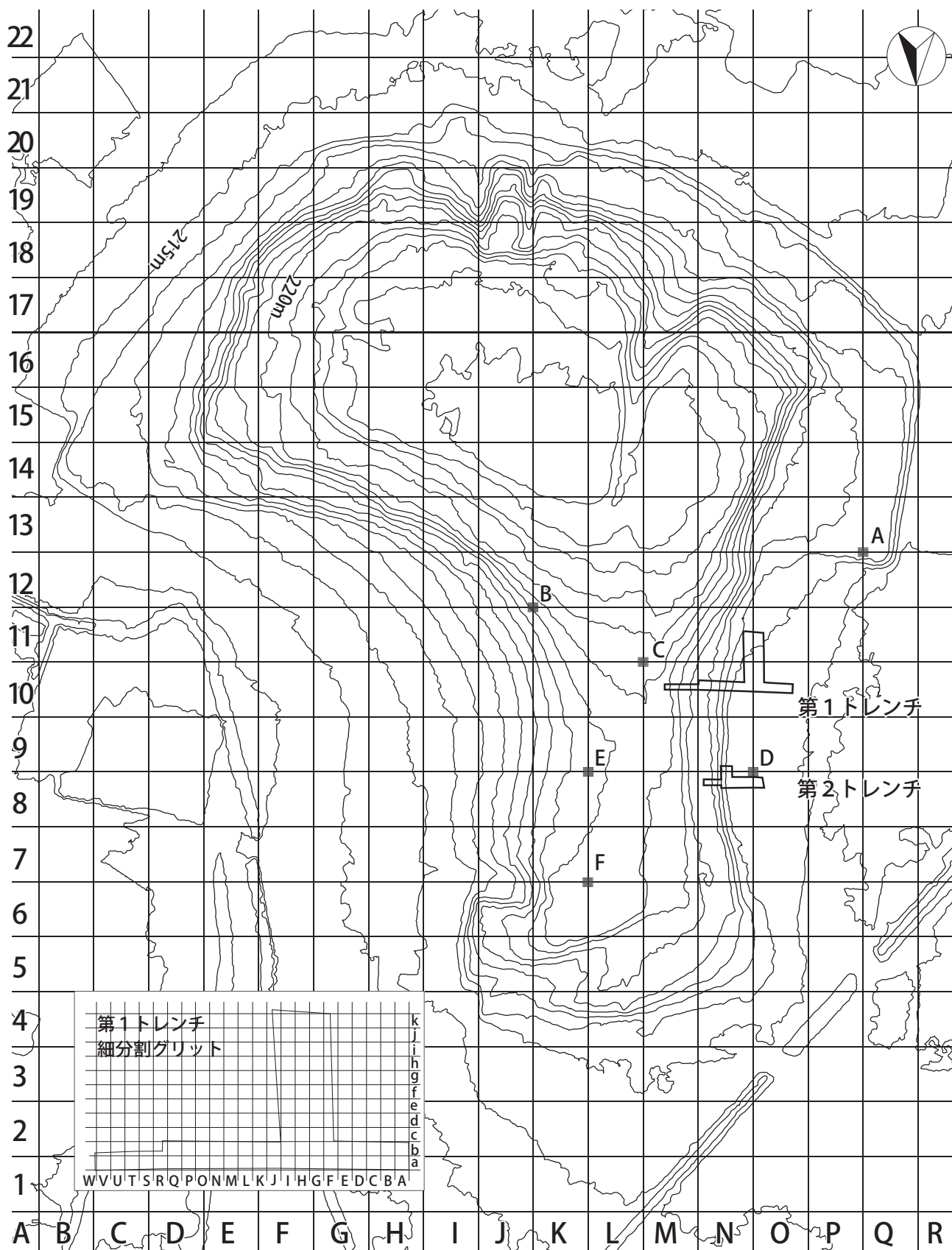
#### (3) 発掘調査

発掘調査は、計画したトレンチのうち第1トレンチ及び第2トレンチで実施した。東斜面については次年度以降に実施する方針とした。トレンチ幅は2m、4mを単位として計画した。場所によっては木の根に妨げられ幅を1mとした。

第1トレンチは、丘陵北半部西斜面の現況山裾を中心に東と西の方向に各10m、山裾に沿って南に10mの範囲を基本に設定した。尾根の肩部には太い木々が密集しており今次調査で伐採できないため、東側は斜面半ばで小段を成すテラス帯まで範囲に含めるにとどめた。第2トレンチは、現況山裾を中心に東と西の方向に各5mを基本に設定した。

発掘は、表土剥離から手掘りによって行った。表土は、調査区内周に沿ってサブトレンチを掘り、区画を明確にした後に掘り下げた。調査終了時に埋戻しを行った。

遺物、遺構、断面図作成は1/20の縮尺を基本とした。小破片の遺物は位置と高さのみ記録し、形状のわかる遺物や遺構内の遺物は出土状況を図化したうえで取り上げた。遺物の出土数が予想外に多く、その概況を把握するため第1トレンチは1mメッシュで東西23区画、南北11区画に細分割し、東西方向はアルファベット大文字で西からA～Wとし、南北方向はアルファベット小文字で北からa～kとした。表土の粗掘等で掘り上げた遺物の他、土器集中地点の小片も場合により細分割グリットで取り上げた。なお、第1トレンチの低地部最下層の土器は小片で水が湧き出す中での出土であったため位置等を記録できない場合があった。



■ A～Fは基準杭

第 137 図 長岡南森遺跡グリッド配置図及びトレンチ位置図 S=1/1000

0 20m

#### 第4節 平成30年度調査の経過

第1次確認調査となる発掘は、5月7日～6月5日の期間で実施した。地権者の承諾を得たうえで支障木の除去や草刈り等の環境整備、現場テントの設営を行った。事前に除去できなかった木や根の除去は調査の進展にあわせ随時実施した。5月7日～8日に基準杭6ヶ所を設置した。5月8日に第1トレンチ及び第2トレンチを設定した。5月10日から第1トレンチの調査を開始し、5月16日から第2トレンチの調査を開始した。

第1トレンチは、斜面と山裾の現況地形及び成因の把握、墳端やくびれ部の有無、テラス帯の地形の把握に重点をおいて調査を進めた。その結果、現況の山裾は原地盤の丘陵斜面を削って造られた整地帯（以下、本報告においては平坦面と称する）の上に位置していることを把握した。平坦面の外側も同様に原地盤の丘陵斜面を削って段を成しており、段の外側に人工的な窪地（以下、本報告においては低地と称する）があることを把握した。斜面及びテラス帯は地山を削って造成していることを把握した。テラス帯より上部は支障木のため調査できなかった。くびれ部に相当する地形は調査範囲内では確認されなかった。

第2トレンチでは、山裾と平坦面の関係及び平坦面外側の低地の存在等が第1トレンチと同様であることを把握した。調査範囲の西側はさらに延長が必要と判断されたが実施できなかった。第1、第2トレンチから西斜面における平坦面外縁の肩のラインは現況山裾とほぼ平行し、北側ではやや西に広がりながら南北に延びている可能性を把握した。

現地説明会を6月3日に開催し、6月4日から埋戻しを実施した。今後の調査方針を検討するため6月15日に踏査を行い、6月18日、25日に丘陵南半部西側においてボーリングステッキによる土層調査を行った。

5月 7日（月）資材搬入、テント設営、調査範囲の草刈、支障木伐採、基準杭設置

5月 8日（火）基準杭設置、第1トレンチ、第2トレンチ設定

5月10日（木）第1トレンチ表土掘り下げ開始

5月11日（金）第2層サブトレンチ設定、出土遺物記録

5月14日（月）第2層サブトレンチ掘り下げ、山裾の地山検出、斜面掘り下げ開始、斜面の地山上から土師器出土、山裾外側に平坦面確認

5月15日（火）第2層掘り下げ、斜面表土剥離完了、平坦面と堆積層の境を確認

5月16日（水）平坦面外側の低地で第2～3層掘り下げ、出土遺物記録、低地中層から二重口縁土器の口縁部片出土、第2トレンチ掘り下げ開始

5月17日（木）午前雨天休み、第1トレンチ出土遺物記録、低地掘り下げ、斜面にサブトレンチ設定し、掘り下げ

5月18日（金）雨天、現場休み。菊地芳朗氏・青山博樹氏現地指導

5月21日（月）第1トレンチ低地掘り下げ、出土遺物記録、斜面掘り下げ

5月22日（火）第1トレンチ低地掘り下げ、堀底確認のためサブトレンチ設定、第2トレンチ表土剥離、第1トレンチベルト1記録及び取り外し、平坦面の旧表土層から縄文土器片出土、第2トレンチ表土下から器台片出土

5月23日（水）第1トレンチ低地掘り下げ、同北壁断面記録

5月24日（木）第1トレンチ南西壁付近低地掘り下げ、第1トレンチ北壁・南壁断面記録、テラス部掘り下げ、テラス部表土下礫石出土、遺物が集中して出土、地形測量、第2トレンチ低地部掘り下げ

- 5月25日(金) 第2トレンチ掘り下げ、第1トレンチテラス部掘り下げ、出土遺物記録、テラス部で突帯に刻み目のある土器口縁部片出土
- 5月28日(月) 第1トレンチテラス部を東側へ延長し掘り下げ、延長地点で器台出土、斜面以下の写真撮影、第2トレンチ掘り下げ、北壁断面記録、山裾の地山直上で器台出土、第1トレンチテラス部で炭化物と遺物の集中範囲を検出、大型の土坑状の遺構が存在か
- 5月29日(火) 第1トレンチテラス部掘り下げ、出土遺物記録、北壁断面記録、第2トレンチサブトレンチ設定し掘り下げ、南壁断面記録
- 5月30日(水) 第1トレンチテラス部サブトレンチ設定し掘り下げ、テラス部北壁断面図記録、平面図記録、低地底の面削り、写真記録、第2トレンチ低地のサブトレンチ掘り下げ、断面記録、平面図記録、写真撮影。菊地芳朗氏・柳沼賢治氏現地指導
- 5月31日(木) 補足記録作業
- 6月 3日(日) 現地説明会
- 6月 4日(月) 第1トレンチテラス部の土坑サブトレンチを設定し掘り下げ、出土遺物記録、焼土遺構掘り下げ・記録、第2トレンチ掘り下げ、記録、第1トレンチ及び第2トレンチ埋め戻し開始
- 6月 5日(火) 第1トレンチテラス部土坑の出土遺物記録、北壁断面記録、第1トレンチ及び第2トレンチ埋め戻し
- 6月 6日(水) 埋め戻し
- 6月 7日(木) 埋め戻し終了、現場テント解体、資材撤収
- 6月15日(金) 次期調査区検討のための踏査等
- 6月18日(月) 丘陵南半部の西側において杭Aの東西方向でボーリングステッキによる土層調査、地山の位置と深さを確認
- 6月25日(月) 丘陵南半部の西側において杭Aの南10m及び20m地点から東方向へのボーリングステッキによる土層調査、地山の位置と深さを確認

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

南陽市は、山形県南部の米沢盆地北東部にあたり、北緯38度1'11"～38度13'25"、東経140度14'11"～140度14'17"に位置する。市域の南北の長さは約22.6km、東西は約14.8kmで、面積は約160.70km<sup>2</sup>である。

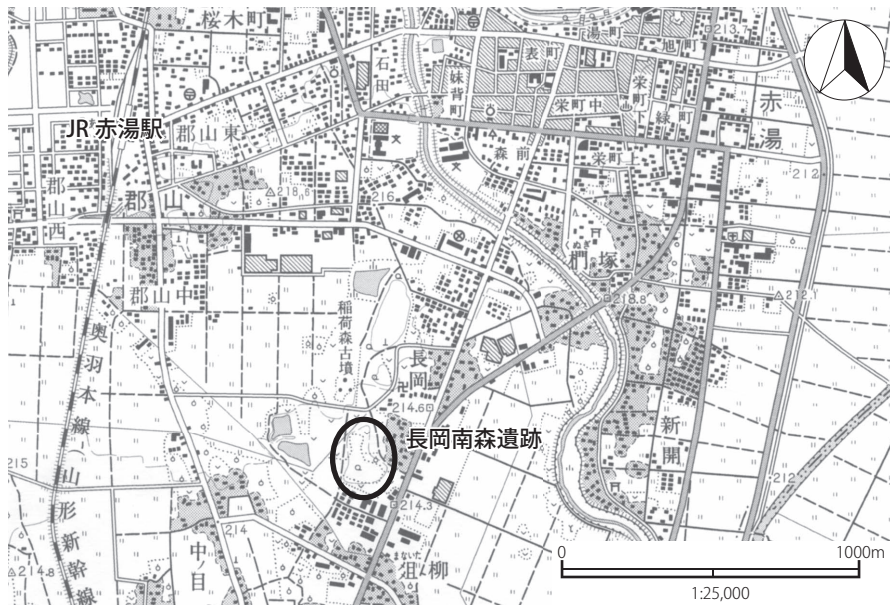
市域北部には、山地が広がり最北端に白鷹山がそびえる。市域南部は、宮内扇状地である。宮内扇状地の東には低湿地帯である大谷地が広がる。宮内扇状地の扇端を流れる最上川が市境となっている。

長岡南森遺跡は、JR奥羽本線赤湯駅から南東へ約1.2km、南陽市長岡に位置する。遺跡の立地する南森丘陵は大平山地南端に位置する烏帽子山から大谷地の縁に沿って点在する独立丘陵群の一つである。県内最大の前方後円墳として知られる国指定史跡稲荷森古墳からは南東へ約130mの距離に位置する。遺跡の東には国道13号線が通り、遺跡から国道までの間は古くからの集落となっている。その東には吉野川が流れる。

長岡南森遺跡の所在地は、南陽市長岡字南森、字南森西、字清水尻、字西田中南、字西田、まないたやなぎ柳字六百刈である。南森丘陵の主要地番は長岡字南森1650番地の1である。

南森丘陵東側には長岡地区の集落があり、南森丘陵の西南及び南側は近年宅地化が進んでいる。南森丘陵の北半は主に果樹園や畑地として利用されていたが、近年は休耕作地が増えている。南森丘陵の南半は主に山林になっており、東側に矢止八幡宮、西側に神明神社があり、近世墓地も所在している。

これまでの調査から南森丘陵の西方約 100m を比較的大きな旧河道が北から南へ流れていたとみられ、長岡堤や狙柳堤等の堤はその名残と考えられる。この旧河道は南森丘陵の南方で東へ折れて南東方向へ流れていたと考えられ、南森丘陵は旧河道と大谷地に挟まれた独立丘陵群の最南端にあっている。



第 138 図 長岡南森遺跡の位置 S=1/25000

## 第 2 節 周辺の歴史的環境

長岡南森遺跡のある長岡地区は歴史が古く、長岡山丘陵上の長岡山遺跡、長岡山丘陵東側の長岡山東遺跡、長岡山丘陵の南西端に位置する稲荷森古墳は、旧石器時代及び縄文時代の遺跡としても知られている。

縄文時代の遺跡は泥炭地である大谷地周辺に多くの遺跡が分布する。縄文草創期の遺跡では北町遺跡が低湿地の集落遺跡であることが確認されており、竪穴住居跡等の遺構、石器、縄文土器、動植物遺体等が確認されている。大谷地東側の松沢遺跡や稲荷森古墳からは有溝砥石が採取されている。大谷地北側の月ノ木 B 遺跡では縄文早期から前期にかけての遺物が出土しており、近年、長岡山遺跡や長岡南森遺跡でも縄文前期の土器が表採されている。縄文中期では長岡山遺跡、長岡山東遺跡、長岡南森遺跡、柵塚館ノ山遺跡等が分布する。

弥生時代の遺跡は、宮内扇状地の自然堤防上に分布がみられる。南森丘陵の西約 1.2km には、十数基の再埋葬が確認された中期の遺跡である百川田遺跡があり、同じ沖郷地区の萩生田遺跡からは石包丁が出土している。長岡南森遺跡でも弥生時代の遺物が採取されている。

古墳時代には、長岡山丘陵の南西端に稲荷森古墳、長岡山丘陵上に長岡山遺跡の墓域（4基の方形周溝墓と主体部 1ヶ所）が確認されている。主体部（SH53）に伴う周溝等は不明瞭である。SH53からは袋状鉄斧、ヤリガンナ、鑿<sup>のみ</sup>、鉄鍬、鉄剣が出土しており古墳時代前期～中期と考えられている。長岡山東遺跡は稲荷森古墳に関連した集落遺跡と考えられている。大谷地東側に位置する松沢古墳群は合掌型石室を持つ積石塚古墳で古墳時代後期前半と考えられている。

平安時代の遺跡は、長岡山遺跡、長岡山東遺跡、長岡南森遺跡のほか、南森丘陵の北西約630mに位置する矢ノ目館跡から西には古代置賜郡衙に関連するとされる郡山遺跡群が広がり、沖郷・宮内地区を中心とする沖郷条里制の存在が指摘されている（2010 佐藤鎮雄）。長岡山遺跡や稲荷森古墳からは、円面硯や墨書土器等、官衙等の存在をうかがわせる遺物も出土している。

中世の遺跡では、長岡山丘陵上に湯野目氏が居住したと伝わる長岡館跡（※長岡山遺跡とは範囲が重複する）があり、南森丘陵上にも南森館跡があったと推測される。南森丘陵の南側では旧河道を挟んで内城館跡が立地し、さらに南には鶉ノ木館跡がある。



番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代
1	長岡南森遺跡	縄文～中世	6	長岡西田遺跡	縄文、平安	11	水上遺跡	中世	16	李の木遺跡	平安
2	稲荷森古墳	古墳	7	内城館跡	中世	12	南屋敷館跡	奈良・平安	17	桐塚館の山遺跡	縄文、中世
3	長岡山遺跡	旧石器～中世	8	中ノ目下遺跡	平安	13	矢ノ目館跡	奈良～中世	18	桐塚館跡	中世
4	長岡山東遺跡	旧石器～中世	9	鶉ノ木館跡	古墳～中世	14	東六角遺跡	縄文、平安	19	太子堂遺跡	平安
5	長岡館跡	中世	10	熊の前館跡	中世	15	早稲田遺跡	平安			

第 139 図 長岡南森遺跡周辺遺跡図 S=1/10000

## 第3章 調査の概要

### 第1節 現況地形の把握

今次の調査対象地である丘陵北半部は北辺幅約 62 m、南北の長さ約 75 m で平面形は北に延びた長方形に近く、北辺に向かって横幅が広がる。尾根は平坦になっている。その西斜面の半ばには帯状に幅 4.5 ～ 5.5 m のテラスが見られる。東斜面は緩斜面となっておりテラス帯は見られない。以下、本報告においては丘陵北半部の西斜面の半ばにあるテラス帯の上下で斜面を区分し、テラス帯より下の斜面を下段斜面、上の斜面を上段斜面と呼称する。西斜面の山裾の標高は 216.3 m、斜面半ばのテラス帯の標高は 218.3m、尾根の平坦面の標高は 219.5m、現況の丘陵北半部の高さは 3.2m 前後である。西斜面の下段斜面の傾斜は、第 1 トレンチで 25°、第 2 トレンチで 33° 程となっている。これに対して葡萄園として均された経緯のある東斜面の傾斜は 10° 程で、山裾も不明瞭になっている。

### 第2節 第1トレンチ

丘陵の平面形の成因を明らかにし、山裾と斜面の関係及び地形の成り立ちを把握する目的で設定した。当初は 200m<sup>2</sup> 余の範囲の調査を検討したが現場の状況に合わせ範囲を縮小した。

下段斜面から平地へ至る地形変化を見るため、テラス帯の肩部から平地を範囲とする東西方向のトレンチ（東西 20m、南北 2m）を設け、続いて山裾に沿う南北方向のトレンチ（東西 4m、南北 9m）を組み合わせて T 字型の調査範囲とした。東西方向のトレンチは、西端から東へ約 17m の地点よりも東側では支障木を避けて横幅を北方向へ 0.8 m 狭め、さらにテラス帯上で土坑状の遺構を検出したことから調査区東端を上段斜面下半の樹木の根際まで約 3m 延長して東西 23m のトレンチとした。調査面積は約 77m<sup>2</sup> である。

地形は、山裾から下段斜面では、自然丘陵の原地盤が削られており、地山風化層や地山（第 30、44 層）の切り土法面になっていることが確認された。下段斜面の上半～テラス帯の肩部では、地山上に堅く締まる黒褐色層（第 31、32、34a 層）が確認された。テラス帯は、丘陵の原地盤を水平に地山まで削って平坦化した地形が基になっているとみられる。

山裾では、山裾の外側に旧表土（第 3～6 層）と地山を水平に削った幅約 4 m の整地帯である平坦面が確認された。平坦面として残る旧表土層に対応する層は下段斜面では残存しない。このことから下段斜面流土層下の斜面状況は人工的に造成された結果によるものと判断され、切り土法面上の黒褐色層は盛土の一部である可能性も考えられる。

埋没していた平坦面の外縁は、丘陵斜面に自然堆積した旧表土層（第 3～5 層）を削って人工的な段を成しており、平坦面斜面下端までが人工的な造成による地形であることが確認された。平坦面の外側は深さ 70 ～ 80cm の低地になっている。低地の西側の立ち上りは検出されておらずその幅は不明である。低地は、平坦面と同レベルまで埋没した上に現表土及び流土層（第 1、2 層）が堆積している。低地の第 8～16 層、第 21～28 層は自然堆積層である。低地底面の第 29 層は旧表土の残存層と思われる。

調査の結果から丘陵北半部西側の横断地形を西から東へ概観すると、低地—平坦面斜面の裾（下端）—平坦面斜面—平坦面肩部（上端）—平坦面—下段斜面裾（下端、現状の山裾）—下段斜面—テラス帯肩部（上端）—テラス帯—上段斜面の裾（下端）—上段斜面—尾根肩部（上端）となっていたことが判明した。

テラス帯の上段斜面裾付近の表土下の第 36 層から土器が出土し、地山確認のためサブトレンチを入れたところ、地山を想定していたレベルにおいて褐色粘土が混じる堅く締まった



無遺物層（第 40、41 層）を確認、その下に土器片を多く含む大型の土坑（SK1）を検出した。

土坑の覆土の状況や粘土塊が混入する状況等から土坑は人為的に埋め戻されたと考えられ、土坑は上部を水平に切土された後、その上に無遺物層が盛土されているとみられる。土坑の東西幅は約 3m で第 40 層上面からの深さは約 0.6 m である。覆土には人為的に割られたとみられる土器片を多く含む層（第 51 ～ 53 層）があり、第 46、47、49 ～ 52 層は炭を含む。第 50 層は白味を帯びた粘土が混じる。床面（第 51 層）には礫が散在し、一部に焼土を思わせるにぶい赤色の土が薄く堆積していた。また、無遺物層（第 40 層）と流土層（第 35 層）の境からは直径 10 ～ 20cm の礫が 30 点以上出土した。造成地形の表面保護に係る石材の一部である可能性もあったが、表土の認識で掘り下げ作業が進んでしまったためすぐに掘り上げられ、礫の出土状況の精査・記録はできなかった。土坑の遺物出土状況では、第 52 層出土の器台脚部内に棒状炭化物が入り込んでおり、床面では逆位の二重口縁壺の頸部（第 149 図 6）の上に底径 12cm の壺の底部（第 149 図 8）が逆位で重なるように出土した。同様に台付甕の底面に貫通しない円形の穴を施した台部（第 149 図 11）が逆位の状態で床面から出土した。

低地から平坦面斜面にかけて煙道付きの炉のような焼土遺構を 1 ケ所検出した。遺構は丘陵の旧斜面を掘って造られており、燃焼部は粗砂が融着して底面が舟型に硬化していた。低地造成により燃焼部上半が失われており、低地掘削前の遺構と思われる。焼土遺構に伴う遺構は周辺で確認されず、燃焼部底面からは縄文土器片（羽状縄文、第 147 図 6）1 点が出土したが、遺構の時期や性格は検討を要する。

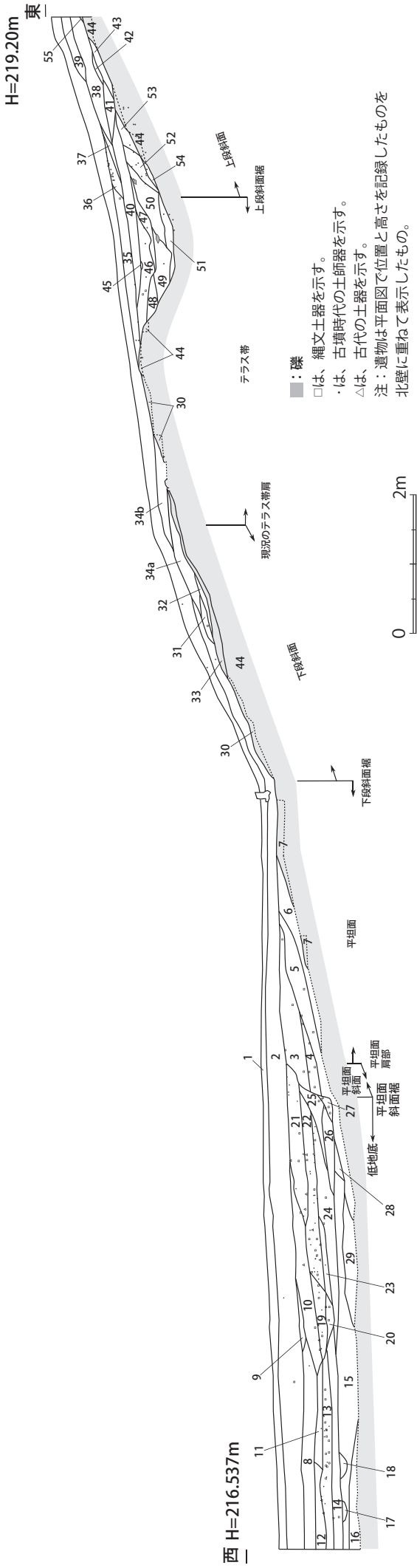
低地では下層（第 15 層）に掘り込まれたピットを検出した。低地が埋没した過程で何らかの利用があったと思われる。下段斜面裾付近の表土下や低地の底面では、長軸 10 ～ 25cm の転石が複数検出されたが、葺石のような石が集中する状況はみられなかった。

遺物は、低地では、低地下層及び平坦面斜面裾から縄文土器片及び石器片が出土した。低地中層からは二重口縁壺片等の古墳時代の土師器片が多く出土したが、縄文土器片も混在する。低地上層や上層から掘り込まれた溝跡等からは縄文時代と古墳時代の土器の他、古代の土器片が少量出土した。

平坦面では、旧表土層から縄文土器片及び石器片が出土した。平坦面上の表土からは、主に古墳時代の土師器片が出土した。下段斜面の裾付近の表土からは、壺の底部を打ち欠いて円盤状に加工した土器や近世の播鉢片等が出土した。下段斜面の半ばでは、表土や地山上から古墳時代の土師器片が出土した。地山上の第 31 層からは縄文土器片が出土した。

土坑からは、無遺物層を挟んだ上下の層から土器片が多く出土した。無遺物層上の第 36 層は土坑覆土の切土を改めて積んだものと考えられ、第 36 層出土の土器は土坑構築時に表面に置かれたものではないとみられる。土坑覆土の遺物は全て破片で堅く焼かれた土器すらも小片であることから、埋没後に破片が滅失したのではなく、割った土器片を投棄したような状況が推定される。器種は器台または高坏が多く、二重口縁壺、有段口縁壺もしくは甕、台付甕、甕、赤色加工された土器、壺の他、円形浮文や棒状浮文のある口縁部片、刻目を施した三段の隆帯を有する口縁部片、打ち欠き成形の小型円盤状土製品等の多種多様な土器が出土した。

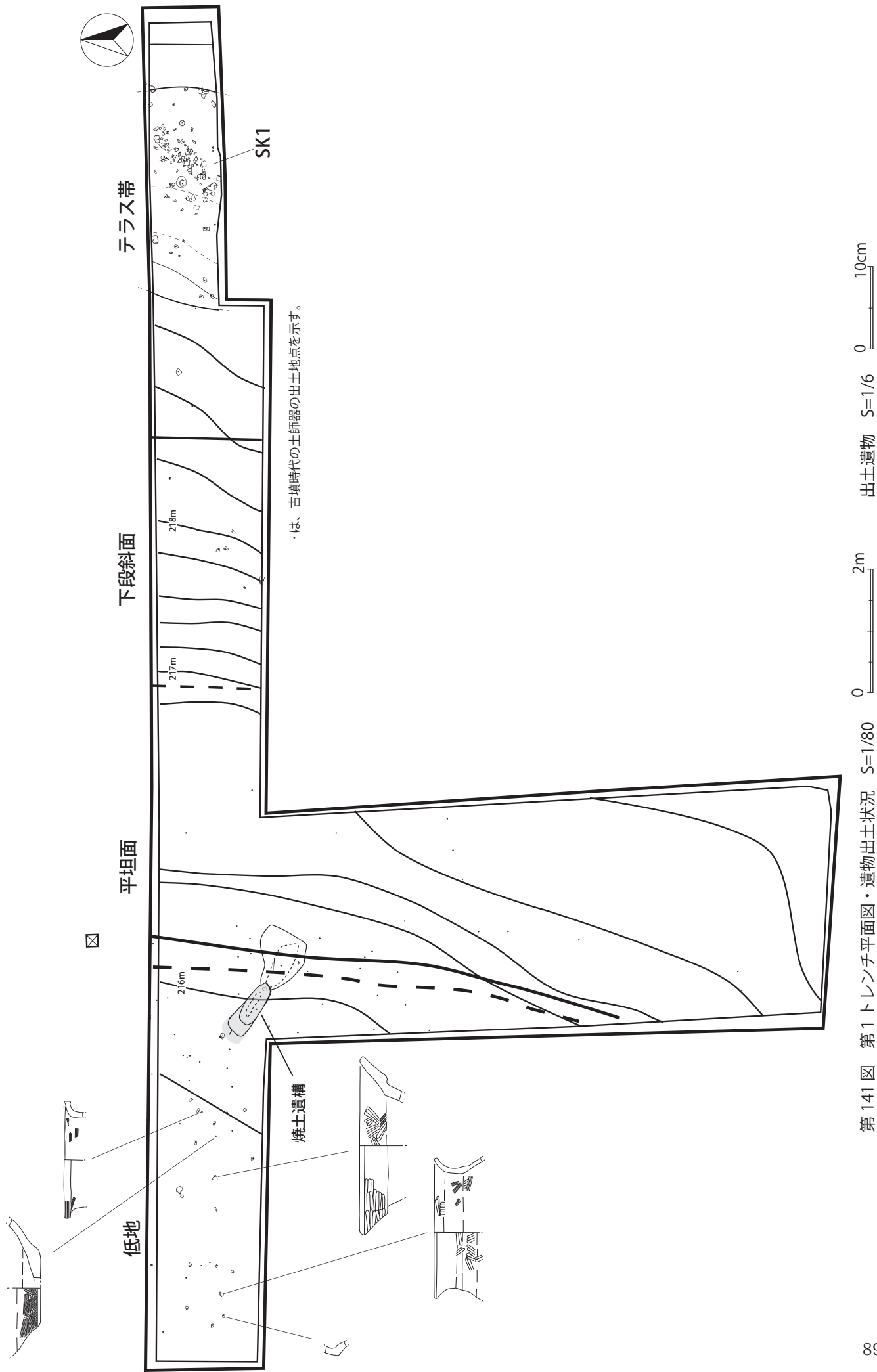
覆土中の炭化物 2 点、器台脚部内の棒状炭化物 1 点、土器付着炭化物 1 点の計 4 点を採取し、炭素年代測定を実施した。



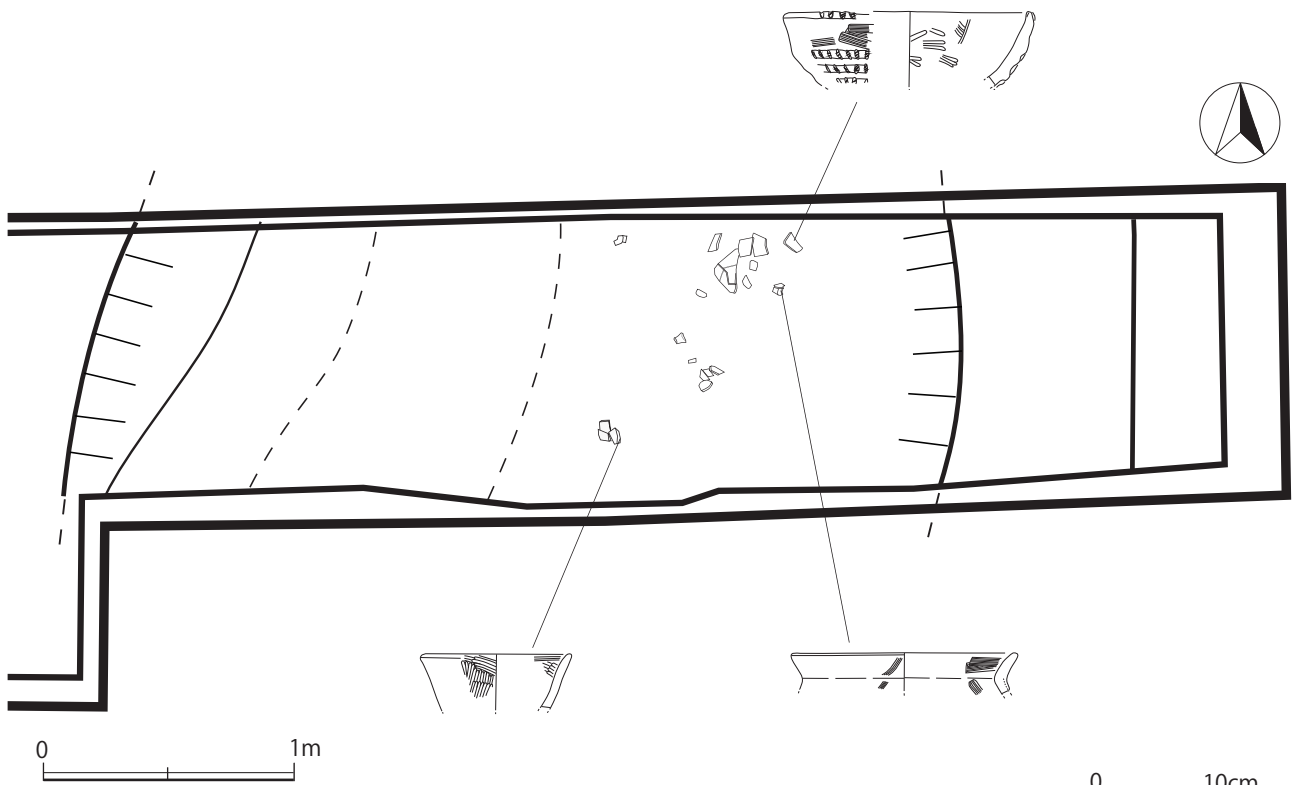
第1トレンチ (北壁)

1 7.5YR3/2	黒褐色砂質粘土 (表土、2よりくすむ)	22 7.5YR2/1	黒色砂質粘土 (締めりなし)	41 10YR2/2	黒褐色砂質粘土 (締まる。黒色粘土ブロック混じる。遺物なし)
2 7.5YR3/3	暗褐色砂質粘土 (流土)	23 7.5YR2/1	黒色砂質粘土 (22よりやや暗い、直径3cm礫混じる)	42 7.5YR2/2	黒褐色砂質粘土 (締まる)
3 10YR2/2	黒褐色砂質粘土 (旧表土、褐色粒少し混じる)	24 7.5YR2/2	黒褐色砂質粘土 (褐色粒混じる、締めり緩い)	43 7.5YR2/2	黒褐色粘質砂層 (褐色粘土混じる)
4 10YR2/3	黒褐色砂質粘土 (褐色粒少し混じる)	25 7.5YR3/2	黒褐色砂質粘土 (褐色粒混じる、締めり緩い)	44 5YR4/4	にぶい黄褐色粘土 (地山)
5 10YR3/3	暗褐色砂質粘土 (褐色粒少し混じる)	26 10YR2/3	黒褐色砂質粘土 (褐色粒混じる)	45 7.5YR2/2	黒褐色粘質砂層 (黄褐色粘土混じる)
6 10YR3/4	暗褐色砂質粘土	27 7.5YR2/2	黒褐色砂質粘土	46 5YR2/1	黒褐色粘質砂層 (炭多く混じる)
7 10YR3/4	暗褐色砂質粘土 (地山、6よりやや明るく、粗砂)	28 7.5YR3/2	黒褐色砂質粘土 (褐色粒混じる)	47 7.5YR3/2	黒褐色砂質粘土 (炭・褐色粘土混じる。遺構中央付近は褐色粘土塊増える。)
8 7.5YR2/2	暗褐色粘質粘土 (褐色粒混じる)	29 10YR2/3	黒褐色砂質粘土 (4層と同一層か)	48 5YR2/2	黒褐色砂質粘土
9 7.5YR3/4	暗褐色粘質砂層	30 10YR3/4	暗褐色砂質粘土 (地山風化層)	49 7.5YR2/2	黒褐色砂質粘土 (48層に近似するが、より黒い。炭多い、凝灰岩粒含む)
10 7.5YR2/2	黒褐色砂質粘土 (8よりやや暗い)	31 10YR2/3	黒褐色砂質粘土 (締める)	50 2.5Y2/3	極暗褐色粘質砂層 (炭混じる。地山の土や褐色粘土等多様な土が混じる。直径5mmの凝灰岩粒、直径5~12cmの角礫一定量含む)
11 7.5YR2/1	黒色砂質粘土 (褐色粒、直径1cmの礫混じる)	32 7.5YR3/4	暗褐色砂質粘土 (締める、地山由来)	51 7.5YR3/4	暗褐色砂質粘土 (地山の土が斑に混じる。炭混じる。一部に焼土状のにぶい赤色土混じる。底に直径15~30cmの礫群あり。)
12 7.5YR3/1	黒褐色粘質粘土	33 7.5YR4/4	褐色砂質粘土 (締める、地山風化層)	52 5YR2/1	黒褐色砂質粘土 (炭混じる。褐色粘土混じる)
13 10YR2/1	黒色砂質粘土 (締めりなし)	34a 10YR3/4	黒褐色砂質粘土 (締める)	53 7.5YR4/3	褐色粘質砂層 (地山風化土)
14 10YR2/1	黒色砂質粘土 (13よりやや暗い、締めりなし)	34b 10YR3/4	黒褐色砂質粘土 (34aより明るい)	54 5YR2/3	極暗赤褐色砂質粘土 (52層との境やや赤味あり。直径5mm礫混じる)
15 10YR2/3	黒褐色粘質粘土 (締めりなし)	35 10YR2/3	黒褐色砂質粘土 (締めりなし、流土)	55 7.5YR2/2	黒褐色砂質粘土
16 10YR3/3	暗褐色粘質砂層	36 7.5YR2/3	極暗褐色砂質粘土 (遺物含む)		
17 10YR2/2	黒褐色砂質粘土 (柱穴)	37 7.5YR2/2	黒褐色砂質粘土 (締める)		
18 10YR2/2	黒褐色砂質粘土 (柱穴)	38 5YR2/2	黒褐色砂質粘土 (締める)		
19 10YR2/1	黒色砂質粘土 (締めりなし、溝跡)	39 7.5YR3/2	黒褐色砂質粘土 (締める、直径2cm礫混じる。遺物なし)		
20 10YR2/1	黒色砂質粘土 (19より暗い、直径3cm礫混じる。溝跡)	40 10YR3/2	黒褐色砂質粘土 (硬く締める。黒色粘土と褐色粘土がブロック状に混じる。上半に直径10~15cm程の角礫。遺物なし)		
21 7.5YR2/2	黒褐色砂質粘土 (明褐色粒少量混じる。直径1cm礫混じる)				

第140図 第1トレンチ北壁断面図・出土遺物高 S=1/80

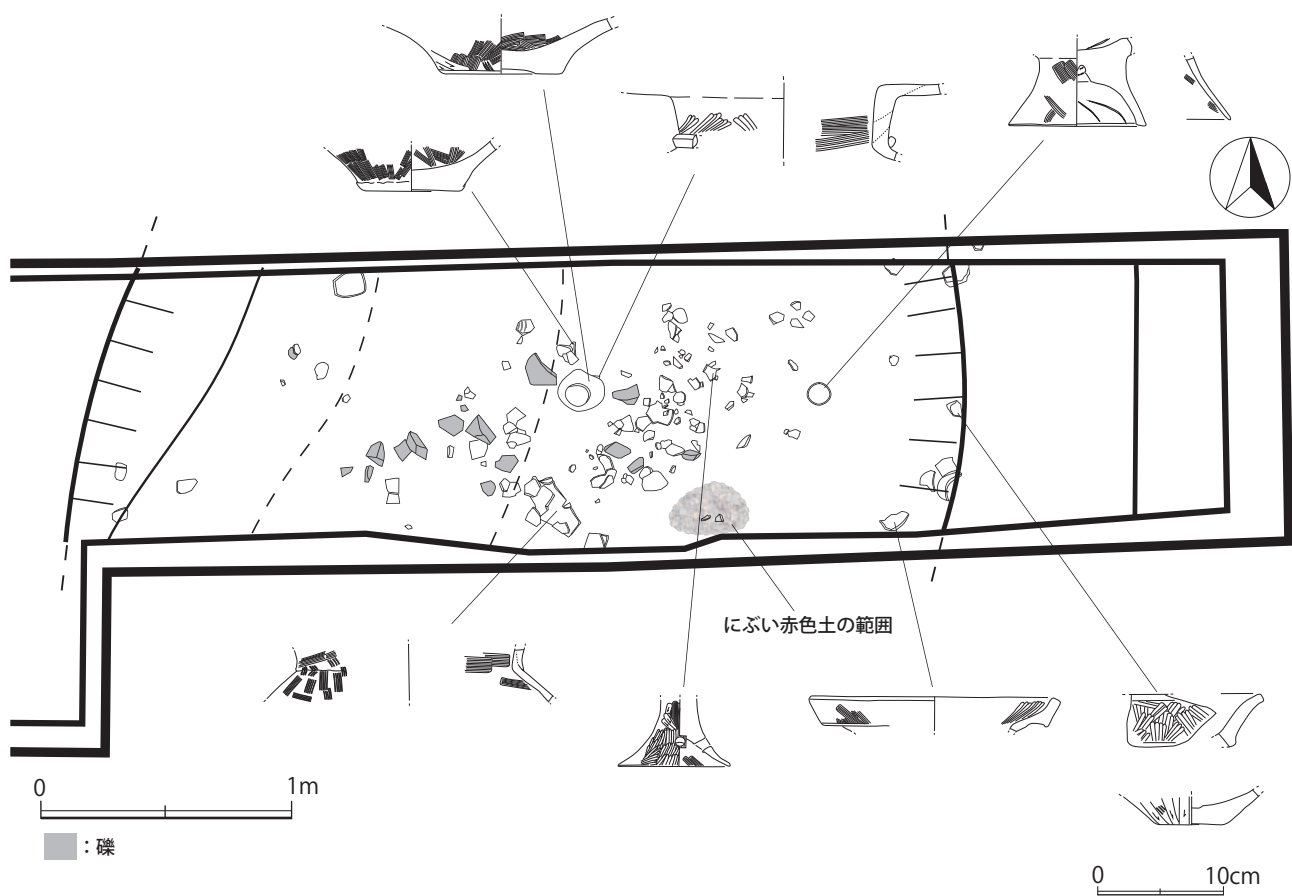


第 141 図 第 1 トレンチ平面図・遺物出土状況 S=1/80



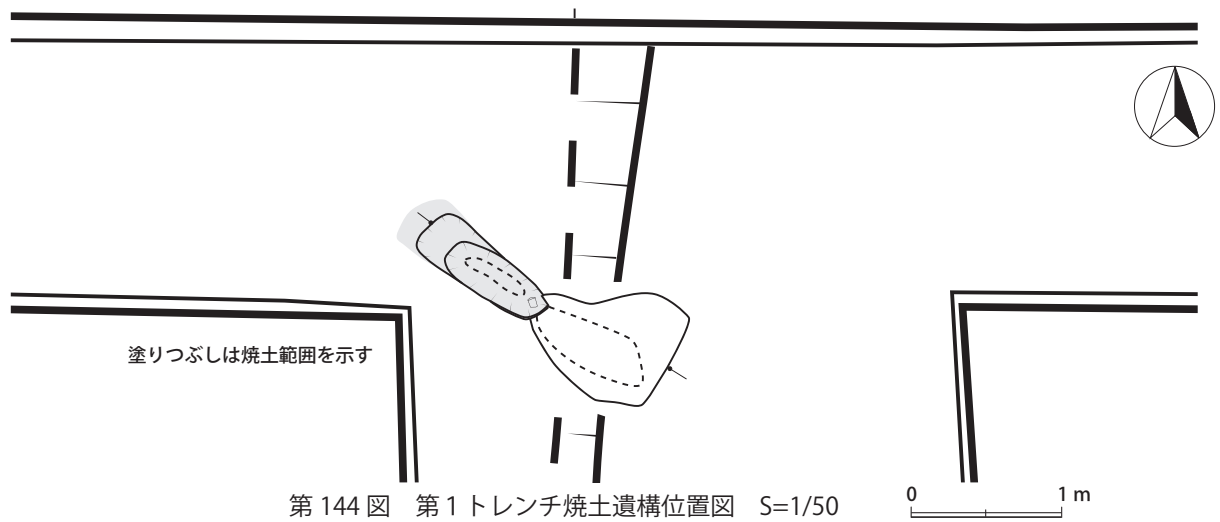
第 142 図 第 1 トレンチ土坑第 36 層の遺物出土状況 S=1/30

出土遺物 S=1/6

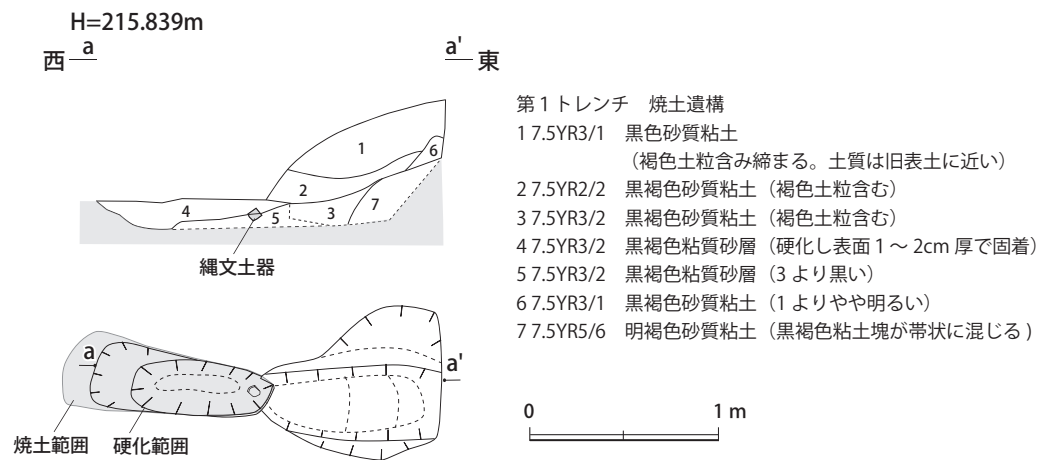


第 143 図 第 1 トレンチ土坑の遺物出土状況 S=1/30

出土遺物 S=1/6



第144図 第1トレンチ焼土遺構位置図 S=1/50



第145図 第1トレンチ焼土遺構平面図・断面図 S=1/40

第1トレンチ 焼土遺構

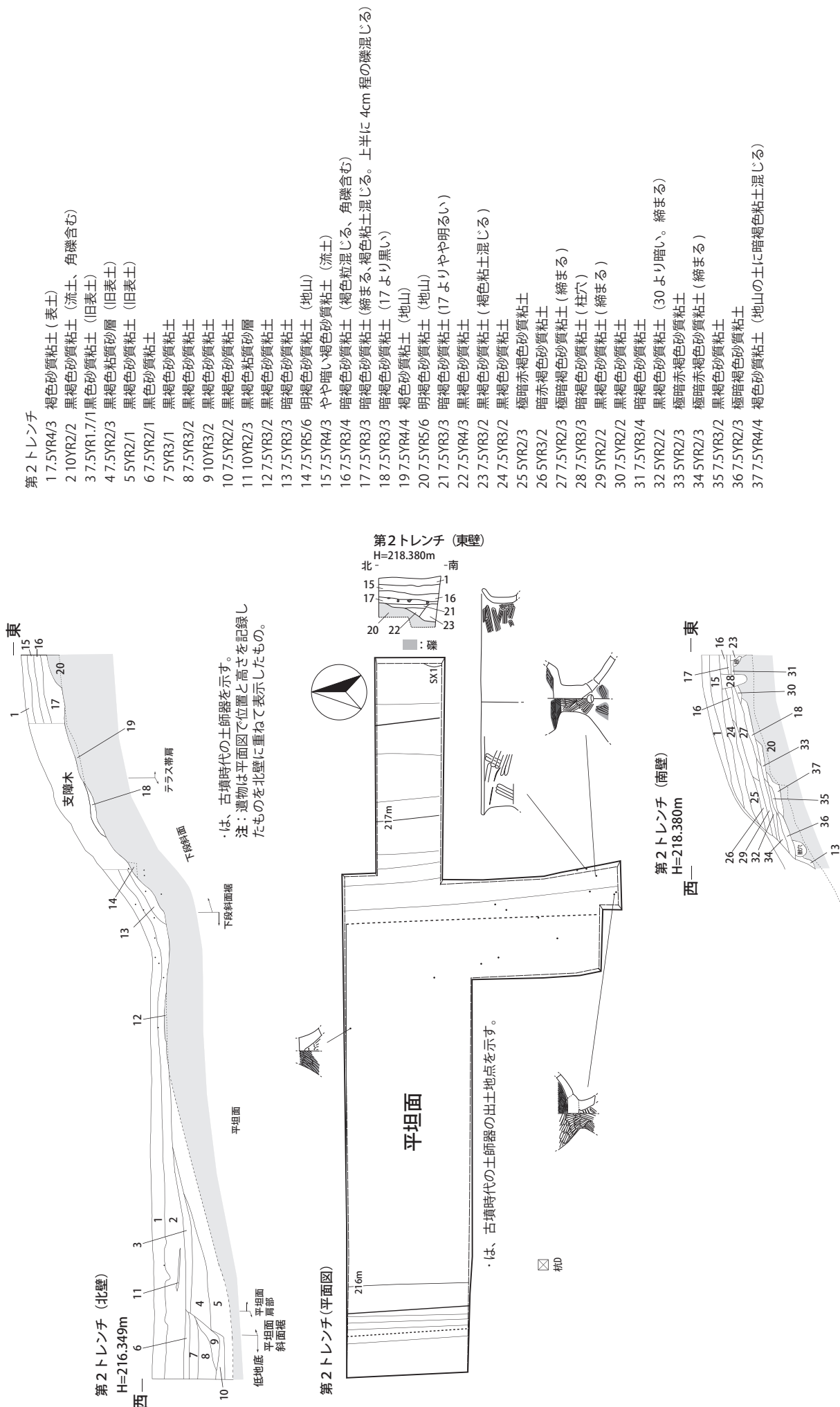
- 1 7.5YR3/1 黒色砂質粘土  
(褐色土粒含み締まる。土質は旧表土に近い)
- 2 7.5YR2/2 黒褐色砂質粘土 (褐色土粒含む)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色砂質粘土 (褐色土粒含む)
- 4 7.5YR3/2 黒褐色粘質砂層 (硬化し表面1~2cm厚で固着)
- 5 7.5YR3/2 黒褐色粘質砂層 (3より黒い)
- 6 7.5YR3/1 黒褐色砂質粘土 (1よりやや明るい)
- 7 7.5YR5/6 明褐色砂質粘土 (黒褐色粘土塊が帯状に混じる)

### 第3節 第2トレンチ

丘陵北半部の中央付近において、第1トレンチと同様に地形の成因を把握する目的で設定した。下段斜面から平地へ至る地形の変化を見るため、テラス帯から平地を範囲とする東西方向のトレンチ（東西20m、南北2m）を設け、続いて山裾に沿う南北方向のトレンチ（東西2m、南北2.5m）を組み合わせた調査範囲とした。東西方向のトレンチは西端から東へ7.85mの地点で支障木を避けるため横幅を南方向へ0.5m、北方向へ0.25m狭めた。さらに支障木除去に時間がとられ、最終的に調査範囲をテラス帯肩部～平坦面斜面裾（下端）付近までの東西11mの範囲に狭めて調査を実施した。調査面積は約23㎡である。

地形は、概ね第1トレンチと同一の状況が見られたが、木の根の攪乱により下段斜面からテラス肩部の土層断面の調査は南壁を中心に行った。下段斜面では、階段状に削られた赤褐色の地山上に薄い土層が積み重なっている状況が確認された。第28層はピットである。第24層上面～流土層下で表土が安定していた時期があったと思われる。

削平面に平行して丁寧に土層が積み重なる状況から斜面を構成する薄層は盛土の可能性を考慮する必要がある。斜面裾から平坦面にかけて地山直上や流土層から土器が十数点出土しているにも関わらず、これらの薄層には遺物が含まれないことから単なる流土ではない可能性が考えられる。表土を除いたテラス面の標高は第1トレンチのテラスの標高と概ね一致する。平坦面の幅は第1トレンチよりやや広く約5mである。低地は第1トレンチの状況と同様に平坦面の外縁で旧表土を掘り込むことが確認された。



第146図 第2トレンチ平面図・断面図・遺物出土状況 S=1/80 0 2m

遺構は、ピットその他、テラス帯（東壁）において地山に掘り込まれた落ち込み（SX1）を確認した。SX1の上層の第17層上半～第16層に礫が散在する状況がみられた。他の層には礫が混じらないことから、時期は不明だが自然に流れ込んだものでない可能性もある。

遺物は、平坦面肩部に残存する旧表土層から縄文土器片が出土した。平坦面上では表土から縄文土器片と高坏片が出土した。下段斜面裾部の地山直上からは彩色の高坏1点と、坏部内側のみ黒色の高坏1点出土した。そのやや上方から甕の口縁部が出土した。下段斜面からは遺物は出土しなかった。

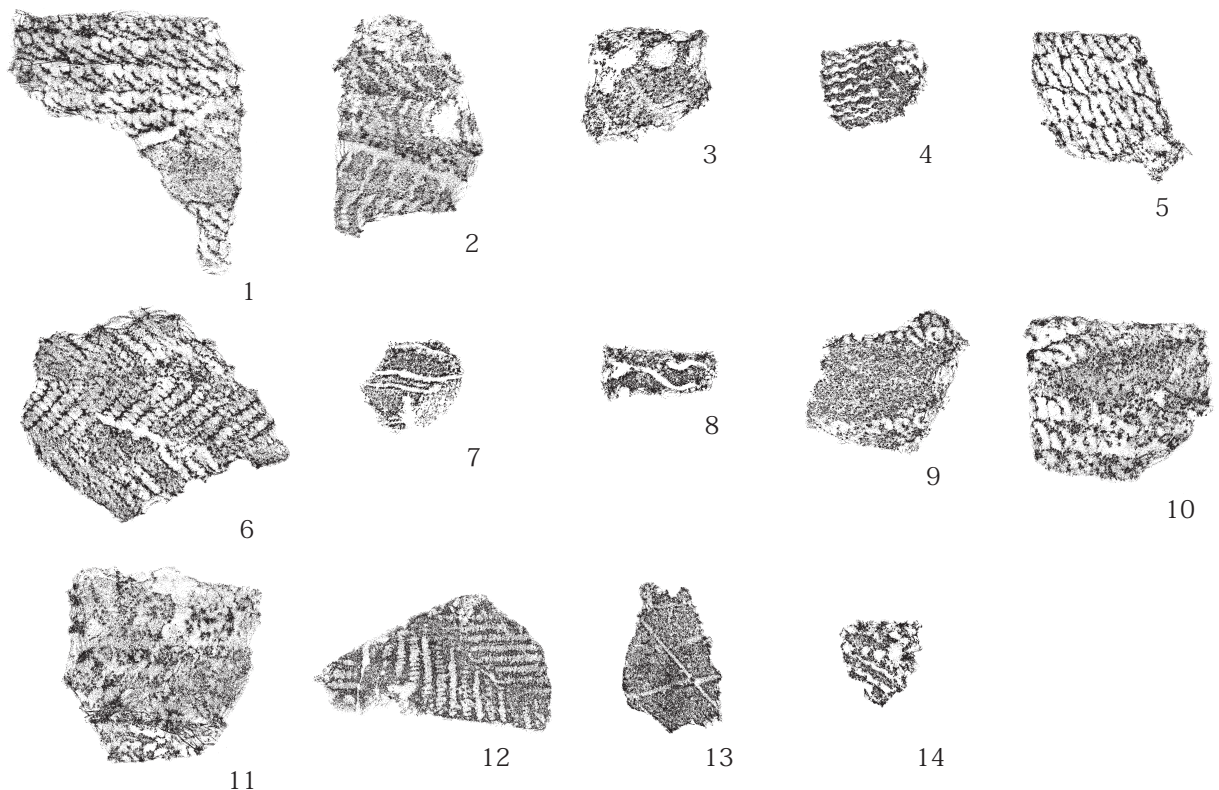
#### 第4節 縄文時代の遺物（第147図）

縄文土器片は、第1トレンチで計120点、第2トレンチで計5点出土した。小片が多く、磨滅しており図化可能な遺物は少ない。石器は未完成品や破片、くぼみ石等が少量出土した。長岡南森遺跡は、従来は縄文中期の遺跡とされているが、縄文中期の遺物は出土しなかった。

第1トレンチでは、旧表土層の第3～6層、低地下層の第15、29層、低地中層の第13、19～22、24層、平坦面裾部（低地下端）の第27層から出土した。

地山上の旧表土層では、第6層からは沈線文土器片（7）、第5層からは羽状縄文土器片（6）、第4層からは貝殻腹線文（2,4）や指頭押圧文（3）の土器片、第3層からはループ文に擦り消し縄文のある土器片（1）が出土した。主に縄文時代前期前半頃の時期と考えられる。

第2トレンチでは、表土（第1層）、旧表土層（第4層）、平坦面斜面裾（第13層）から土器片が出土した。いずれも小片であるが、概ね第1トレンチと同様に縄文時代前期頃のものと思われる。



<出土層：第1トレンチ>

1:第3層 2～5:第4層 6:第5層 7:第6層 8～11:第21層  
12:第22層 13:第24層 14:第27層

第147図 長岡南森遺跡出土遺物（縄文土器） S=1/2



## 第5節 古墳時代の遺物

古墳時代の土師器は、第1トレンチで176点余、第2トレンチで11点余出土した。未だ整理中であるが、図化が可能な遺物は限られる。

### (1) 第1トレンチ出土遺物 (第148図)

低地部の第2層と低地堆積層の中層にあたる第13、14、19～22、24層から多くの土器片が出土した。壺または甕の底部は5個体分が出土した。下段斜面については表土や地山上から土器片が出土した。テラス帯では土坑から土器片が多く出土した。

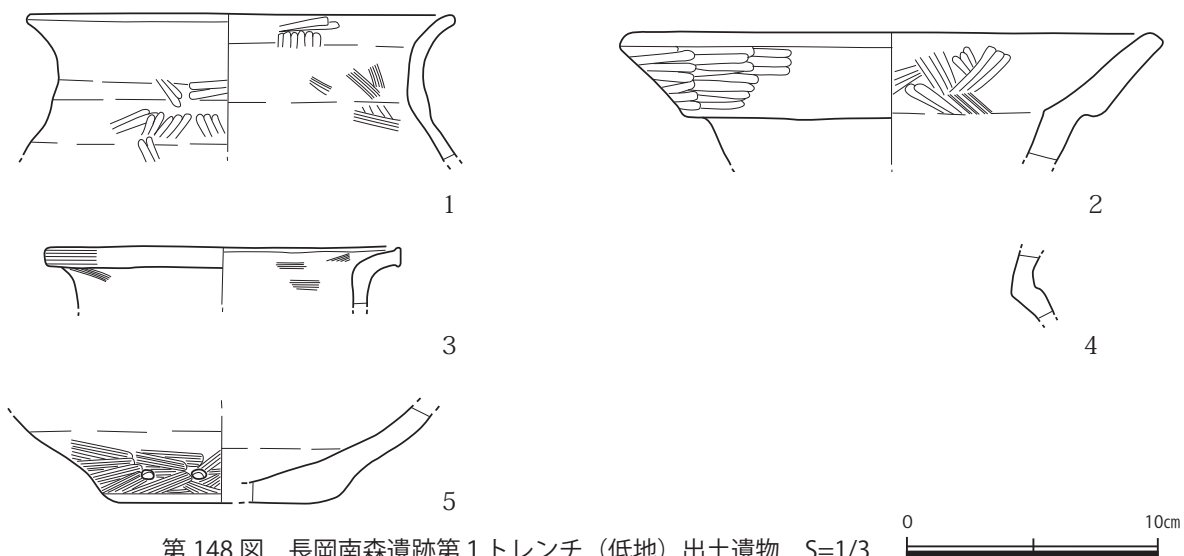
1～5は、低地堆積層の中層(第13・22層)から出土した。1は甕の口縁部である。2は二重口縁壺の口縁部で焼きが硬く、厚みがあり、色調は赤橙色を帯びる。3は小型の甕とみられる。4は頸部片である。5は刺突文のある壺の底部である。

### (2) 第1トレンチの土坑(SK1)等出土遺物 (第149図)

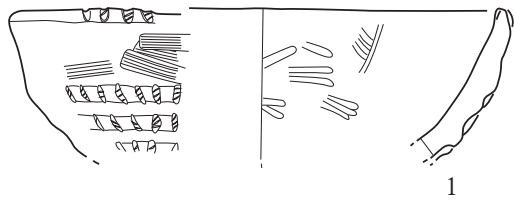
土坑上に位置する第36層からは、器台、壺、甕等が出土した。壺や甕の底部は5個体分が出土した。1は口唇部には刻目、口縁部下半には刻目を施した三段の隆帯を有する。壺と思われる。文様間及び胴部は無紋で、刻目は木製工具の木口押圧である。口縁部は厚みがありやや内彎する。弥生時代の十王台式の影響を考察することができるが、福島県の屋敷式や桜町式の影響も考える必要があるだろう。類例には稲荷森古墳の底部穿孔土器があり、土坑内からも磨滅して図化できないものの同形式の別個体の破片が1点出土している。2は甕の口縁部である。3は壺(口縁部)である。

土坑内からは、二重口縁壺、器台または高坏、台付甕、甕、有段口縁土器、赤色加工土器、棒状浮や円形浮文のある土器、刻目を施した三段の隆帯を有する口縁部片、小型の円盤状土製品等が出土した。壺または甕の底部は9個体分が出土した。

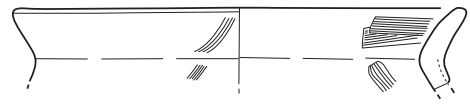
4は有段口縁壺で口縁部が内彎する。5は二重口縁壺の口唇部である。6は頸部に突帯のある大型の二重口縁壺で頸部上端の直径は18cmを測る。7～9は壺の底部である。10は甕である。11は台付甕の台部である。裏面に貫通しない穴が施されている。12、13は器台または高坏とみられる。



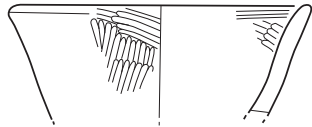




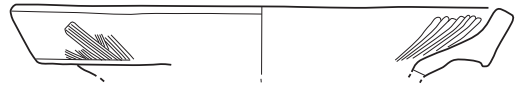
1



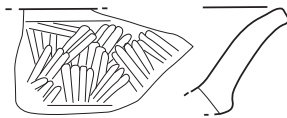
2



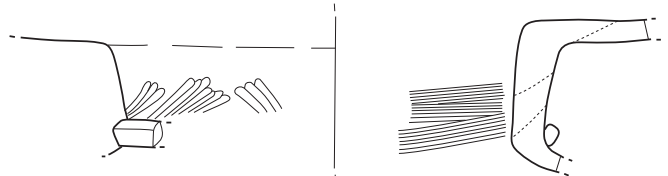
3



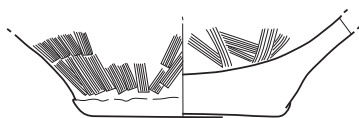
4



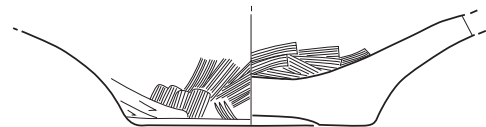
5



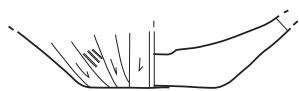
6



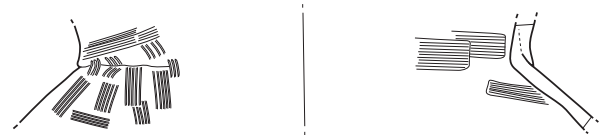
7



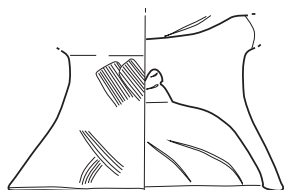
8



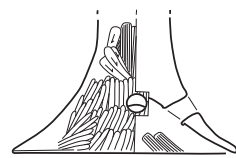
9



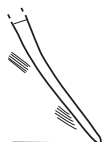
10



11



12



13

1 ~ 3 : 第36層  
4 ~ 13 : 土坑 (SK1)

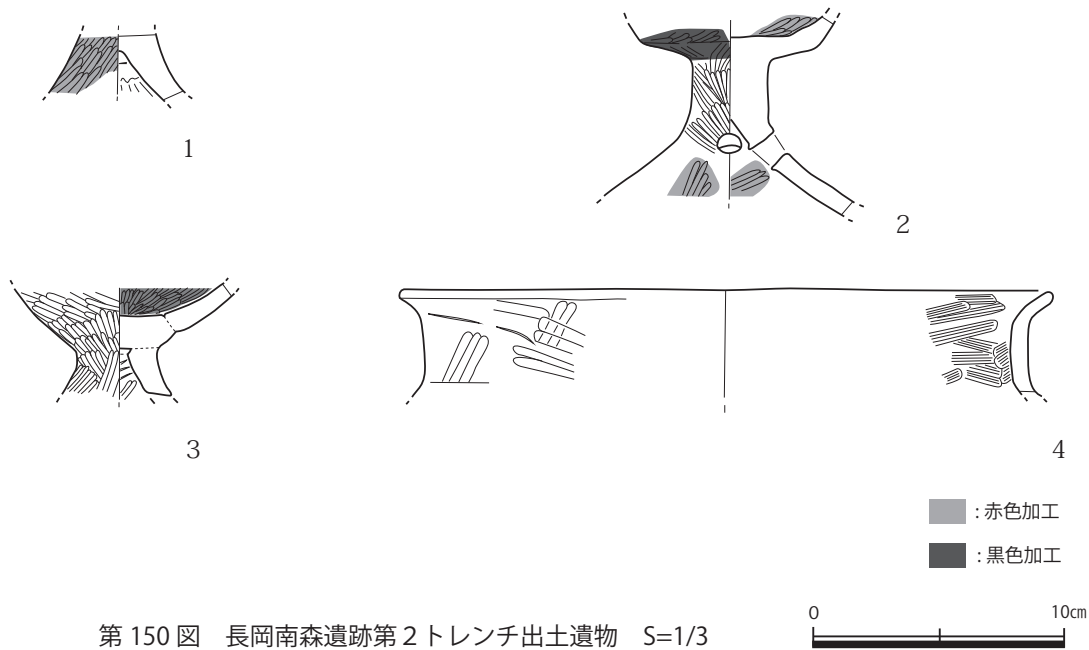


第149図 長岡南森遺跡第1トレンチ(土坑等)出土遺物 S=1/3

### (3) 第2トレンチ出土遺物 (第150図)

平坦面の第2層と下段斜面裾の堆積層にあたる第13層から土器が出土した。斜面及びテラス帯からは遺物は出土しなかった。1は第2層出土、2～4は第13層出土である。2は丘陵上から転落したような状態で斜面裾の地山直上から出土した。

1～3は高坏である。1は外面赤彩である。2は内面赤彩で、外面は赤彩をベースに脚部上端から上部が黒色化している。赤彩したものに何らかの理由でススが付いたものとみられる。3は坏部内面を黒色化している。4は甕である。



第150図 長岡南森遺跡第2トレンチ出土遺物 S=1/3

表1 長岡南森遺跡遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (mm)			調整技法		出土地点		備考
				口径	底径	器高	外面	内面	トレンチ	グリット	
148	1	土師器	甕	170	—	—	ミガキ	ミガキ・ハケメ	T1	O10	口縁部
148	2	土師器	二重口縁壺	218	—	—	ミガキ	ミガキ	T1	O10	二重口縁壺口縁部
148	3	土師器	甕	142	—	—	ハケメ・ナデ	ハケメ	T1	O10	口縁部、口唇部つまみ出し
148	4	土師器	壺(?)	—	—	—	—	—	T1	O10	頸部
148	5	土師器	壺	—	90	—	ハケメ	—	T1	O10	底部、刺突文?
149	1	土師器	壺	202	—	—	ハケメ	ナデ	T1	M10	口縁部
149	2	土師器	有段口縁壺	202	—	—	ハケメ	ナデ	T1	M10	関東系譜?
149	3	土師器	二重口縁壺	—	—	—	ナデ	—	T1	M10	口縁部
149	4	土師器	二重口縁壺	—	—	—	ナデ	ハケメ	T1	M10	二重口縁土器の頸部
149	5	土師器	壺	—	80	—	ハケメ	ハケメ	T1	M10	底部
149	6	土師器	壺	—	98	—	ハケメ・ケズリ	ハケメ	T1	M10	底部
149	7	土師器	壺	—	56	—	ハケメ・ケズリ	—	T1	M10	底部
149	8	土師器	甕	182	—	—	ハケメ	ハケメ	T1	M10	口縁部
149	9	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	ハケメ	T1	M10	頸部下端～肩部
149	10	土師器	台付甕	—	110	—	ハケメ	—	T1	M10	台部
149	11	土師器	壺	110	—	—	ナデ	ナデ	T1	M10	口唇部
149	12	土師器	器台	—	90	—	ハケメ・ナデ	ハケメ	T1	M10	脚部
149	13	土師器	器台	—	—	—	—	ハケメ	T1	M10	脚部
150	1	土師器	高坏	—	—	—	ナデ	—	T2	N8	脚部、彩色
150	2	土師器	高坏	—	—	—	ナデ	ナデ	T2	N8	彩色
150	3	土師器	甕	—	—	—	ナデ	ナデ	T2	N8	坏部内側彩色
150	4	土師器	高坏	260	—	—	ナデ	ハケメ	T2	N8	口縁部

## 第4章 理化学分析

### 1 放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

土坑 (SK1) 覆土の中層上部 (第 46 層) 及び最下層 (第 51 層) から採取した炭化物、第 52 層出土の器台脚部に入り込んでいた棒状炭化物、底面出土 (第 51 層) の甕の外面から採取した炭化物の計 4 点について放射性炭素年代測定を 2 回に分けて行った。

## 南陽市教育委員会試料 3 点の年代測定

2018 年 6 月 29 日

山形大学高感度加速器質量分析センター

### 1. はじめに

南陽市教育委員会よりご依頼頂いた試料 3 点 (写真 1) に対して、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と測定方法

表 1 に試料情報を示す。測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化を行った。その後、加速器質量分析装置 (NEC 製 1.5SDH) を用いて放射性炭素濃度を測定した。

### 3. 結果

表 2 に同位体分別効果の補正に用いた炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、放射性炭素濃度から同位体分別効果の補正を行い算出した放射性炭素年代、慣用に従って年代値と誤差の下一桁を丸めた放射性炭素年代、較正曲線データを使用して放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。今後較正曲線データが更新された際は、下一桁を丸めていない放射性炭素年代 (表 2 の左から 4 列目) を用いて暦年較正を行うことができる。各試料の暦年較正結果については、本報告書に添付した。

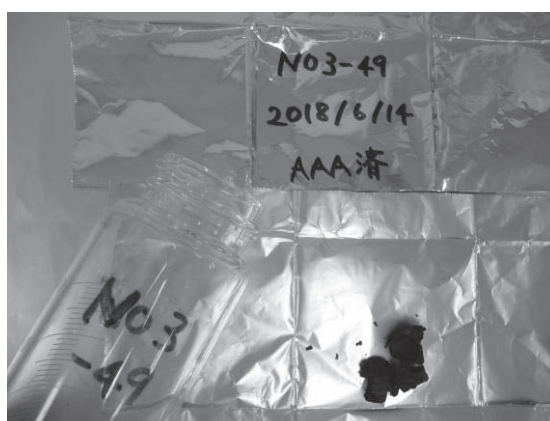
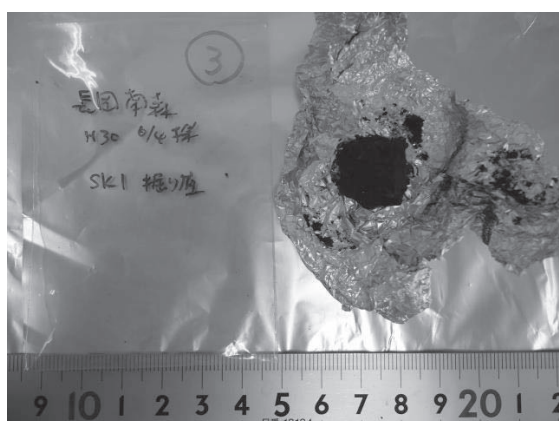
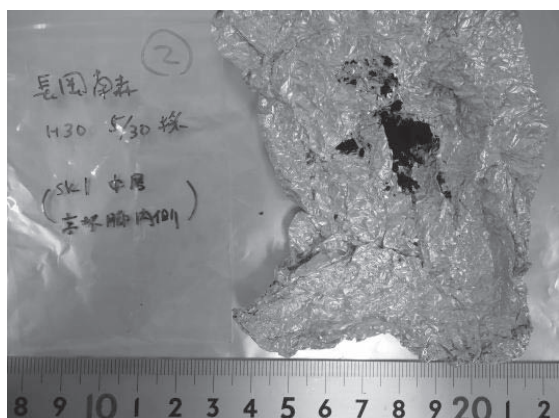
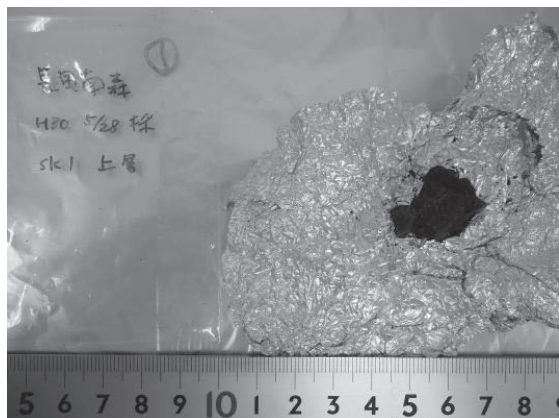


写真1. 試料情報

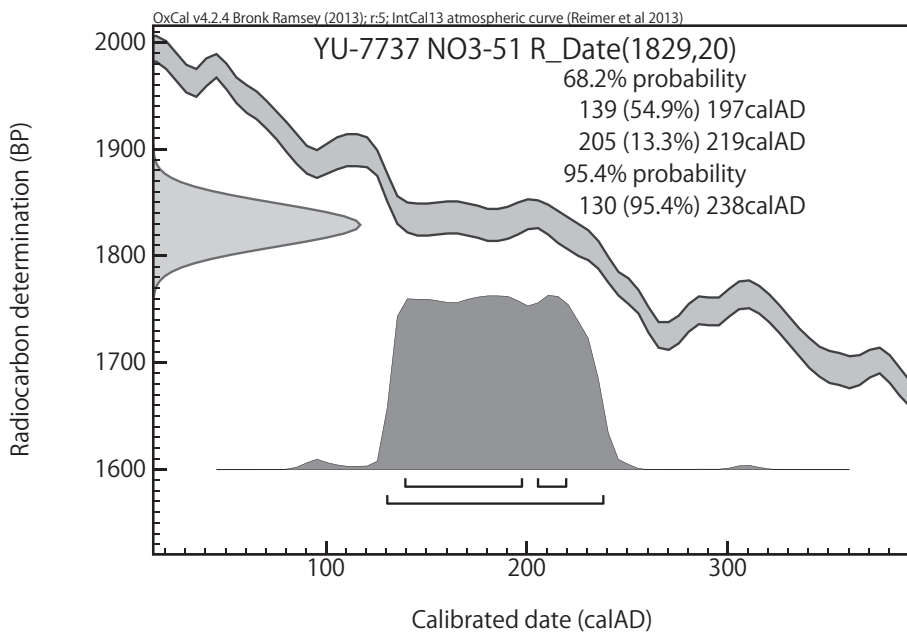
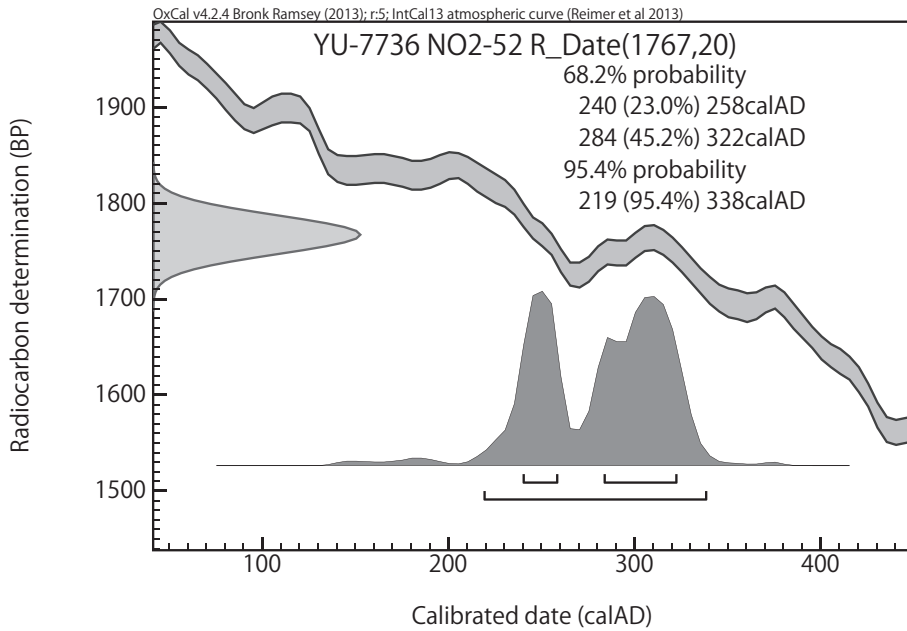
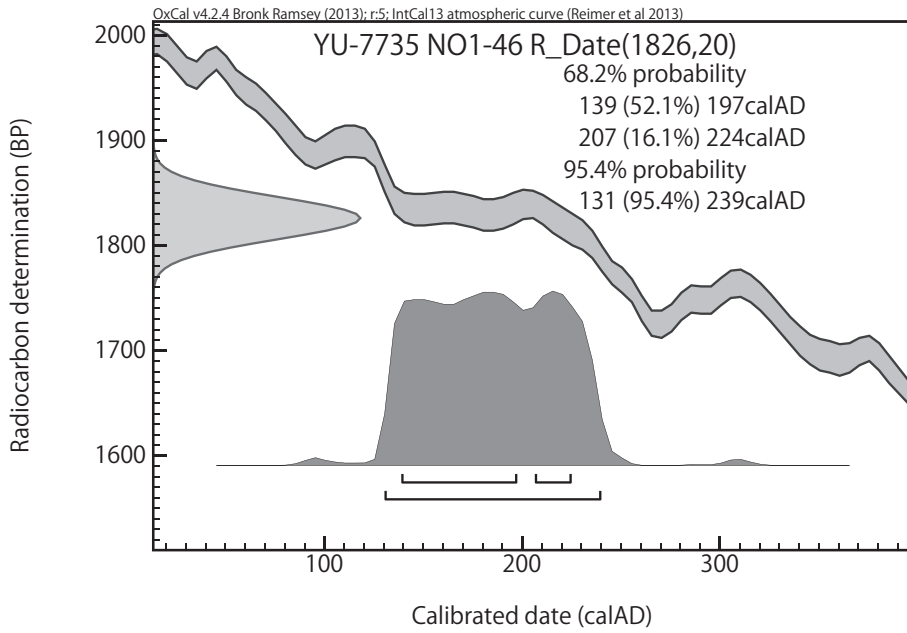
※試料名NO2-48はNO2-52へ修正  
NO3-49はNO3-51へ修正

表1. 試料情報

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-7735	NO1-46	南陽市教育委員会試料 2018/06/12受取 資料NO1 長岡南森遺跡 トレンチ1 SK1 上層 (第46層) 採取年月日 平成30年5月28日 炭化物 NO1-46	前処理後の試料34.800mgから 2.222mg使用	AAA処理 1M HCl 80度1時間 1M NaOH 80度1時間 (3回) 1M HCl 80度1時間
YU-7736	NO2-52	南陽市教育委員会試料 2018/06/12受取 資料NO2 長岡南森遺跡 トレンチ1 SK1 中層 (第52層)、器台内木材 採取年月日 平成30年5月30日 炭化物 NO2-52	前処理後の試料32.993mgから 2.252mg使用	AAA処理 1M HCl 80度1時間 0.1M NaOH 80度1時間 (3回) 1M HCl 80度1時間
YU-7737	NO3-51	南陽市教育委員会試料 2018/06/12受取 資料NO3 長岡南森遺跡 トレンチ1 SK1 堀底 (最下層、第51層) 採取年月日 平成30年6月4日 炭化物 NO3-51	前処理後の試料159.801mgから 2.242mg使用	AAA処理 1M HCl 80度1時間 1M NaOH 80度1時間 (3回) 1M HCl 80度1時間

表2. 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	試料名	d <sup>13</sup> C (‰)	放射性炭素年代 (yrBP ± 1σ)	下1桁を丸めた 放射性炭素年代 (yrBP ± 1σ)	放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
YU-7735	NO1-46	-25.75 ± 0.28	1826 ± 20	1825 ± 20	139AD (52.1%) 197AD 207AD (16.1%) 224AD	131AD (95.4%) 239AD
YU-7736	NO2-52	-25.45 ± 0.23	1767 ± 20	1765 ± 20	240AD (23.0%) 258AD 284AD (45.2%) 322AD	219AD (95.4%) 338AD
YU-7737	NO3-51	-25.77 ± 0.26	1829 ± 20	1830 ± 20	139AD (54.9%) 197AD 205AD (13.3%) 219AD	130AD (95.4%) 238AD



# 南陽市教育委員会様試料 1 点の年代測定

2018 年 10 月 18 日

山形大学高感度加速器質量分析センター

## 1. はじめに

南陽市教育委員会よりご依頼頂いた試料 1 点 (写真 1) に対して、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

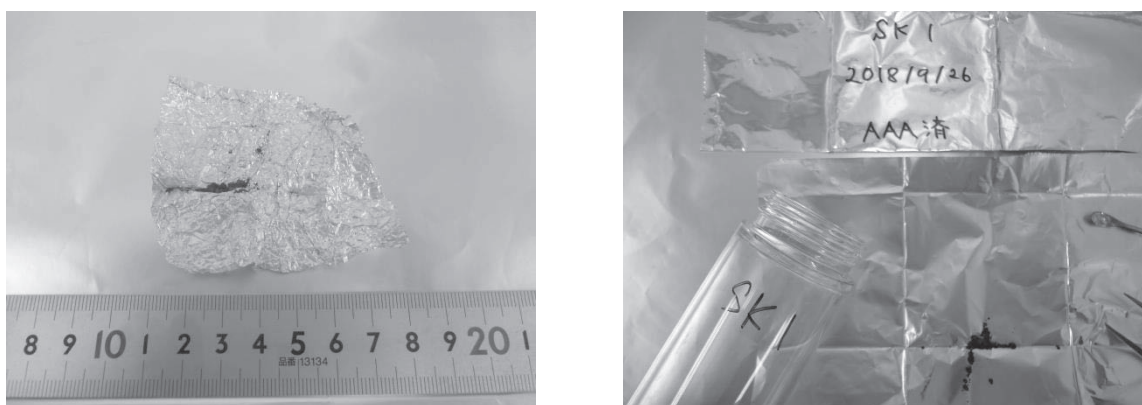


写真 1. 試料情報

## 2. 試料と測定方法

表 1 に試料情報を示す。測定試料は、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化を行った。その後、加速器質量分析装置 (NEC 製 1.5SDH) を用いて放射性炭素濃度を測定した。

## 3. 結果

表 2 に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行った放射性炭素年代、較正曲線データを使用して放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲、慣用に従って年代値と誤差の下一桁を丸めた放射性炭素年代を示す。今後較正曲線データが更新された際は、下一桁を丸めていない放射性炭素年代 (表 2 の左から 4 列目) を用いて暦年較正を行うことができる。各試料の暦年較正結果については、本報告書に添付した。

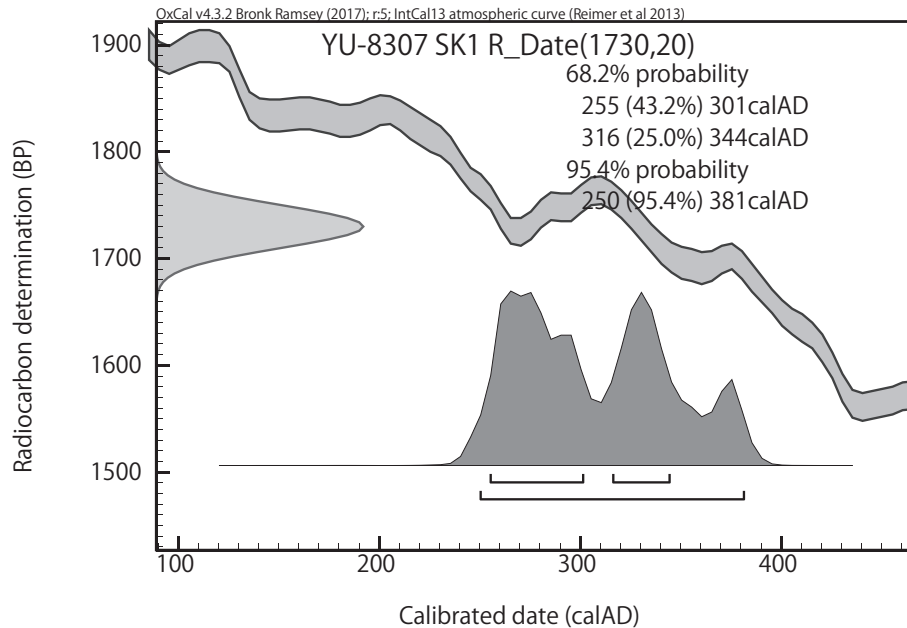
表1. 試料情報

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-8307	SK1 土器外面	南陽市教育委員会 社会教育課 埋蔵文化財係 試料 2018/09/14受取 SK1 炭化物試料 平成30年度長岡南森遺跡調査 トレンチ1 SK1内出土土器 表面付着物試料 SK1	前処理後の試料 16.155mgから2.283mg使用	AAA処理 1M HCl 80度1時間 1M NaOH 80度1時間 (3回) 1M HCl 80度1時間

表2. 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	試料名	d <sup>13</sup> C (‰)	放射性炭素年代 (yrBP ± 1σ)	放射性炭素年代を暦年代に較正した年代範囲		下1桁を丸めた 放射性炭素年代 (yrBP ± 1σ)
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
YU-8307	SK1 土器外面	-24.07 ± 0.19	1730 ± 20	255AD (43.2%) 301AD 316AD (25.0%) 344AD	250AD (95.4%) 381AD	1730 ± 20





==== 年代測定の方法 ====

放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 $^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal 3.2<sup>1)</sup> (較正曲線データ: IntCal13<sup>2)</sup>) を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に  $2\sigma$  暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

参考文献

- 1) C Bronk Ramsey, (2017), Methods for Summarizing Radiocarbon Datasets. Radiocarbon, 59 (2), 1809-1833.
- 2) Paula J Reimer, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Paul G Blackwell, Christopher Bronk Ramsey, Caitlin E Buck, Hai Cheng, R Lawrence Edwards, Michael Friedrich, Pieter M Grootes, Thomas P Guilderson, Hafliði Hafliðason, Irka Hajdas, Christine Hatté, Timothy J Heaton, Dirk L Hoffmann, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, K Felix Kaiser, Bernd Kromer, Sturt W Manning, Mu Niu, Ron W Reimer, David A Richards, E Marian Scott, John R Southon, Richard A Staff, Christian S M Turney, Johannes van der Plicht, (2013), IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0 –50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

## 第5章 調査結果

### 第1節 今次調査地の地形について

#### (1) 丘陵の現況地形及び成因の把握（切土・盛土等の有無の確認）について

- ・下段斜面～山裾は、自然丘陵の原地盤を人工的に成形した地形であることを確認した。
- ・下段斜面の地形は、切り土法面が基になっていることを確認した。
- ・現況の山裾は、地山を削って整地した人工的な平坦面上に位置することを確認した。
- ・平坦面外縁は、自然丘陵の原地盤を削って小段を成していることを確認した。
- ・平坦面の外側に人工的な窪地（低地）があることを確認した。
- ・丘陵北半部西側では山裾に沿って平坦面及び低地が廻っている可能性がある。

#### (2) 丘陵北半部西斜面の半ばにあるテラス帯の形状・構造の把握について

- ・テラス帯は自然丘陵の原地盤を地山まで削った地形が基になっていることを確認した。
- ・テラス帯肩部から下段斜面にかけて一部盛土がある可能性がある。

#### (3) 墳端やくびれ部に相当する地形の有無について

- ・平坦面斜面裾あるいは下段斜面裾は古墳であれば墳端に相当する人工的な下端である。
- ・くびれ部に相当する地形は第1トレンチ内では確認されなかった。

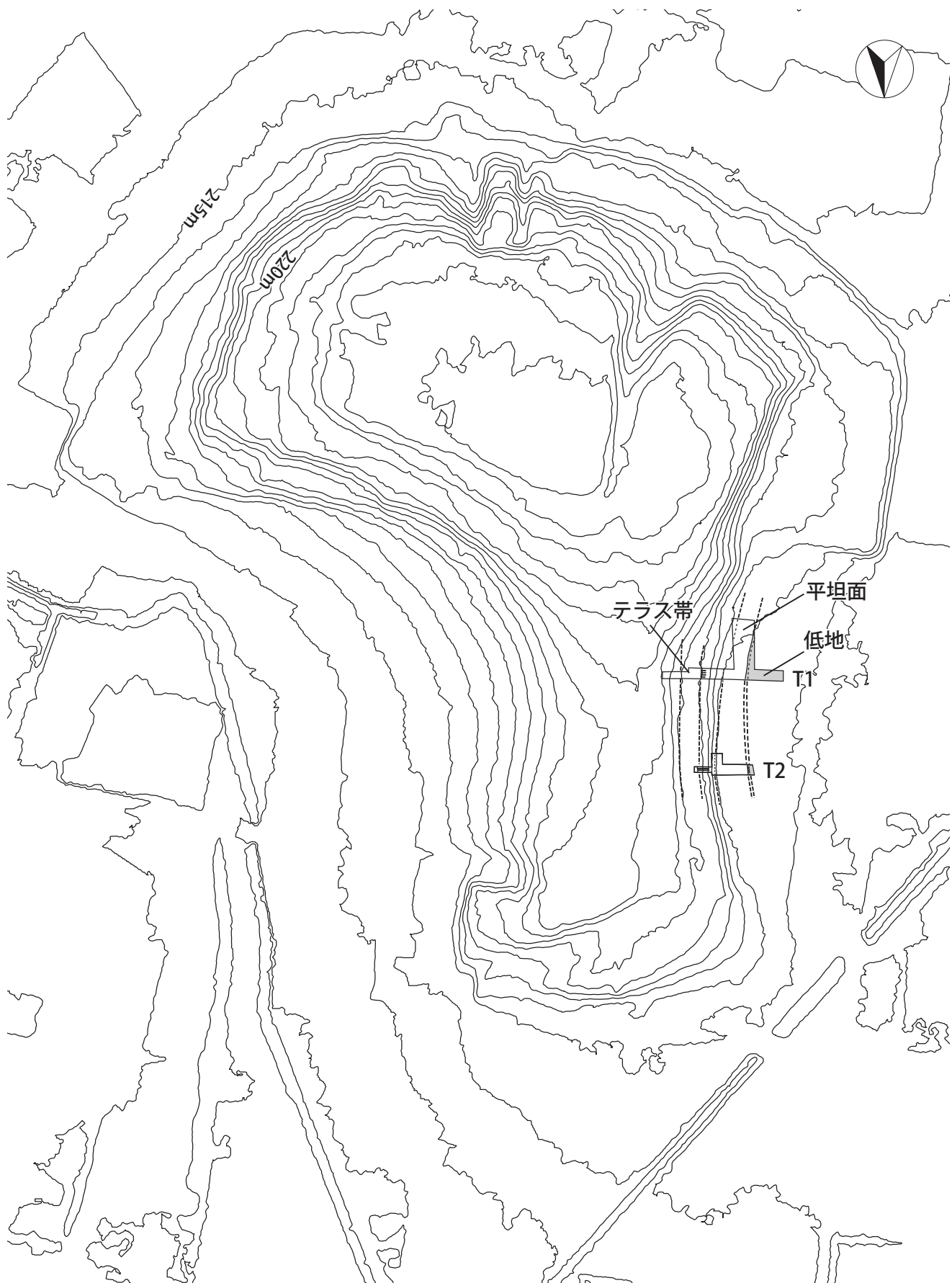
### 第2節 遺構・遺物について

#### (1) 古墳に伴う外表施設等の有無について

- ・明確な葺石は確認されなかった。米沢盆地では葺石の存在が確実視される古墳はなく、テラス帯等で検出された礫の性格や状況の把握は今後の課題である。
- ・段築や整地帯等と比較しうる平坦面が確認された。
- ・土取り跡あるいは周溝と比較しうる低地が確認され、平坦面外周を廻る可能性がある。

#### (2) 第1トレンチの大型土坑について

- ・遺構は地山を掘り込んで造られ、横幅（東西）は約3m、縦幅（南北）は不明である。底面の横幅は約0.7mである。
- ・覆土は人為的に埋め戻されたと考えられる。
- ・遺構上面を無遺物層（第40層、第41層）が覆うことを確認した。無遺物層は土坑を削平した後に盛土されている。第36層は土坑覆土の切土の一塊を無遺物層上に積んだとみられ、その土器は土坑内の土器に近く、土器の表面が磨滅していないことから地表面に長期に晒されることなく埋まるとみられる。
- ・遺物は層毎に粗密があり尾根側に土器が多い。中～最下層の覆土には炭が多く混じる。
- ・底面の一部の範囲に焼土状のにぶい赤色の土が薄く堆積していた。
- ・底面に礫石が疎らに置かれている状況を確認した。
- ・二重口縁壺、器台、甕等、多種多様な土器が出土したが完形品は無く全て破片である。
- ・底面では逆位の二重口縁壺頸部上に逆位の壺の底部が重なって出土し、同様に台付甕の台部の底に貫通しない穴を施したものが逆位で出土する状況が見られた。
- ・炭素年代測定（2 $\sigma$ 暦年代範囲）では、上～中層の第46層及び最下層の第51層の炭化物は131AD（95.4%）239AD及び130AD（95.4%）238AD、第52層の器台脚部内出土の棒状炭化物は219AD（95.4%）338AD、底面出土の甕外面の炭化物は250AD（95.4%）381ADであった。



第 151 図 検出された造成地形 S=1/1000

0 20m

### (3) 遺物について

- ・赤色加工の土器、高坏、器台等の祭祀関連土器が多い傾向にある。
- ・低地中層の古墳時代の遺物は土坑出土遺物より時代が下るとみられる。
- ・刻目を施した三段の隆帯を有する土器が出土した。稲荷森古墳出土の底部穿孔壺と同じ土器型式とみられ、稲荷森古墳出土土器の部位が口縁部であることが明らかになった。

#### 第3節 低地、平坦面、斜面の造成に関する検討

- ・低地の堀底や下端からは縄文土器片のみ出土し、低地の中層より下位の層では古墳時代の遺物すら出土しない状況から、中層に古墳時代の遺物が流れ込んだ時期以降に低地が攪拌されたことがないと考えられる。
- ・低地が埋没する過程で安定していた時期が複数あるとみられる。低地造成から一定の期間を経てから土器が流れ込むか、廃棄される状況が生じたと考えられる。
- ・低地上端や下端のラインと下段斜面裾が平行する傾向にあることから、平坦面外縁と下段斜面裾の位置には関連性があると考えられる。
- ・平坦面で検出された旧表土層及び地山の自然傾斜角度から、下段斜面の地山は水平距離で概ね1mほど削りこまれていると推測される。
- ・下段斜面に旧表土が存在しないことから第1トレンチの第31、32、34a層は地山整地後のものと判断される。堅く締まる土質等からこれらの層については盛土の可能性について検討が必要である。
- ・第2トレンチの下段斜面では階段状に削られた地山上に薄層が複数積み重なっている状況が確認された。盛土の可能性があると考えられる。

#### 第4節 人工地形の造成原因の検討

- ・地権者によれば、明治以降に丘陵北半部の西斜面では造成工事を行った記録はない。
- ・南森丘陵南半部には館跡が確認される。「南の森は寛永年間に切支丹信者が斬首された処であると云う。」(長井,1967,p665)とされ、享保の絵図(享保2年)では森の部分に「神明」、「八幡」と現存する2つの神社名や鳥居等が描かれていることから、享保2年には館は既に存在していないと考えられ、館の存在時期はこの時期よりも前と思われる。
- ・南森丘陵と古墳を比較するとテラス帯は段築、平坦面は段築や整地帯、低地は土取り跡や周溝に相当する人工地形である。地山を削り出して成形する方法や地山を階段状に成形する方法は古墳の築造でも見られる工法である。
- ・中世の館跡と比較するとテラス帯は帯曲輪、平坦面は犬走り、周囲の低地は堀に相当する地形である。テラス帯と帯曲輪は形状的に類似性が高い。犬走りは堀と法面の間に設けられるテラスで堀と一体的な構築物である。遺物の出土状況から中世に館堀として低地が掘られたとは考えにくいことから、平坦面は犬走りと言うよりも、何らかの理由で自然斜面を削った際に生じた整地面と思われる。中世城館であれば切岸の造成、近世であれば農地拡大のために山裾を削ったなどの理由が考えられる。それらの場合、平坦面外縁(低地上端・下端)と下段斜面裾が概ね平行している理由は不明である。
- ・平坦面は古道と見ることもできるが、街道から離れており、この地点で大規模な造成を行う理由は乏しい。

## 第6章 まとめと課題

今次調査は、遺跡の性格把握と丘陵の地形成因の把握を目的として実施した。調査範囲一帯に限定すれば、遺跡の性格としては縄文時代と古墳時代を中心とする遺跡であること、古墳かどうかに関わらず古墳時代の祭祀あるいは墓域に関連する可能性のある遺跡であること、地形成因としては人工的に形成された地形が存在することが確認された。

今次調査で、本地域における古墳時代の重要な遺跡のひとつと確認されたことから、次期調査からは調査委員会を設置し、その指導の下に遺跡の実態を明らかにすべく調査を行う予定である。

### (1) 地形について

南森丘陵の北半部西側では人工的に丘陵を削り、斜面、平坦面、低地を造り出しており、それらが現況地形の下地になっていることが判明した。また、低地の造成時期については、遺物の出土状況から低地中層の古墳時代の遺物の時期よりも前の可能性も考えられる。盛土については検討が必要であるが、大型土坑は上部が削られ盛土されているとみられる。

地形に関しては、丘陵の他の地点でも同様の人工的な造成地形が確認されるかどうか、明確な盛土が確認されるかどうか、くびれ部が確認されるかが今後の課題である。

地形の成因については、確定するには調査がまだ限定的で検討も不十分あることから現段階では様々な可能性を考えておく必要がある。

### (2) 出土遺物等について

出土遺物は、縄文時代と古墳時代の遺物が主である。古代の遺物は数点で主に表土や現代の溝跡からの出土である。中世や近世の遺物は表土から各1点の出土である。

古墳時代の遺物は、祭祀に関連する遺物が多い傾向にあるが、土坑（SK1）が存在するため祭祀関連の遺物が多い可能性もある。土坑出土の遺物と低地中層出土の遺物では時期差があるとみられることから、土坑の影響を切り分けながら遺物の検討を進める必要がある。

低地の遺物出土状況を見ると、低地中層に古墳時代の遺物が集中しており、低地が半ばまで埋没し安定したとみられる時期に遺物が混入し始めたとみられる。低地の掘削から土器埋没までの間に一定の時間の経過があると言える。このことから、土坑（祭祀）→低地造成→低地の埋没が進む→埋没途中のある時期に古墳時代の遺物が混入する、という大まかな流れが推測される。

低地出土遺物については、丘陵上に立地する集落、墓域、古墳等何らかの遺跡からの流れ込み、大型古墳の墳丘上からの流れ込み、低地での古墳時代の何らかの活動によるもの等、様々な可能性を検討しなければならない。遺物混入の背景となる当該期の住居跡や墓域等が丘陵上で確認されるのか、または今次調査では確認されていないが、低地中層の時期に低地で土器を使用した何らかの遺構が確認されるのかが今後の課題と考えられる。

米沢盆地の古墳では埴輪の出土例が無いが、今後の調査に気をつけていきたい。

### (3) 大型土坑（SK1）について

土坑は、割った土器片を人為的に埋めたものと思われ、祭祀に関連する遺構と考えられる。底面の一部ににぶい赤色の土が薄く堆積しており、礫が散在する底面からは二重口縁壺の頸部に壺の底部を逆さに重ねた状態で土器が出土していることなどから、壺底部を転用枕にした埋葬施設という可能性もあり検討を要するが、副葬品は検出されていない。今後、土坑の範囲を把握する必要がある。また、埋葬施設であった場合は平面プランや埋葬状況の把握が

課題として残るが、現状保存との兼ね合いからすれば、追加調査の必要性は十分な検討を要する。

土坑の年代は炭素年代測定の結果の範疇で捉えられる。第46層と第51層の炭化物は大きな部材或いは心材であったため古木効果により古い結果が出ている可能性がある。主体部であれば木棺に用いられた部材であった可能性も考えられる。同様に器台脚部内に入っていた棒状炭化物の木材も心材であることからやや古い結果が出ている可能性がある。遺構の年代としては、棒状炭化物の219AD(95.4%)338ADと底面出土の甕の外面から採取した炭化物の250AD(95.4%)381ADの重複する年代付近が最も近い可能性が考えられる。

覆土が第40、41層下で切られている状況から、テラス帯造成よりも先に土坑が存在していたと考えられる。その場合、土坑はテラス造成年代の上限を示すことになる。無遺物層の第40、41層はテラス帯を造成した際の盛土と考えられる。第40層上の第36層は含まれる土器から、テラス帯造成によって切られた覆土が改めて積まれた可能性があり、盛土の一つとも思われる。第40、41層上面のレベルが第2トレンチ流土下のレベルと概ね一致することからテラス帯はほぼ同一レベルで平坦になっていたとも推測される。第40層東端が切られていることから、テラス帯半ばから下段斜面上半は削平を受けていると思われる。

#### (4) 稲荷森古墳との関係について

大型土坑から稲荷森古墳の底部穿孔壺と同じ土器形式と思われる刻目を施した三段の隆帯を有する土器(第149図1)が出土した。土坑は、稲荷森古墳との関係やその築造年代を考えるうえでも重要な遺構と言える。

稲荷森古墳築造の上限を高坏の時期としながら、稲荷森古墳の築造年代に様々な意見が表出されてきた主因は、築造の下限を示す資料である底部穿孔壺が当時類例の無い土器であったことである。この土器に関する評価は長い間定まらず、隆帯の位置についても胴部の肩に位置するという見方や口縁部に位置するという見方があったが、今回、長岡南森遺跡の土坑の内外から同種の口縁部が計2点出土し、部位に関する議論についてはようやく決着がついたと言える。今後、長岡南森遺跡で集落遺跡等が確認され、その実態把握が進めば、稲荷森古墳に対する理解も深まっていくと思われる。

新たに資料が増えた当該土器についてもさらなる検討が必要であり、それによって稲荷森古墳の底部穿孔土器の位置づけが明らかになれば、自ずと稲荷森古墳の築造年代に関する議論が深まり、より確度の高い年代観が得られていくものと思われる。

南陽市遺跡分布調査報告書（7）引用・参考文献

- 長井政太郎 1968「赤湯町史」赤湯町史編さん委員会
- 吉野一郎 1984「郡山 矢ノ目館跡遺跡」南陽市教育委員会
- 佐藤鎮雄・佐藤庄一 1987「南陽市史 考古資料編」南陽市市史編さん委員会
- 金関恕・佐原真 1987「弥生文化の研究 弥生土器Ⅱ」雄山閣出版
- 吉野一郎・茨木光裕 1988「南陽市埋蔵文化財調査報告書第3集 稲荷森古墳」南陽市教育委員会
- 吉野一郎・茨木光裕 1989「南陽市埋蔵文化財調査報告書第4集 稲荷森古墳」南陽市教育委員会
- 佐藤鎮雄・佐藤庄一 1990「南陽市史 上巻」南陽市市史編さん委員会
- 佐々木洋治ほか 1990「向畑C遺跡発掘調査報告書」山形県教育委員会
- 石野博信他 1992「古墳時代の研究7」雄山閣出版
- 松本洋明 1994「赤土山古墳第3次調査概報」天理市教育委員会
- 加藤次郎右衛門ほか 1995「山形県中世城館遺跡調査報告書 第1集（置賜地域）」山形県教育委員会
- 高重 進 1997「中世における空間の組織化」『高松大学紀要第27号』高松大学
- 工藤雅樹他 1997「大安場古墳群-第1次発掘報告書-」郡山市教育委員会
- 工藤雅樹他 1998「大安場古墳群-第2次発掘報告書-」郡山市教育委員会
- 黒澤俊廣・柳沼賢治 1999「大安場古墳群-第3次発掘報告書-」郡山市教育委員会
- 佐野静代 1999「平野部における中世居館と灌漑水利」『人文地理第51巻第4号』滋賀大学
- 田中 裕 2005「坪型埴輪と東関東の前期古墳-土師器とは異なる壺型埴輪の周知とその系譜-」  
『千葉県文化財センター 研究紀要24』財団法人千葉県文化財センター
- 古屋紀之 2007「古墳の成立と葬送祭祀」雄山閣出版
- 渡辺貞幸他 2008「普段寺古墳群Ⅰ」普段寺古墳群調査団
- 佐藤鎮雄ほか 2010「平安初頭の南出羽考古学」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 佐藤鎮雄 2011「やまがたの古墳時代一最上川流域のムラ古墳一」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 青山博樹 2011「土師器の編年 ⑦東北」『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』同成社
- 佐藤鎮雄 2012「中世やまがたの城館-そこに城館がある理由-」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 吉田江美子・山田 渚 2012「蒲生田山古墳群・総合公園内遺跡群」『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集』南陽市教育委員会
- 山田 渚・吉田江美子 2013「長岡山遺跡・長岡山東遺跡」『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集』南陽市教育委員会
- 鈴木素行 2013「岡田遺跡における弥生時代後期「十王台式」の集落跡について」  
『平成24年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会
- 角田朋行・吉田江美子 2014「南陽市遺跡分布調査報告書（1）」南陽市教育委員会
- 植松曉彦 2014「山形県の様相」『東生 第3号』東日本古墳確立期土器検討会
- 稲田健一 2014「茨城県北部における弥生時代後期後半の様相-「十王台式」を中心に-」  
『西相模考古学研究会記念シンポジウム資料集』西相模考古学研究会
- 渋谷孝雄・秦昭繁 2014「弥生時代の山形」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 角田朋行 2015「南陽市遺跡分布調査報告書（2）」南陽市教育委員会
- 角田朋行・吉田江美子 2015「清水上遺跡」南陽市教育委員会
- 佐藤由紀男 2015「考古学ハンドブック12 弥生土器」ニューサイエンス社
- 角田朋行 2016「南陽市遺跡分布調査報告書（4）」南陽市教育委員会
- 吉田博行・渡部智子 2016「亀ヶ森古墳Ⅳ」会津坂下町教育委員会
- 鈴木素行 2016「堀口遺跡における弥生時代後期「十王台式」の集落跡について」  
『平成27年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会
- 角田朋行 2017「南陽市遺跡分布調査報告書（5）」南陽市教育委員会
- 手塚孝他 2017「館山城ハンドブック」館山城保存会
- 藤沢 敦 2018「弥生時代後期から古墳時代の北海道・東北地方における考古学的文化の分布」  
『国立歴史民俗博物館研究報告 第211集』国立歴史民俗博物館





# 圖 版



二色根館跡字根小屋前（西から）



二色根館跡字根小屋（南から）



二色根館跡字壁の内（南から）



二色根館跡ワトイチ淵（北から）



二色根館跡 虎口（北から）



二色根館跡本丸東堀（南から）



二色根館跡本丸北斜面の石（北から）



二色根館跡本丸北斜面の石（西北から）



金山字五貫場、糠塚遠景（南から）



糠塚近景（西から）



元中山字諏訪原（東から）



岩部山館跡と元中山字諏訪原遠景（北西から）



北の沢館跡（東北から）



北の沢館跡内の庚申塔（東から）



元中山字竹原遠景（西から）



元中山字竹原北西斜面のテラス群（北から）



元中山字大貝の山の東斜面の炭焼窯跡（東から）



元中山字大貝のテラス群（北東から）



北沢遺跡遠景（東から）



日影街道切通し（北から）



日影街道切通し東南側のテラス（北から）



日影街道切通し西側のテラス（南から）



天ヶ澤館跡南斜面の帯曲輪（北西から）



天ヶ澤館跡南斜面下段の帯曲輪（東から）



松沢字赤石山、情報のあった立坑状の穴（西から）



松沢字赤石山の中腹（南から）



松沢字赤石山の尾根（北から）



松沢字赤石山の鉦山試掘跡（西南から）



松沢字赤石山の坑道跡（南から）



坑道跡内部（南から）



木之実小屋遺跡（北東から）



木之実小屋遺跡 遺物散布状況（南東から）

図版4 松沢字赤石山、木之実小屋遺跡



梨郷字平野（東から）



向畑 C 遺跡遠景（西北から）



向畑 C 遺跡 M1（西南から）



向畑 C 遺跡 M2（北から）



向畑 C 遺跡 M3（南から）



向畑 C 遺跡 M5（北東から）



向畑 C 遺跡 炭焼窯跡（南から）



金山字萱ノ入の平坦面のある斜面（北から）



金山字萱ノ入の沢内の石材（北から）



金山字芋沢付近（南から）



釜渡戸字大下（西北から）



吉野川内 二色根（西から）



吉野川堤防外の板碑（二色根、北から）



吉野川内 字湯川原（東から）



吉野川内 字前川原（東から）



池黒字八幡田（東南から）



池黒字八幡田 方形地割地点 (南から)



字鈴振田の古墓地 (南から)



池黒字八幡田 (東から)



経塚山南古墳1号墳のある尾根 (西南から)



経塚山南古墳2号墳のある尾根 (南から)



経塚山南古墳3号墳のある尾根 (南から)



経塚山南古墳1号墳遠景 (東南から)



経塚山南古墳2号墳 (東から)





経塚山南古墳3号墳（北から）



竹原字白山（南から）



天王山21号墳（北から）



和田字狩野、山頂（狩野山古墳後円部、南から）



狩野山古墳前方部（東から）



狩野山古墳全景（西から）



宮内字一本杉調査地（南から）



宮内字一本杉 TT1（東から）



宮内字一本杉 TP1 (北から)



宮内字一本杉 TP2 (北から)



宮内字一本杉 TP3 (北から)



宮内字一本杉 TP4 (東から)



宮内字一本杉 TP5 (北から)



宮内字一本杉 TP6 (北から)



宮内字一本杉 TP7 (東から)



宮内字一本杉 TP8 (西から)



宮内字一本杉 TP9 (西から)



宮内字一本杉 TP10 (北から)



諏訪原 C 遺跡調査地 (西から)



諏訪原 C 遺跡 TT1 (東から)



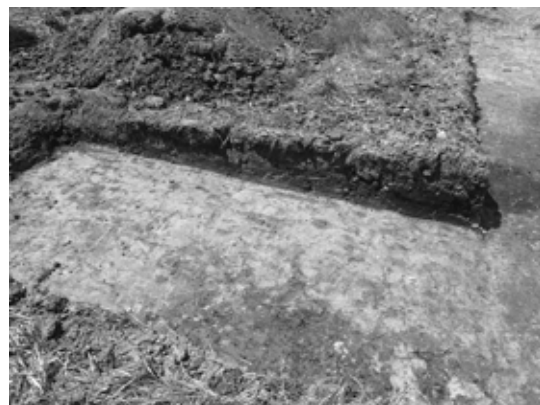
長岡山遺跡・稲荷森古墳調査区 1 (南から)



長岡山遺跡・稲荷森古墳調査区 2 (西北から)



長岡山遺跡・稲荷森古墳 TT1 (東から)



長岡山遺跡・稲荷森古墳 TT1 拡張 1 (東から)



長岡山遺跡・稲荷森古墳 TT2 (東から)



長岡山遺跡・稲荷森古墳 TT3 (東から)



漆山字西屋敷一調査地 (東南から)



漆山字西屋敷一 TT1 (南から)



大橋城跡調査地 (東北から)



大橋城跡 TT1 (西から)



関根館跡調査地 (北東から)



関根館跡 TT1 (西から)



三間通字東六角調査地（東南から）



三間通字東六角 TP1（北から）



三間通字東六角 TP2（南から）



三間通字東六角 TP3（北から）



矢ノ目館跡(1) 調査地（南から）



矢ノ目館跡(1)TP1（東から）



矢ノ目館跡(1)TP2（東から）



矢ノ目館跡(1) 遺物出土状況



漆山字東高堰一(1) 調査地 (北東から)



漆山字東高堰一(1)TP1 (西から)



漆山字東高堰一(1)TP2 (東から)



上河原遺跡調査地 (北から)



上河原遺跡 TT1 (北から)



上河原遺跡 TT2 (北から)



上河原遺跡 TT3 (北から)



上大作裏遺跡調査地 (西から)



上大作裏遺跡 TT1 (南から)



上大作裏遺跡 TT2 (西から)



上大作裏遺跡 TT3 (東から)



上大作裏遺跡 TT4 (東から)



上大作裏遺跡 TP1 (西から)



上大作裏遺跡 TP3 (西から)



上大作裏遺跡 TP5 (東から)



上大作裏遺跡 TP6 (西から)



観音堂遺跡調査地（北から）



観音堂遺跡 TP1（東から）



観音堂遺跡 TP3（北から）



観音堂遺跡 TP5（北から）



観音堂遺跡 TP7（南から）



観音堂遺跡 TP9（北から）



漆山字東高堰一(2) 調査地（北西から）



漆山字東高堰一(2) 調査地（南西から）





漆山字東高堰一 (2)TT1 (南から)



漆山字東高堰一 (2)TT3 (南から)



漆山字東高堰一 (2)TT6 (南から)



漆山字東高堰一 (2)TT8 (南から)



漆山字東高堰一 (2)TT9 (南から)



漆山字東高堰一 (2)TT15 (北から)



漆山字東高堰一 (2)TT16 (南から)



漆山字東高堰一 (2)TT21 (南から)



漆山字東高堰一(2)TT25 (南から)



漆山字東高堰一(2)TT28 (南から)



漆山字東高堰一(2)TT30 (南から)



漆山字東高堰一(2)TT33 (南から)



漆山字東高堰一(2)TT34 (東から)



沢田遺跡(1)調査地 (東南から)



沢田遺跡(1)TT2 (東から)



沢田遺跡(1)TT5 (東から)



清水上遺跡調査地（北から）



清水上遺跡 TT1（東から）



清水上遺跡 TT2（南から）



清水上遺跡 TT1・TT2 連結後（南から）



清水上遺跡 TT1・TT2 連結後（東南から）



矢ノ目館跡(2) 調査地（北西から）



矢ノ目館跡(2)TT1（東から）



矢ノ目館跡(2)TT2（西から）



沢田遺跡(2)調査地(東から)



沢田遺跡(2)TT1(北から)



沢田遺跡(2)TT2(北から)



栲塚字辻ノ前調査地(西から)



栲塚字辻ノ前TT1(東から)



栲塚字辻ノ前TT2(西から)



馬場遺跡調査地(東北から)



馬場遺跡TT1(南から)



矢ノ目館跡 (3) 調査地 (西南から)



矢ノ目館跡 (3) TT1 (南から)



上大作裏遺跡調査地 (南東から)



上大作裏遺跡 TT3 (南から)



漆山字東寺町三 (1) 工事状況 (南から)



漆山字東寺町三 (1) 擁壁工事 (東から)



宮内字黒木一 工事状況 (西から)



宮内字塔ノ越 工事状況 (南から)

図版 20 矢ノ目館跡 (3)、上大作裏遺跡、漆山字東寺町三 (1)、宮内字黒木一、宮内字塔ノ越



宮内字内原四 工事状況（東北から）



若狭郷屋字三百刈 工事地（南東から）



竹原字石仏 工事状況（西から）



漆山字東寺町三(2) 工事状況（南から）



和田字東前田 工事状況（北から）



宮内字鐘小屋二 工事状況（西から）

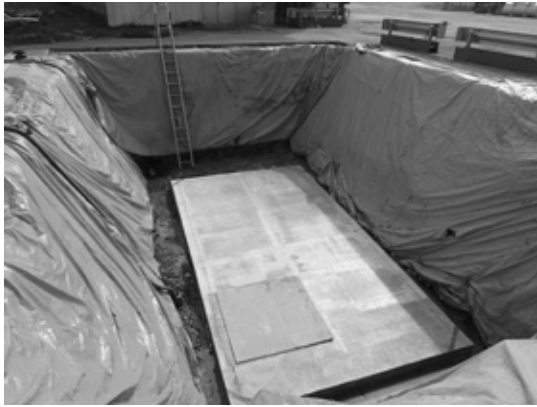


長岡山遺跡 工事状況（東から）

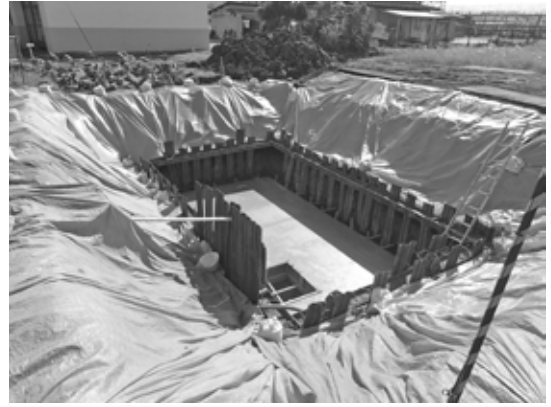


長岡山東遺跡 マウンド状地形（北から）

図版 21 宮内字内原四、若狭郷屋字三百刈、竹原字石仏、漆山字東寺町三(2)  
和田字東前田、宮内字鐘小屋二、長岡山遺跡、長岡山東遺跡



漆山字備後塚 工事状況 (西から)



若狭郷屋字浦城 工事地 (西から)



長岡南森遺跡 草刈り



長岡南森遺跡 テント設営



長岡南森遺跡 TT1 設定 (西から)



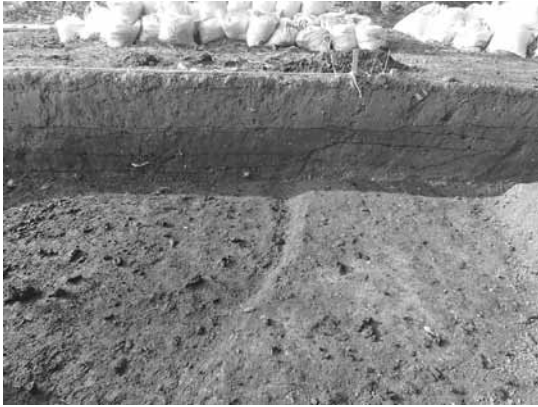
長岡南森遺跡 TT2 設定 (西から)



長岡南森遺跡 TT1 掘下げ



長岡南森遺跡 TT2 掘下げ



長岡南森遺跡 低地の検出状況



長岡南森遺跡 TT1 低地部 遺物出土状況



長岡南森遺跡 TT1 低地部 遺物出土状況



長岡南森遺跡 TT2 遺物出土状況



長岡南森遺跡 TT1 土坑検出状況 (西から)



長岡南森遺跡 TT1 焼土遺構



長岡南森遺跡 土坑底面の遺物出土状況



長岡南森遺跡 土坑中層の遺物 (脚部に炭化物) 出土状況





長岡南森遺跡 TT1 平坦面肩部



長岡南森遺跡 TT2 平坦面肩部



長岡南森遺跡 TT1 (西から)



長岡南森遺跡 TT1 (南から)



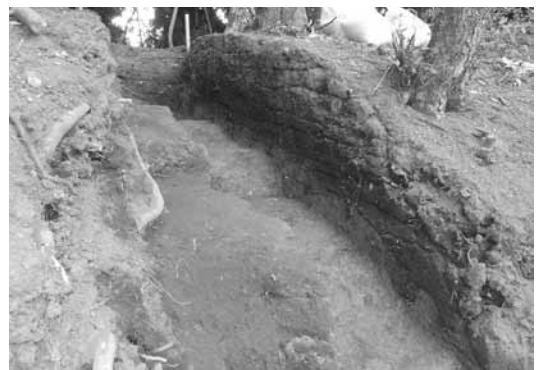
長岡南森遺跡 TT1 下段斜面 (西から)



長岡南森遺跡 TT1 低地部 (南西から)



長岡南森遺跡 TT2 (西から)



長岡南森遺跡 TT2 下段斜面 (西北から)

# 報告書抄録

ふりがな	なんようしいせきぶんぶちょうさほうこくしょ (だいいちじながおかみなもりいせきかくにんちょうさ)							
書名	南陽市遺跡分布調査報告書 (7)							
副書名	第一次長岡南森遺跡確認調査							
巻次								
シリーズ名	南陽市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 19 集							
編著者名	角田朋行							
編集機関	南陽市教育委員会							
所在地	〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地の 1 TEL 0238-40-3211							
発行年月日	2019 年 3 月 3 1 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しないいせき 市内遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 ちない 地内	6213	—	—	—	20180320 } 20190213	—	—
ながおかみなもりいせき 長岡南森遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 ながおか 長岡	6213	052	38° 02' 13"	140° 9' 28"	201800507 } 20180625	100㎡	遺跡確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
しないいせき 市内遺跡	—	縄文 古墳 古代 中世		—	縄文土器・土師 器・須恵器	—		
ながおかみなもりいせき 長岡南森遺跡	散布地	縄文 古墳		地山成形の斜面、 平坦面、低地	縄文土器・土師 器	長岡南森遺跡の性格把握と、 丘陵の地形確認を目的とした 調査		
要約	<p>市内遺跡：市内における各種開発事業に伴う踏査、試掘調査、立会調査及び広域分布調査</p> <p>長岡南森遺跡：遺跡は、国指定史跡の前方後円墳である稲荷森古墳から南東へ 130 m に位置する独立丘陵に立地する。南森丘陵自体が古墳である可能性もあることから遺跡の性格を把握するため第一次確認調査を実施した。丘陵の自然斜面を人工的に切土し、斜面及び幅約 4～5 m の平坦面を形成していること、平坦面外縁部も同様に自然斜面を掘り込んで低地を成していることを確認した。遺構は、斜面半ばのテラス帯で祭祀遺構とみられる大型土坑を確認した。遺物は、旧表土に伴う縄文土器と古墳時代前期の土師器が主に出土した。低地・平坦面・斜面からは、二重口縁壺、高坏、器台、甕、彩色土器等が出土した。大型土坑からは、割って埋められたとみられる多種多様な土器片が出土した。</p>							

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 19 集  
南陽市遺跡分布調査報告書（7）  
第 1 次長岡南森遺跡確認調査  
2019 年 3 月 3 1 日

発行 南陽市教育委員会  
〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地の 1  
電話 0238-40-3211（代）  
印刷 有限会社文進堂印刷  
〒 999-2221 山形県南陽市柵塚 811 - 3  
電話 0238-43-2116







